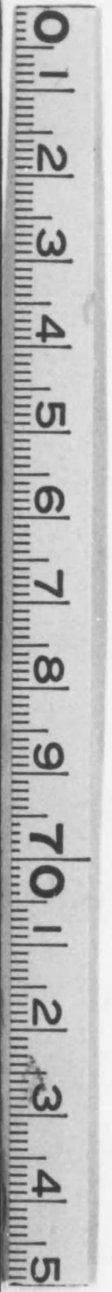
913.36-Ka53イウ
1200700966039
913.36
KA53イ
(3)ウ
O 複写



始

35.11.24

913.36
Ka53f

定本 源氏物語新解

金子元臣著

東京 明治書院

宗達筆　（關屋屏風）

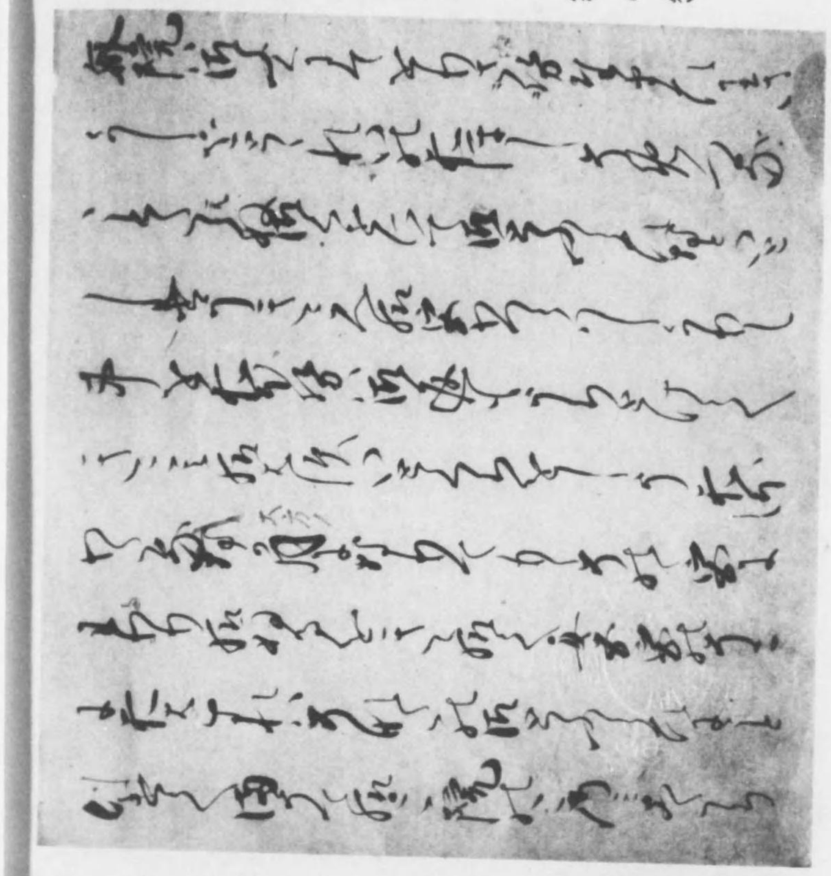
（岩崎男爵家藏）

国立国会
25.7.25
図書館
U 5549

河内本残巻　（鰯鮨の巻）

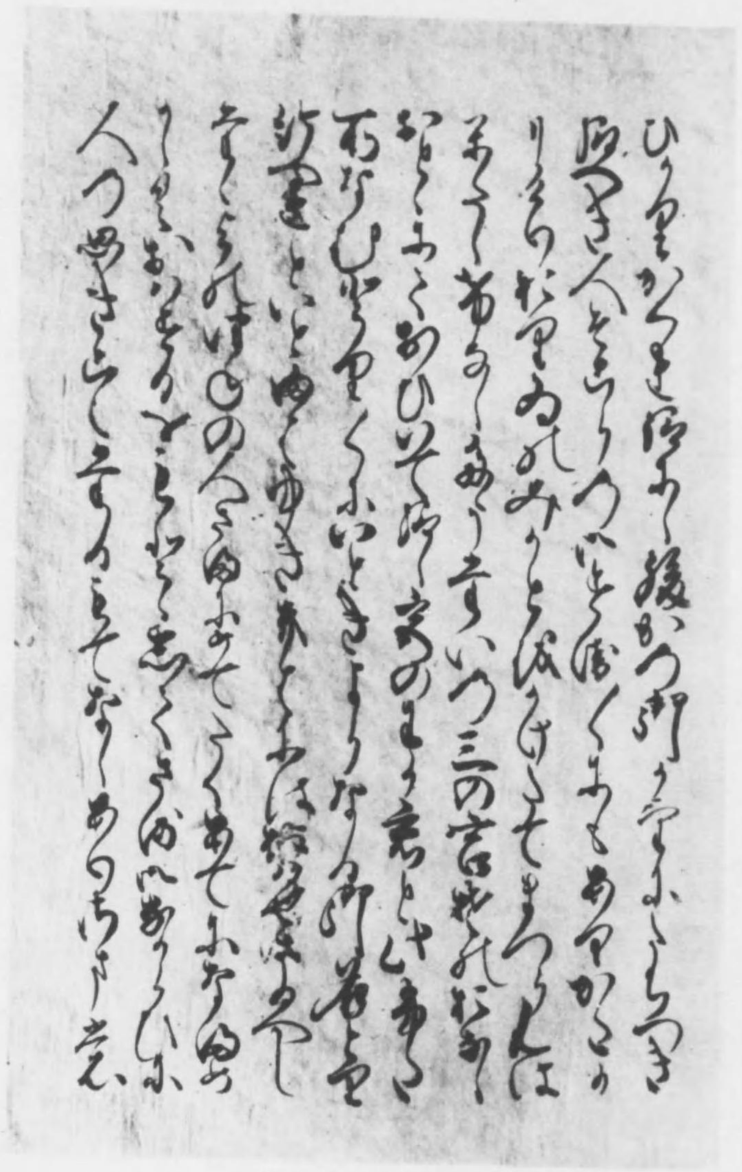
（帝國圖書館藏）

（巻の種）

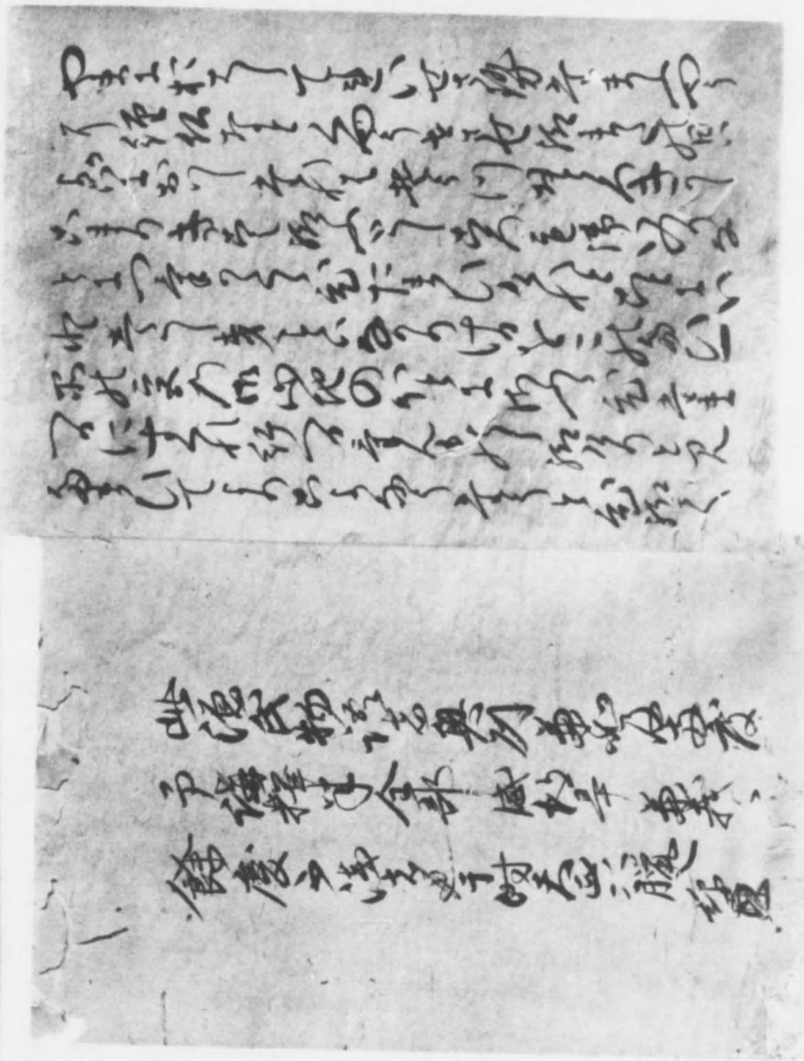


（十条者業）

筆為明條二御



(上架者著)



緒言

一、この定本の目的は既に宣言した如く、流布の青表紙本を底本として、各種の異本を校勘して、善本を作らうとしたものである。それに現代稀覯の河内本を主とした事は勿論であるが、青表紙系統の各種の寫本校本も數多參酌して、その宜しきに從つた から、青表紙といへば、湖月抄の外を知らぬ人が見たら、或は卷によつては、一寸一種の別本のやうな氣がするかも知れない。この事は中卷の緒言中にも既に斷つて置いた如く、湖月抄などの本文と相違して居る點は、全部河内本の本文だと速了してはなりません。本文研究に指を染めた人なら、この書が青表紙本の定本としての存在の意義を、直ちに了承してくれるであらう。

一、源氏物語の禮讃はさて置く。とにかく古典だから、解讀が面倒である。さりとてその參考に、今時もう湖月抄でもあるまいではないか。あれは國文學史上舊研究時代の遺物で、典故を繹ねる外に、大した益は得られない。現代には自然現代的のやり

方がある。そこでこの新解を提供して、學者の必要に應ぜしめたのである。只本書の性質上、批評鑑賞は勿論、解說にせよ、考證にせよ、その十分を悉すことの出來ないのは、多少遺憾であるが、それは止む得ない事として、讀者も必ず亮恕されることゝ信じて疑はない。

一、定本と新解との兩翼を張つて進行して來た、本書著述の最初からの目的は、幸にこゝに達成し得た。かくて微力ながらも學界に相應の反響を起し、多少の貢獻をなし得たことを、竊に喜んでゐる。更に一歩を進めた詳密なる研究に至つては、他日源氏物語評釋を著して、弘く世に問ひたいと思つてゐる。

一、河内本系統のものは、上卷の「定本源氏物語に就いて」と題する論文中に擧げたものの外に、その後發見され、又はその存在の確になつたものに、京都東山御文庫中の二種の寫本、及び東京帝國圖書館に存する零本蜻蛉の卷がある。蜻蛉の卷は私所藏の河内本中、關本に屬する部なので、早速に對校に用ゐた。

一、口繪は岩崎男爵家藏俵屋宗達の筆關屋屛風の一部(著色)二葉、傳二條大納言爲明筆零本朝顏の卷、傳連歌師周桂筆匂宮の卷、連歌師紹巴筆夢浮橋の卷及び奥書、帝國圖書館藏河内本零本蜻蛉の卷おの〳〵一葉を掲げた。

一、卷末に、作者未詳(傳世尊寺伊行作)の「山路の露」及び、本居宣長作の「手枕」の二篇を參考の爲に添へておいた。又光源氏君及び薫君を中心として、五十四帖を組織した年譜と、篇中に出現する重要なる人物系圖とを掲げた。これで大抵遺憾の點はなからうかと思ふ。

一、本書完成の經緯は、卷尾の跋文によつて委細を承知せられたい。

昭和五年一月

金子元臣しるす

たゞならじとばかり叩く水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

珍しき光さし添ふさかづきはもちながらこそ千代もめぐらめ　（紫式部集）

下卷目次（内容索引）

匂宮

源氏の後繼者―三宮と宮の若君……一四八一
紫上の三宮愛育……一四八二
皇子達と夕霧の姫君達……一四八三
源氏の寵人六條院を退散……一四八三
落葉宮六條院に入る……一四八四
夕霧源氏及び紫上を追懐……一三八四
宮の若君元服―冷泉院及び大后の愛撫……一四八五
若君わが出自を疑ひ出家を思ふ……一四八七
帝后もまた若君を親愛……一四八八
若君の體香―薫中將……一四八九
匂兵部卿宮……一四九一
匂宮院の女一宮を思慕……一四九二
薫の操持……一四九三
夕霧六君を落葉宮の養女となす……一四九五
六條院に於ける賭弓の還饗……一四九五

紅梅

按察大納言眞木柱を後妻とす……一四九九
眞木柱の優美なる情合……一五〇〇
按察嫡女を東宮に納る……一五〇一
匂宮按察の中君に懸想……一五〇一
按察連れ子の姫君を慰む……一五〇三
按察が琵琶につきての感想……一五〇四
按察若君を以て紅梅を匂宮に獻ず……一五〇六
若君匂宮に睨む……一五〇八
匂宮却て宮の姫君に戀慕……一五一三
按察再び匂宮に消息……一五一三
按察夫妻匂宮と薫とを評す……一五一三
匂宮と按察との思はく違ひ……一五一三

竹河

主人薨後の髭黒家の寂寞……一五一五
冷泉院その姫君を御所望……一五一七
夕霧の息緣人少將また姫君を慕ふ……一五一八

薫玉鬘(侑侍)に愛でらる……一五二九
元旦夕霧子息を率ゐ玉鬘訪問……一五三〇
玉鬘姫君の縁遠に迷ふ……一五三一
薫の玉鬘邸訪問……一五三三
薫の優委……一五三三
玉鬘及び子息藤侍従薫を款待……一五三四
まめ人薫再び玉鬘邸訪問……一五三四
薫の和琴—藤侍従の竹河……一五三五
少将薫を美む……一五三八
薫姫君に氣色ばむ……一五三九
姫君姉妹の艶麗……一五三九
姉妹の圍碁に藤侍従の見證……一五四〇
左中将亡父(髭黒)を慕ふ……一五四二
姉妹櫻花を賭す……一五四二
姉姫の敗北—双方の花爭の歌……一五四三
院より姫君宮仕の御催促……一五四五
少将の苦惱—母雲居雁より玉鬘に懇請……一五四六
玉鬘の意中……一五四六
少将玉鬘の侍女中将に愁訴……一五四七
卯月玉鬘の侍女懸想人を評す……一五四九
姉姫遂に院參……一五五〇
少将絶望—姫君返歌……一五五三
院の藤花に薫失戀を訴ふ……一五五四
少将煩悶院の出仕を怠る……一五五五
主上兄中将に姉姫の院參を詰問……一五五五
中将母君を非難—玉鬘の困惑……一五五六
新年男踏歌院に參る—薫右方の歌頭……一五五八
少将踏む空もなく舞ふ……一五五九
薫翌日院に召さる—少将の舞の評—女房薫を揶揄す……一五五九
院の御息所(姉姫)と薫との合奏……一五六一
卯月院の女二宮(御息所腹)降誕……一五六二
母尚侍の後任として妹姫入内……一五六三
玉鬘院參を憚る—御息所及び院の怨言……一五六四
弘徽殿漸く御息所を疎む……一五六五
源侍従は宰相中将に、蔵人少将は三位中将に……一五六六
夕霧は左大臣、紅梅は右大臣、薫は中納言、三位中将は宰相……一五六七
薫慶申に玉鬘訪問……一五六八
玉鬘御息所の苦衷を語る—薫は冷淡……一五六九
紅梅の大夫に匂宮不參……一五七〇
宰相中将玉鬘にその悲戀を訴ふ……一五七一

橋姫

源氏の弟八宮の失意—北方産後逝去……一五七三
姫君二方の容貌性格……一五七五
八宮の厭世と獨身……一五七六
たゞ姫君を愛撫—池の水鳥を見ての感懐……一五七七
姫君達も故母君を慕ふ……一五七八
家運漸く衰類—遂に宇治に逼塞……一五七〇
益々北方を追慕……一五七一
宇治山の阿闍梨を唯一の法友……一五七一
阿闍梨八宮の道才を院に奏す—薫宮を景慕す……一五七三
院八宮の姫君をゆかしむ—院の御使宇治に至る……一五七三
阿闍梨八宮に薫を稱譽す……一五七四
薫の宇治山莊訪問—佛徒としての八宮の態度……一五七六
暮秋八宮阿闍梨の寺に籠居……一五七八
薫殘月に宇治を訪ふ……一五七八
姫君達の奏樂……一五七九
薫姫君達を垣間見る—月を招く袖……一五八一
簾を隔て姫君と對す……一五八三
老女辨が柏木の追憶談……一五八五
薫始めて大君と歌の贈答—宇治の風光……一五八八
姫君及び山籠りの八宮に音物……一五九一
姫君の噂に薫匂宮を唆かす—薫の聖詞……一五九三
薫の宇治訪問……一五九四
談義の後八宮と薫との合奏……一五九六
八宮後事を薫に託す……一五九七
薫更に辨より兩親の秘密を聞く—記念の袋……一五九八
薫三條宮に歸る……一六〇一
袋を開いて柏木の遺書を見る……一六〇一

椎本

春匂宮の長谷詣……一六〇五
夕霧の宇治別業に宿泊—夕霧一家の款待……一六〇六
八宮遙に薫の笛聲を怪しむ……一六〇七

八宮薫へ消息—匂宮のさし出……一六〇八
薫舟に棹して八宮の山荘に詣る……一六〇九
匂宮より姫君へ消息……一六一〇
八宮中君に匂宮への返書を命ず……一六一一
八宮子故に出離を沮む—軽浮なる縁談を卻く……一六一三
七月薫久々にて宇治を訪問……一六一三
八宮姫君達を薫に托す—薫の快諾……一六一五
月夜八宮、宮中の女樂を談ず—薫姫君の奏樂を所望……一六一四
薫と姫君達との清談……一六一六
匂宮の眞意を誤認して姫君應酬す……一六一七
仲秋八宮遺言して山寺に籠る……一六一八
八宮結願の日より罹病—遂に薨逝……一六二一
阿闍梨姫君達に告別を許さず……一六二一
薫の悲歎と弔問……一六二一
九月姫君達の心喪……一六二三
匂宮屢姫君に消息—返書時に有無……一六二四
姫君の戒慎……一六二七
薫宇治を訪問—薫の眞情に大君對話……一六二八
薫辨と泣いて語る—辨の素性……一六三〇
薫雁聲に無常を觀ず……一六三三
薫匂宮常に宇治姫君を話題とす……一六三三
姫君達の悲觀……一六三三
山荘の冬の光景—姫君父宮を追慕……一六三四
年内薫宇治を訪問……一六三五
姫君達漸く薫に親しむ—薫匂宮を媒す……一六三六
薫大君に情意を洩す—大君答へず……一六三九
雪の夕薫主從を饗す—宿直人の愚痴……一六四〇
新年阿闍梨岸嵓を姫君に奉る……一六四一
花盛の頃匂宮宇治に消息す—中君無情……一六四三
匂宮媒の薫を責め恨む……一六四三
三條院燒失、入道宮六條へ移住……一六四五
薫宇治に納涼—姫君を隙見……一六四四

總角

八宮一週忌の法會—名香の絲……一六四七
總角の歌の贈答……一六四八
薫、匂宮及び自己の意中を大君に告白—大君薄命を自覺……一六五〇

辨に情誼を說き大君の意向を問ふ—中君を身代り……一六五二
薫戀の對象の變更難を力說す……一六五四
薫通宵姫君と語る—信頼を裏切り大君に近づく……一六五六
薫の體よき分疏—大君遂に應ぜず……一六五八
事あり顔の曉の別……一六六〇
大君薫の戀を中君に讓るべく決心……一六六二
中君大君の移香を怪しむ—姉心は親心に……一六六二
九月宮の忌明に薫宇治を訪ふ……一六六四
侍女等の薫歡迎—大君遺誡を思ふ……一六六五
薫なほ宇治に……一六六七
大君は薫に中君を、辨は大君に薫、中君に匂宮を……一六六八
辨大君の意思を薫に傳ふ……一六七一
風の夜薫姫君の閨に忍ぶ—不意に中君と語り明す……一六七二
姉妹主從心々……一六七三
薫の愚痴—大君へ消息……一六七五
薫匂宮を訪問—主客の閑談は宇治の中君を中心……一六七八
匂宮を伴ひ宇治に詣る……一六八一
先づ侍女を欺いて大君に會ふ—匂宮薫の傀儡として中君の閨に忍ぶ……一六八一
大君の峻拒に薫失望……一六八三
曉方歸京—匂宮の後朝の文……一六八六
同夜匂宮また宇治に詣る—大君中君を慰藉す……一六八八
薫宇治に衣服を贈る……一六九一
中宮匂宮を訓戒……一六九三
三日の夜薫匂宮に宇治行を勸む—匂宮馬を宇治に走らす……一六九五
中宮の御方の秀麗—薫に訴へ給ふ匂宮の不良……一六九五
中君を讃美する老女等……一六九五
宇治における匂宮の後朝—夜離の豫告……一六九六
匂宮の熱心に薫の安心……一六九九
暮秋匂宮薫同車して宇治に詣る……一七〇〇
大君薫を他人扱……一七〇一
匂宮中君の進退に考慮……一七〇三
初冬匂宮忍びて宇治の紅葉見……一七〇五
左衞門督の公式參會—宮大夫の御迎……一七〇八
匂宮の計畫齟齬……一七〇九
宇治の姫君の噂—人々の秋興……一七一〇
姫君姉妹の失望懊惱……一七一二

帝中宮匂宮の微行を制す—夕霧の六君を許婚……一七一五
薫の怪しき悔恨—匂宮中君を思慕……一七一五
匂宮女一宮に參る—在五の繪……一七一六
薫宇治に大君の病を訪ふ—匂宮の夜離を辯護……一七一八
大君匂宮の近臥に中君を憐む……一七二〇
中君夢に父宮に逢ふ……一七二三
匂宮の消息—大君中君を訓ふ……一七二三
十一月薫宇治を訪ひ大君の危篤に愕く……一七二六
大君平癒の祈禱……一七二七
薫大君の手を捉へて泣く……一七二七
阿闍梨の夢語り—八宮の魂子故に迷ふ……一七二九
常不輕の聲に一座の哀愁……一七三〇
薫公私を擲ち大君の介抱……一七三一
大君出家の希望……一七三二
薫の見たる大君の病褥—最後の會話……一七三三
大君逝去　薫火を挑げて遺骸を見る……一七三六
薫追慕宇治に籠居す……一七三七
雪風の夜の感懷—半なる偈……一七三九
大君匂宮を不實と遺恨—雪中中陰に匂宮宇治を訪ふ……一七四〇
中君物越にて匂宮に對面……一七四一
歳暮忌中の寂寥……一七四五
匂宮中君を二條院に迎へんとす……一七四五

早蕨

新年阿闍梨例の蕨など中君に贈る……一七四七
薫匂宮を訪ひ主客宇治の姫君を懐ふ—岩瀬の森の呼子鳥……一七五一
二月中君出京の決心—薫の厚意……一七五四
出京の前日薫中君に對面……一七五五
薫紅梅に懐舊……一七五七
辨尼と會談……一七五八
中君辨尼に名殘を惜む……一七六〇
中君二條院に入る—薫匂宮の實意を喜ぶ……一七六四
六君の御裳着—薫六君との縁談を卻く……一七六五
花盛に薫中君を訪ふ……一七六五
匂宮薫の優待を中君に求む—輕き嫉妬……一七六七

宿木

女二宮と母藤壺女御……一七六九
女二宮の裳着—母女御の逝去……一七六九
帝女二宮を鍾愛……一七七一
薫に降嫁の思召……一七七二
薫と圍碁……一七七三
賭物に女二宮……一七七四
夕霧六君を匂宮にと決意—中宮この縁談に贊成—匂宮紅梅の御方にも有情……一七七六
薫の縁組進行……一七七七
中君の煩悶—懐妊の惡阻……一七七八
薫匂宮の花心を惡む……一七八一
薫が大君追慕の念は中君の上に……一七八三
薫朝顔を折りて二條院を訪ふ……一七八四
二條院の朝の匂……一七八五
中君を妹の如く戀想人の如く……一七八七
嶷峨院六條院の盛衰……一七八八
中君宇治に退居を仄めかす……一七九〇

宇治の寢殿は寺に……一七九〇
薫の淨行—母宮の不安……一七九二
夕霧匂宮を壻取る……一七九二
中君月に對して悲觀—侍女等の慰藉……一七九四
匂宮の花壻振—その後朝の文……一七九七
極力中君の機嫌を伺ふ……一七九八
六君の返書を諸共に見る……一八〇〇
中君のあきらめ—六君行の前觸の聲……一八〇一
六君の三日の夜の盛儀—一家の款待—薫の供人の腹立……一八〇三
薫の心誇り—按察の君との後朝……一八〇六
匂宮が見たる六君の容姿—中君への夜離……一八〇九
父宮の法事に中君薫に感謝……一八一〇
薫中君の歡娯—宇治行の相談……一八一一
薫袖を捉へて中君に迫る—薫の自制……一八一四
翌朝薫よりの文—薫の情炎……一八一七
匂宮中君に反る—しるしの帶……一八一九
怪しの移香……一八二〇
六君の豪華と中君の質素……一八二三

匂宮の疑心薫の艶書を捜す……一八三三
薫中君に衣服を貢ぐ……一八三四
乳母等匂宮を誘る—薫の同情心……一八三五
中君の板挟み—薫を夜居僧の座に……一八三七
中君の假病—薫、諄々とわが老實を說く……一八三九
山寺の本尊に大君の人形……一八四一
中君話題を浮舟の上に移す……一八四三
本尊代りに浮舟……一八四四
九月薫宇治山莊の模様替に着手……一八四六
辨が柏木及び大君の追懷……一八四九
形代の身上話—薫辨に取持を依頼……一八五〇
宿木の歌……一八五二
匂宮中君の許に薫の消息を檢す……一八五二
前栽を興じて匂宮夫妻の演奏……一八五六
夕霧匂宮を自邸に誘ふ……一八五八
中君の產の惱み……一八五九
二月薫權大納言の右大將—奏慶と司召……一八六一
中君男宮を分娩—產養の盛觀……一八六二
女二宮の御裳着及び薫との婚儀……一八六三
主上薫の母宮(女三宮)に消息……一八六五
宮の若君五十日の祝—薫若君に對面……一八六五
三月盡女二宮方の藤の宴……一八六八
薫天盃を賜ふ—按察大納言の後言……一八六九
女二宮薫邸に移る……一八七三
薫宇治にて長谷詣の浮舟の一行に落合ふ……一八七三
障子の穴に映る美人の影……一八七五
興ざましの田舍女房……一八七七
辨尼の客あしらひ—薫の滿悅……一八七八
薫辨尼に前約を責む……一八七〇

東屋

薫の浮舟に對する躊躇……一八七三
母北方の溺愛—常陸介の無骨……一八七四
左少將浮舟に懸想……一八七五
少將の變約—浮舟は介の繼子……一八七七
介の末女に婚約の振替……一八八〇
捧腹すべき介の自讚と緘口……一八八三
賢き少將の君……一八八五

少將の變約に北方の憤慨……一八八六
介浮舟の婿取支度を流用……一八八九
北方浮舟を伴うて中君を訪ふ……一八九一
北方の見たる匂宮夫妻の光彩……一八九四
みじめなる婿の少將……一八九五
北方中君と薫を噂す……一八九七
浮舟の前途を悲觀……一八九八
浮舟を中君に托す……一九〇〇
薫の心ある來訪……一九〇一
うたての聖心……一九〇三
北方浮舟を薫にと志す……一九一四
北方浮舟を殘して歸宅……一九一六
匂宮歸邸北方を訝る……一九一七
中君のゆする—匂宮ふと浮舟に近づく……一九一八
乳母の困惑—右近中君に注進……一九二一
中宮御惱の使—匂宮心ならず浮舟を綴す……一九二三
匂宮乳母の手を抓む……一九二四
常陸夫妻の諍—乳母浮舟を慰む……一九二五
匂宮參內……一九二六
中君わざと浮舟を招く……一九二六
姉妹の懇話……一九二九
北方周章浮舟を引取る……一九三二
浮舟三條に假住居……一九三三
北方少將に唧む……一九三四
少將の語る匂宮の萩—北方少將を試む……一九三五
浮舟の人戀しさ……一九三七
薫宇治の新居に辨と浮舟を語る……一九三九
辨に强ふる直接運動……一九四〇
辨出京浮舟を訪ふ……一九四三
薫辨を介して浮舟に逢ふ……一九四三
浮舟を伴うて宇治に詣る……一九四七
途上追懷の淚—浮舟の嬌態……一九四七
薫浮舟の許に淹留……一九四〇
琴を弄んで故八宮を偲ぶ—楚王臺上の朗詠……一九四三
薫なほ大君を懷ふ……一九四五

浮舟

匂宮夫妻の乖離……一九四五

薫の緩怠浮舟を放置……一九四七
正月浮舟艶籠を中君に贈る……一九四九
匂宮怪んでその文を検す……一九四九
匂宮内記を召し宇治の動静を探る……一九五三
内記の洩らす薫の秘密……一九五三
匂宮宇治に夜行……一九五四
内記の偵察—匂宮の隙見……一九五六
浮舟及び侍女等の世間話……一九五七
匂宮に似せて浮舟の閨に入る……一九六〇
翌日も滞留……一九六二
右近匂宮に抗議す……一九六三
物忌に託して北方の迎を卻く……一九六五
匂宮終日浮舟と戯る—浮舟の移り氣……一九六六
都方の事情を時方報告—女こそ罪深う……一九六八
匂宮尊大の御身を憾む—未明歸京……一九六九
中君との情話—薫への疑惑……一九七二
薫の匂宮訪問……一九七四
薫久し振に浮舟を訪ふ—浮舟の眼に映じたる薫の老實……一九七五
處がら薫の感慨……一九七八
二月十日内裏の作文……一九七九
雪を冒して匂宮密に浮舟を訪ふ……一九八一
匂宮浮舟を拉して宇治河に泛ぶ—橘の小島の契……一九八一
因幡守が家に兩者の綢繆—中空の咎め……一九八四
匂宮歸京不例……一九八八
路を隔てゝ永く相思ふ……一九八九
匂宮薫兩方の使宇治に落合ふ……一九九〇
薫愈浮舟を京に迎へんとす—匂宮も……一九九二
浮舟困惑、北方その憔悴に驚く……一九九四
北方辨と男方の噂……一九九五
疎ましき宇治河—浮舟の爲の祈祓……一九九七
匂薫の使者又落合ふ—秘密露顯の端緒……一九九九
薫六條院の中宮御殿に參進……二〇〇〇
使者の隨身薫に祕密を報告—薫その情事に自重なるを感ず……二〇〇一
浮舟に殘る未練……二〇〇三
薫の消息に浮舟赤面……二〇〇四
右近實例を引いて强意見—侍從は日和見說……二〇〇六
内舍人薫の命により山莊を監視……二〇〇九
浮舟危惧文發を水火に附す……二〇一一
匂宮返書なきを訝り山莊を訪ふ……二〇一一
右近拒んで入れず……二〇一四
障泥を敷きて匂宮侍從と語る……二〇一四
浮舟匂宮を慕ふ—投身の決心……二〇一八
北方凶夢に浮舟を心配……二〇二〇
周圍の人々の焦慮……二〇二一

蜻蛉

浮舟の行方不明—投身の疑……二〇二三
匂宮の使宇治の變事を復命……二〇二五
時方更に巨細を聽取す—乳母の悲歎……二〇二六
北方浮舟の生死を疑ふ……二〇三〇
遺書により入水と暫定……二〇三一
假に遺物を車に納めての葬送……二〇三三
薫報を得て葬儀の怱卒を詰る……二〇三四
薫は情理相関ぐ—匂宮は只放心……二〇三五
匂宮の不例見舞……二〇三七
薫浮舟の顚末を語りて匂宮を試む……二〇三九
人未石にあらざれば……二〇四一
薫匂宮の時鳥に寄する感傷……二〇四二
匂宮時方に右近を迎へしむ—侍從參る……二〇四三
終夜浮舟の話……二〇四五
薫宇治に來り事情を檢察す……二〇四七
右近すべてを白狀……二〇五一
薫追善の法事を命ず……二〇五四
浮舟の遺族に公私の助力—獻る帶と太刀……二〇五五
常陸介内情を聞いて悔む……二〇五八
浮舟四十九日の作善—帝を始め有緣の布施……二〇五九
薫女一宮の小宰相に語らふ……二〇六〇
夏六條院の御八講……二〇六二
薫一宮を隙見して懸想—御前に氷もて遊ぶ……二〇六三
女二宮に一宮を眞似しめて見る……二〇六五
中宮に姉妹の宮の御文通を懇願……二〇六七
渡殿の前に朔の君達を調ず……二〇六八

侍女大納言、浮舟の三角關係を嘆……二〇六九
二宮に一宮より消息、中宮より繪—蕗芹川大將の繪を一宮に贈る……二〇七一
匂宮浮舟の形見に侍從を迎ふ……二〇七三
宮君中宮に參る—薫匂ともに懸想……二〇七四
侍從の見たる匂宮薫の人品……二〇七六
薫渡殿に女房達と戯る……二〇七七
匂宮に持つ輕き綾垣……二〇八一
月の夕中將と薫との面白き應答—掻鳴す箏と和琴……二〇八二
西の對に薫宮君の聲を聞く……二〇八三
蜻蛉の歌……二〇八五

手習

橫川僧都の母妹の尼長谷詣……二〇八七
歸路大尼の老病—僧都宇治に向ふ……二〇八八
宇治院の樹下の白き物……二〇八九
人か狐か……二〇八九
僧都の同情……二〇九二
妹尼浮舟を扱ふ—浮舟素性を明さず……二〇九四
下衆の語る宇治の姫君の葬送……二〇九七
一同比叡阪本の小野に歸る……二〇九七
僧都浮舟の物の氣を調ず……二〇九九
浮舟投身當時の狀況を語る……二一〇二
浮舟受戒……二一〇四
妹尼浮舟を娘の代り……二一〇五
小野の秋色—浮舟の感慨……二一〇六
蜻の中將小野を訪ふ—中將が追慕の淚……二一〇八
中將浮舟の後手を訪る……二一一一
中將橫川に弟禪師と語る—歸途小野を再訪……二一一四
妹尼浮舟を語る—中將意動く……二一一五
八月中將鷹狩の途次又小野を訪ふ—妹尼は交涉役……二一一六
落花有情流水無心……二一一八
中將笛吹く—大尼の僻ごと……二一二〇
中將の絕えぬ音信—浮舟讀經を練習……二一二四
九月妹尼また長谷詣……二一二五
浮舟侍女少將と圍碁……二一二六
中將來り挑む—浮舟大尼の室に避く……二一二八
老女のいびき大尼の目影—盡きぬ追憶は薫や匂や……二一三〇
僧都出京の途小野を訪ふ—浮舟出家の許可を大尼に乞ふ……二一三三
僧都一往浮舟を說諭—浮舟の固き覺悟……二一三四
遂に落飾……二一三六
物寂しき手習—中將の周章と落膽……二一三八
妹尼歸庵浮舟の出家に驚く……二一四〇
僧都の新禱に一品宮御平癒……二一四一
夜居に僧都宇治院の怪異を啓す……二一四一
中宮小宰相共に浮舟の生存を識る……二一四三
僧都妹尼に怨まる—命は葉の薄きが如し……二一四四
中將妹尼を訪ふ—浮舟を隙見……二一四五
愈浮舟に執心—出家後浮舟漸く元氣……二一四七
新春に漂ふ暗愁……二一五〇
紀守大尼を訪ひての會談……二一五三
浮舟の法要準備に薫宇治に泣く……二一五四
浮舟聞いて心緒萬端—妹尼怪しむ……二一五五
薫中宮に宇治の事を奏す—中宮のそ知らぬ顏……二一五七
小宰相僧都の物語を薫に打明く……二一五八
薫の驚愕と分別……二一五九
匂宮を卿んで薫暗に中宮の口占を引く……二一六一
橫川に浮舟を訪はんと薫の決心……二一六三

夢浮橋

薫橫川に僧都を訪ひ、小野の消息を伺ふ……二一六五
僧都具に浮舟の始終を語る……二一六五
薫僧都に傳言を賴む……二一六八
薫小君の紹介書を僧都に强請……二一六九
小野の尼達薫の行粧の火を望む……二一七一
翌日薫小君を小野に遣る……二一七三
浮舟宛の僧都の消息……二一七四
妹尼、浮舟小君を姉弟と曉る……二一七六
浮舟薫を避けんとす……二一七七
小君薫の消息を浮舟に傳ふ……二一七九
濃やかなる薫の情緒—浮舟困惑……二一七九

目次

妹尼の取成したる返書……二八〇
薫の猜疑……二八一

附錄

手枕……一―九
山路の露……一―二九
源氏物語年譜……一―三六
源氏物語系圖……
跋……

光隱れ給にひし後―源氏薨去の後との意。光源氏と稱する故にいふ。源氏は幻の卷以後は嵯峨院に隱棲し、數年にして薨ぜられた由下文に見える。

かの御影に……源氏の才能德量容儀等のお光に立擴くほどの人物が澤山の御子孫中にも容易に無い。

おりゐの帝を……冷泉院上皇を源氏の御子として申上げるのは勿體ない。おりゐは讓位の意。

當帝の三の宮―匂宮。

そのおなじ御殿……同じ六條院の御殿で育つた薫と。宮は女三の宮。

清らなる御名―お美しいといふ評判。

いとまばゆき……大して目のくらむ程のお立派さではないやうだ。

たゞ世の常の……只尋常一樣の人品としてはお立派に優雅でいらつし

國立國會圖書館藏書

定本 源氏物語新解 下

匂宮（一名、匂兵部卿、また薫中將）

この卷は薫十二歳の秋の事、源氏の歿後、世は火の消えたやうな樣で、只第三皇子匂宮と薫とが稍源氏の面影を忍ばせるのみである。匂宮は紫ノ上の遺言で二條院に住み元服して兵部卿宮と稱し、薫は侍從から中將に昇つた。六條院は人少くなつたが、夕霧は自分の在世中は父君の時同樣に花々しくしたいと思ひ、丑寅の御殿に落葉ノ宮を移し、三條なる雲居ノ雁の許と往來してゐた。薫は自分の生立に就いて疑ふ點が多く、殊に母君がうら若い身で尼になつてゐるのを見ても、この不審は愈深くなり、いつそのこと出家して母君の罪を贖はうかと思つてゐる。薫は源氏程の美貌ではないが、上品で身體に一種不思議な香氣を持つてゐるので、匂宮は羨んで、色々に香を焚いて見たが及ばない。二人は薫る中將、匂ふ兵部卿と諢名され、娘持つ親達の注目の的となつた。匂宮は冷泉院の姫宮に思を懸け、姫宮も匂宮を愛するやうになつた。薫は出家の志があるので戀に心を狂はすやうな事はなく、一人二人の通ひ處は無論あつたが、心から愛する女は無かつた。

卷の名は、「例の世の人は匂ふ兵部卿、薫る中將と聞きにくゝいひ續けて」とある句による。

やることを下地にして、一つには源氏の血縁ゆゑに、世人の惑ずるその態度や有様なども、幼時の源氏の御評判や様子よりは寧ろ少し立勝つていらつしやる人望ゆゑに、半分はその爲にこの上もなくお立派に見えるのであつた。かたへはを「さる御中らひ」の前に移して解するがよい。

二條院―紫上の舊居。

春宮―今上の第一皇子、明石姫腹。さるやむごとなき……高貴な東宮様として儀式ばつたお扱なされ。

帝后……匂宮は今上も御母明石中宮も特別御寵愛遊ばす方なので。

内裏住―禁中での御起居。

心安き故郷に―氣樂な舊居として。

女一の宮―今上の第一皇女、明石中宮の御腹。

東の對―紫上の住まれた御殿。

その世の御しつらひ……紫上の在世當時の室内裝飾を易へず、その儘にお住みになつて。

二の宮―匂宮の兄皇子、明石姫腹。

おなじ御殿―六條院。

梅壺を……宮中の凝華舍を參内した時の御自分のお部屋になされて。

右の大殿の……夕霧の第二女を奥方にしていらつしやる。

次の坊がねにて―春宮御即位の曉には

光隱れ給ひにし後、かの御影に立ちつぎ給ふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり。おりゐの帝をかけ奉らむは辱なし。當帝の三の宮と、そのおなじ御殿にておひ出で給ひし宮の若君と、この二所なむ、とりどりに清らなる御名とり給ひて、げにいとなべてならぬ御有様なめれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。たゞ世の常の人ざまに、めでたくあてに、なまめかしくおはするを本として、さる御中らひに、人の思ひ聞えたるもてなし有様も、いにしへの御ひゞきけはひよりは、やゝ立ち勝り給へる覺がらなむ、片へはこよなういつくしかりける。紫の上の御心よせ殊にはぐくみ聞え給ひしゆゑに、三の宮は二條院におはします。春宮をばさるやむごとなきものにおき奉り給ひて、帝后、いみじくかなしうし奉り、かしづき聞えさせ給ふ宮なれば、内裏住をせさせ奉り給へど、なほ心安き故郷に住みよくし給ふなりけり。

御元服し給ひては、兵部卿の宮と聞ゆ。女一の宮は六條院の南の町の東の對を、その世の御しつらひを改めずおはしまして、朝夕に戀ひし

はその次の春宮候補者で。

大姫君―長女。

きしろふ人―競爭者。

その次々……次々の姫君達も皆順々にやはり二の宮や匂宮の奥方になられる筈のものと。

わが御心より……御自分の本心から出たのでない緣談などは。

大臣も……夕霧も何の、二の宮匂宮と極り切つたものゝやうに、そんなにきちんと緣付けずともの事だと落着いて居られるけれど、又先方からさうした御申込でもあつたら應ぜぬ事もないやうな風を見せて。

我はと思ひのぼり……我こそ當世の風流才子と自負してゐる。

御心つくす種はひ―戀の對象。

院かくれ給ひて後―源氏薨去の後。

御方々―源氏の愛人方。

遂におはすべき……結局お引取りなさる筈の住居。

東の院をぞ……二條の東の院をお形見分けに貰つてお住みになつた。

入道の宮―女三宮。

三條の宮―朱雀院の傳領。

今后は……明石中宮は禁中にのみいらつしやるので。

院のうち―六條院。

右の大臣―夕霧。

のび聞え給ふ。二の宮もおなじ御殿の寢殿を、時々の御休所にし給ひて、梅壺を御曹司にし給ひて、右の大殿の中姫君を得奉り給へり。次の坊がねにて、いとおぼえ殊に重々しう、人柄もすくよかになむ物し給ひける。大殿の御女は、いとあまた物し給ふ。大姫君は東宮にまゐり給ひて、又きしろふ人無き樣にて侍ふ。その次々なほみな序のまゝにこそ、世の人も思ひ聞え、后の宮も宜はすれど、兵部卿の宮はさしも思したらず。わが御心より起らざらむ事などは、すさまじくも思しぬべき御氣色なゝめり。大臣も、何かは樣のものと、さのみうるはしうは、と鎭め給へど、又さる御氣色あらむをば、もて離れてもあるまじうおもむけて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の君なむ、その頃すこし我はと思ひのぼり給へる親王達、上達部の御心つくす種はひに物し給ひける。

院かくれ給ひて後、さまざまに移ろひ給へりし御方々、泣く〳〵、遂におはすべき住處どもに、皆おの〳〵移ろひ給ひしに、花散里と聞えし

人のうへにて―他人の事として。
生ける限の世―在世中。
名殘なく……主人の歿後はすつかり構ひ手もなく荒廢に歸して、無常な世の習が感ぜられるのは。
わが世にあらむ……自分の存命中だけでも。
人影離れはつまじうと―出入の人の絶えてしまはぬやうにしたいと。
丑寅の町―もとの花散里の住居。
一條の宮―落葉宮。
三條殿と……雲居雁の許と隔夜に。
うるはしう―きちやうめんに。
世にのゝしりし……世間で評判した立派な御殿も、結局明石上お一人の子孫の住む爲に造つたものゝやうに見えて。句宮女一宮女二宮など皆明石上の孫ゆゑいふ。
大殿は……夕霧は源氏の妻妾方のどなたの事をも源氏の御趣意の通り變更することなく、行屆いた心で親のやうにお事へなさるにつけても。
對の上の……紫上が明石上のやうに御存命でいらしつたら。
遂にいさゝかも……とう〳〵少しでも特別に自分が紫上に好意を示したと、紫上がお認めになるやうな機會もなくて亡くなられた事を。
院を―源氏を。

は、東の院をぞ御處分の所にて渡り給ひにける。入道の宮は、三條の宮におはします。今后は内裏にのみ侍ひ給へば、院のうち寂しく人少なになりにけるを、右の大臣、「人のうへにて、いにしへの例を見聞くにも、生ける限の世に、心をとゞめて造り占めたる人の家居の、名殘なくうち捨てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれには、わが世にあらむ限だに、この院荒さず、ほとりの大路など、人影離れはつまじう」と思し宣はせて、丑寅の町に、かの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、三條殿と夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住み給ひける。二條院とてつくり磨き、六條院の春の御殿とて、世にのゝしりし玉の臺も、只一人の御末の爲なりけりと見えて、明石の御方はあまたの宮達の御後見をしつゝ、扱ひ聞え給へり。大殿はいづ方の御事をも、昔の御心掟のまゝに改めかはる事なく、あまねき親心に仕うまつり給ふにも、對の上のかやうにてとまり給へらましかば、いかばかり心を盡して仕うまつり見え奉らまし、遂にいさかも、取り分きて、わが心寄せと見知り給ふべき節もなくて、過ぎ給ひにしことを、口惜しく飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。天の下の人、院を繼ひ聞えぬなく、とにかくにつけても、世は只火を消ちたるやうに、何事も映なき歎をせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々、御方々、宮達などは更にも聞えず、限なき御事をばさるものにて、又かの紫の上の御有樣を心にしめつゝ、よろづにつけて、思ひ出で聞え給はぬ時のまなし。春の花のさかりはげに長からぬにしも、覺まさるものになむ。

二品の宮の若君は、院の聞えつけ給へりしまゝに、冷泉院の帝取りわきて思しかしづき、后の宮も皇子達などおはせず、心細う思さるゝに、うれしき御後見に、まめやかに頼み聞え給へり。御元服なども院にてせさせ給ふ。十四にて二月に侍從になり給ふ。秋、右近の中將になりて、御賜ばりの加階などをさへ、いづこの心もとなきにか、急ぎ加へて大人びさせ給ふ。（院御自ら）おはします殿ちかき對を、曹司にしつらひなど、自ら御

殿の内の人々―六條院にゐる人々。
限なき御事をば……限もなく悲しい源氏の薨去を歎くは勿論。
春の花のさかりは……春の花はほんに期間の短いのが一層愛着を增させるものだとの意で、美しい紫上も短命ゆゑ一層懷かしさを感じさせたとの心持を含めてゐる。
二品の宮の若君―女三宮の若君薫。
院の聞えつけ……源氏が御依囑なされたまゝに。
后の宮も……秋好もお子樣がなく。
うれしき御後見に……丁度幸なお世話役として薫を懇にお頼みなされた。
院にて―冷泉院の御所で。
侍從―天皇に侍して遺を拾ひ闕を補ふ職。從五位下相當。
御賜ばりの加階―冷泉院の御賜として薫を四位に叙したこと。御賜は年官年爵で、即ち上皇、親王、女院等の特別收入としてその親近の家來に地方官の掾、目、史生等の名義を與へ、又は位階に叙して、それに相當する俸祿を收め給ふ制度をいふ。
いづこの心もとなきにか―どこにさう慌てねばならぬ必要があるのか。
大人びさせ給ふ―成人らしくなさる。

自ら御覽じ入れて—冷泉院御自身御監督なされて。
若き人—薫に附ける若い女房。
女の御氣色よりも……姫宮樣よりも立派な御樣子に。
上にも宮にも……院附、秋好附の女房の中に於ても。
院の内を……薫がこの院の御所に馴染んで。
わざとがましき……特別なお世話の代(シロ)と。
故致仕の大殿—柏木の父、元の頭中將。この逝去の事初めて見えた。
女御—冷泉院の女御弘徽殿、柏木の妹。
劣らず—薫を愛することが劣らず。
后の宮の……それも秋好の御寵愛が月日に隨つて益加つてゆくせゐだらう、何のそれ程にせずともと人目には見える位である。
母宮—女三宮。
尊き御譽—佛の供養などをいふ。
この君—薫。
却りては—女三宮は反對に薫を親のやうに力になさるので。
院にも内裏にも……冷泉院からも主上からも薫を始終おそばにお召になり。
いかで身を……どうか身體を二つに分けたいものだなあと。

覽じ入れて、若き人も、童下仕まですぐれたるを選りとゝのへ、女の御氣色よりもまばゆく整へさせ給へり。上にも宮にも、侍ふ女房の中にも、容貌よくあてやかに目やすきは、(薫ノ方ヘ)皆うつし渡させ給ひつゝ、院の内を心につけて、住みよくありよく思ふべくとのみ、わざとがましき御扱ひ種に思され給へり。故致仕の大殿の女御と聞えし御腹に、女宮たゞ一所おはしけるをなむ、限なくかしづき給ふ御有樣に劣らず、后の宮の御覺の、年月にまさり給ふけはひにこそは、などかさしもと見るまでなむ。母宮は、今はたゞ御行を靜にし給ひて、月ごとの御念佛、年に二たびの御八講、をり〳〵の尊き御營ばかりをし給ひて、徒然におはしませば、この君の出で入り給ふを、却りては親のやうに頼もしき蔭に思したれば、いとあはれにて、院にも内裏にも召しまつはし、春宮も次々の宮達も、なつかしき御遊敵にて伴ひ給へば、暇なく苦しうて、いかで身を分けてしがなと覺え給ひける。幼心地にほの聞き給ひし事の、折々いぶかしう覺束なく思ひ渡れど、問ふべき人もなし。

幼心地に……薫は自分の出生について幼時小耳に挿んでゐた事が、今では時々不審に思はれるが。
宮には事の氣色……母君女三宮へは、自分が祕密の一端でも知つてゐると思はれよう事はお氣の毒な譯だから。
世と共の……常住氣にかけて。
いかなりける……どうした事情でまあ あつた事やら。
何の契—どうした宿緣。
善覺夷太子の……未詳。或は善覺夷太子は羅睺羅尊者の別名か、尊者は釋尊出家後六年目に生れたので人怪んだが、誰も教へぬに自ら釋尊の子なるを悟つて供養したといふ、薫もその悟の如く實父を知りたいとの意であらうと舊註の說。
おぼつかな……どうしてまあ所生も確に知らず行末も分らぬ我が身なのだらう、一體誰にこれを尋ねたものだらうか、心もとない事だ。
宮もかく……母宮もこんな女盛を出家なされて、一體どれ程深い道心で急にそんな決心をなされたものか、ふとした失行故に世を憂く感ずる點があつたのだらう、他人も何の漏れ聞いて知らない事があらうぞ、矢張祕すべき話ゆゑ私には樣子を聞かせるものが無いのだと宮には、事の氣色にても知りけりと思されむ、傍いたき筋なれば、世と共の心にかけて、いかなりける事にかは、何の契にて、かう安からぬ思添ひたる身にしもなり出でけむ。善覺夷太子のわが身に問ひけむ悟をも得てしがなとぞ、獨言たれ給ひける。

「薫 おぼつかな誰にとはましいかにして
はじめもはても知らぬわが身ぞ」

答ふべき人もなし。事にふれて、わが身に恙ある心地するも、たゞならず物歎かしくのみ思ひ廻らしつゝ、宮もかく盛の御容貌をやつし給ひて、何ばかりの御道心にてか、俄におもむき給ひけむ、かく思はずなりける事の亂に、必ず憂しと思しなる節ありけむ、人もまさに漏り出で知らじやは、猶つゝむべき事の聞えにより、我には氣色を知らすらむぞ、矢張祕すべき話ゆゑ私には樣子を聞かせるものが無いのだと思ふ。且暮勤め給ふやうなめれど、はかもなくおほどき給へる女の御悟のほどに、蓮の露もあきらかに玉と磨き給はむことも難し。五つのなにがしも、猶うしろめたきを、我この御心

思ふ。以上薫の心。
旦暮……母君女三宮は朝夕佛前の勤行をお勵みのやうだけれど。
はかもなくおほどき……しかとした所もなく鷹揚であられる。
蓮の露も……眞の悟の境地に到ることは難いとの意を比喩した。
五つのなにがし—佛說の女人の五障とは一者梵天、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身となるを得ざるをいふ、法華經提婆品にある。
後の世をだにと—せめて母宮の後生善處の爲のお力添でもしたいと。
かの過ぎ給ひにけむも……亡くなられた柏木も煩惱を斷つ事出來ずして死なれたのではないかなどと。
世をかへても—來世に生れ變つても。
元服は……出家の希望があるので元服は氣が進まなかつたが、お斷りもしきれなかつた。
内裏にも……主上も薫の母君女三宮は御妹ゆゑその緣合からの御愛情が深くて。
宮達もろともに……明石姫腹の皇子方と薫が一緒に育つて。
御もてなし……皇子方と同列に扱つてゐたのを今も殆ど同樣になされ。
末に—晩年に。
心苦しう……薫の成人を見屆ける事も出來ぬのが心苦しいことだ。
院の—源氏が。
右の大臣も—夕霧も。
この君をば……薫をば懇切に。
昔光る君と……昔光る君と評判された源氏は。
御覺—父桐壺帝の御寵愛。
猶み給ふ人—弘徽殿女御また二條右大臣方。
世の中を……世間に對して穩かな心構をなされたので、無類の御威勢も人が目をそばめる程でないやうにぼかして。
いみじき世の亂—須磨退居についての前後の事情をさす。
後の世の……來世の佛果を祈る事も生前になさいまして。
この君は……薫は年もゆかぬ中から世間の聲望が大變あり過ぎて。
げにさるべくて……ほんに然るべき因緣で世間並の人とは生まれず、佛菩薩などが假に形をお現しになつたのかとも見える點がおありなさる。
そこはかと—そこはかとなく。
恥かしげに—相手の人がきまり惡い位お立派に。
心の奥……奥行の深さうな樣子。
香のかうばしさぞ—薫の體に具つてゐる一種の香の芳しさが。

地をたすけて、おなじうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも、安からぬ思に結ぼほれてやなど推し量るに、世をかへても對面せまほしき心つきて、元服はもの憂がり給ひけれど、ずまひ果て給はず。自ら世の中にもてなされて、まばゆきまで花やかなる御身のかざり給ふ。昔光る君と聞えしは、さる又なき御覺ながら、猶み給ふ人うち添ひ、母方の御後見なくなどありしに、御心ざまも物深く、世の中を思しなだらめし程に、竝びなき御光をばまばゆからずもて靜め給ひ、遂にさるいみじき世の亂も出で來ぬべかりしをも、事なく過し給ひて、後の世の御勤も後らかし給はず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心掟にこそありしか。この君はまだしきに、世の覺いと過ぎて、思ひあがりたる事こよなくなどぞ物し給ふ。げにさるべくて、いとこの世の人とはつくり出でず、假に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり。顏容貌もそこはかと、いづこなむ優れたる、あな清らと見ゆる所も無きが、只いとなまめかしう恥かしげに、心の奥多かりげなるけはひの、人に似ぬなりけり。香のかうばしさぞ、この世の匂ならず、あやしきまで、うち振舞ひ給へるあたり遠く隔てたる程の追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべき心地しける。誰もさばかりになりぬる御有樣の、いと窶ればみ、只ありなるやはあるべき、樣々に、われ人に勝らむとつくろひ用意すべかめるを、かく片はなるまで、うち忍び立ち寄らむ物の限も著きほのめきの、隱れあるまじきにうるさがりて、をさをさ取りもつけ給はねど、あまたの御唐櫃に埋もれたる香の香ど

うち振舞ひ給へる……立居、身じろきなさる處から遠く離れての追風も。追風は吹過ぎてくる風。まことに百歩のほかも—薫物にも百歩香といふ名があるが、ほんにその如く百歩の外までも。

誰もさばかりに……誰でも薫位の身分で、ひどく見すぼらしく只ありの儘の姿形でおめかしせぬものがあらうか。

かく片はなるまで……薫は體のにはひがこんなにひど過ぎる位、一寸物蔭に忍んで立寄つても自分の居るのが著しくて隠しきれぬ程なのをうるさがつて、薫物はあまりお用ゐにならないけれど。

この君のは—薫のは。

はかなく袖かけ……薫が一寸袖を觸れた梅はその香が特別よいので、春雨に濡れるのも厭はずその香を身に染ませる人が多く。古今「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」の意。

秋の野に……秋の野に誰が脱いだ袴やらその袴のやうな藤袴の香も、その固有の香が薫の體のにほひに打消されて。古今「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」の意。

折りなしがらなむ……薫が折り取つてもも、この君のは、いふよしもなき匂をくはへ、御前の花の木も、はかなく袖かけ給ふ梅の香は、春雨の雫にもぬれ身に染むる人おほく、秋の野に主なき藤袴も、もとの薫はかくれて懐かしき追風異に、折りなしがらなむ勝りける。かくいとあやしきまで人の咎むる香にしみ給へるを、兵部卿の宮なむ、異事よりも挑ましく思して、それはわざとよろづの勝れたるうつしを染め給ひ、朝夕の事わざに合はせ營み、御前の前栽にも、春は梅の花園をながめ給ひ、秋は世の人の色にめづる女郎花、さを鹿の妻にする萩の露にも、をさ〳〵御心うつし給はず、老を忘るゝ、菊に、衰へゆく藤袴、物げなき地楡などは、いとすさまじき霜枯の頃ほひまで思し捨てずなど、わざとめきて、香にめづる思を、好ましうおはしける。かゝる程に、(匂宮ヲ)少しなよび和らぎ過ぎて、好きたる方にひかれ給へりと、世の人は思ひ聞えたり。昔の源氏は、すべてかく立てゝ、その事と、様かはり、沁み給へる方ぞなかりしかし。源中將、この宮には常に參りつゝ、遊などにも、きしろふ物の音

たせるで一層香がよくなつた。

兵部卿の宮なむ……匂宮が他の事よりもこの點を負けぬ氣になつて。それは……匂宮は特に様々の優れた薫物を炷きしめ。うつしは薫物。朝夕の……朝夕の仕事にして薫物を調合しくらし。

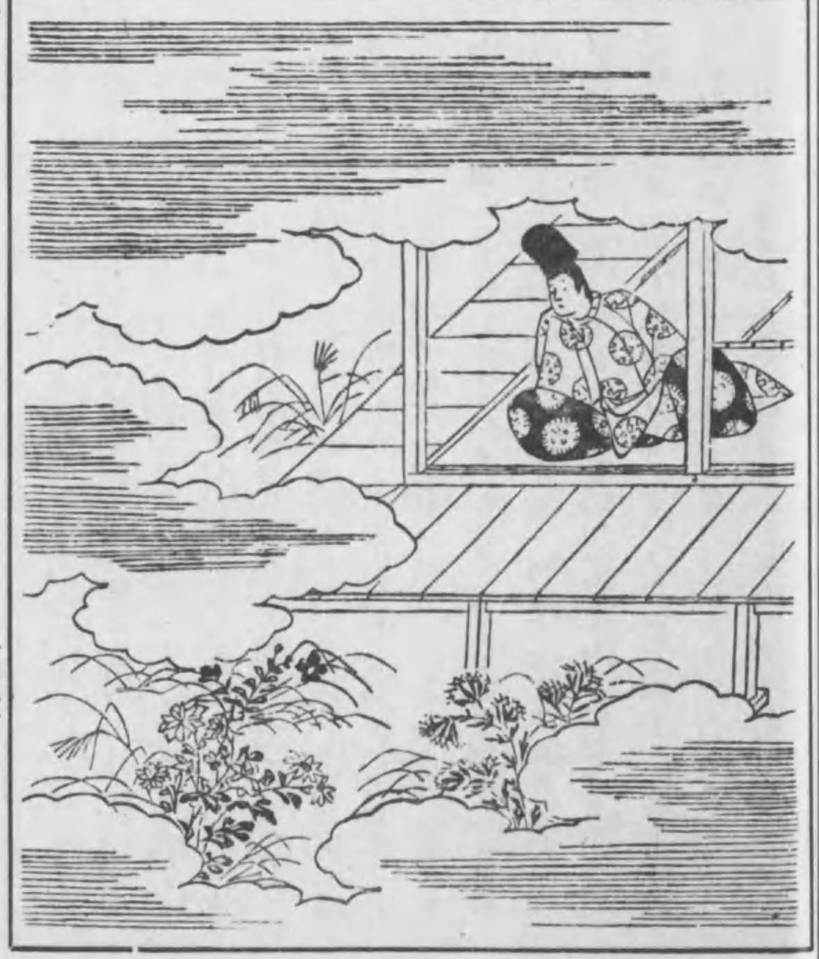
御心うつし給はず……香がない故。物げなき—何の取得もない。思し捨てずなど……香が高いゆゑ。香にめづる……香を愛する趣味を主として愛好せられた。

好きたる方に……餘り物數寄に囚はれていらつしやると。

すべてかく……總てこんなに看板に示して何が好きだと一風變つて固執なさる事はなかつたものだ。

源中將……薫は匂宮の許へは常に訪問しつゝ。

きしろふ物の音を……負けない程上手に笛などを吹いて。



げに挑ましくも……若い同士ほんに競爭もされ又中よしにおなりなさるべき人柄である。
聞きにくゝ……耳に餘る程尊して。
心ときめきに―この二人を婿に取りたいと胸を躍らせて。
宮は……匂宮は彼方此方と風情ありさうな處にいひ寄つて娘の樣子をもお探りになる。
わざと御心に……然し特に心に沁みて熱中する女は別に無かつた。
女一の宮―弘徽殿女御の御腹。
さやうにても……妻にもしたいものだ、この姫宮なら妻にし甲斐があらうよと匂宮が思召したのは。
母女御―冷泉院の弘徽殿女御。
いと重く心にくゝ……御身分も大層重々しく奥ゆかしくいらせられる御方で。
委しき御有樣の……女一宮の委しい御樣子について匂宮のお耳に入れたりなどするものもあるので、宮は猶更堪へ難く思召すらしい。
中將は―薫は。
なか〳〵心とゞめて……なまなか女に執心しては出家などするにも後髮牽かれる思が殘らうかなど考へると、面倒な色戀關係などになりさうな處に立入ることは。
さし當りて……尤も差當り氣に入る

を吹き立て、げに挑ましくも、若きどち思ひかはし給ひつべき人の樣になむ。例の世の人は、匂ふ兵部卿、薫る中將と、聞きにくゝいひ續けて、その頃よき女おはするやむごとなき所々は、心ときめきに聞えごちなどし給ふもあれば、宮は樣々にをかしうもありぬべきわたりをば宣ひ寄りて、人の御けはひ有樣をも氣色どり給ふ。わざと御心につけて思す方は殊になかりけり。冷泉院の女一の宮をぞ、さやうにても見奉らばや、かひありなむかしと思したるは、母女御もいと重く心にくゝ物し給ふあたりにて、姫宮の御けはひ、げにいとあり難くすぐれて、よその聞えもおはしますに、まして少し近くも侍ひ馴れたる女房などの、委しき御有樣の、事に觸れて聞え傳ふるなどもあるに、いとゞ忍び難く思すべかゝめり。中將は、世の中を深くあぢきなきものに思ひ澄ましたる心なれば、なか〳〵心とゞめて行き離れがたき思や殘らむなど思ふに、煩はしき思あらむあたりにかゝづらはむは、つゝましくなど思ひ棄て給ふ。さし當りて心に沁むべき事の無きほど、さか

程の女が見えない間だけ、かうして賢ぶつてゐるのかも知れぬ。
人のゆるし無からむ……人の非難しさうな無理な戀などは。
三位の宰相……三位の參議に陞り猶近衞中將も元のまゝ兼任である。
たゞ人にては……臣下としては天下晴れてえらい薫の御聲望でおありだが。
身を思ひ知る方……わが身の所生につき訝しく感づいた事があつて。
はやりかなるすき事―放逸な戀愛沙汰。
およずけたる―大人ぶつた。
三の宮―匂宮。
心を碎き給ふめる―わが物にしたいと苦心していらつしやるらしい。
院の姫宮―冷泉院の女一宮。
一つ院の……薫は女一宮と同じ冷泉院の御所内にゐて、朝夕馴れて居られるので。
人の有樣―女一宮の御樣子。
心にくゝ……奥ゆかしく仔細らしい御態度がこの上なく立派なのを。
同じくは……同じ妻をもつならほんに女一宮のやうな人をもつたら、一生滿足しさうな筋であるわ。
大方こそ……冷泉院が大體に於ては薫を隔なく思召されたが、女一宮のお居間との隔はひどく嚴重にさ

しだつにやありけむ、人のゆるし無からむ事などは、まして思ひ寄るべくもあらず。

十九になり給ふ年、三位の宰相にて、なほ中將もはなれ給はず。帝、后の御もてなしに、たゞ人にては、憚なくめでたき人の覺にて物し給へど、心の中には、身を思ひ知る方ありて、物あはれになどもありければ、心に任せて、はやりかなるすき事をさ〳〵好まず、よろづの事もて靜めつゝ、自らおよずけたる心樣を人にも知られ給へり。三の宮の年にそへて心を碎き給ふめる、院の姫宮の御あたりを見るにも、一つ院の内に旦暮立ちなれ給へば、事に觸れても人の有樣を聞き見奉るに、げにいとなべてならず、心にくゝ故々しき御もてなし限なきを、同じくは、げにかやうならむ人を見むにこそ、生ける限の心ゆくべきつまなれと思ひながら、大方こそ隔つることなく思したれ、姫宮の御方ざまの隔は、こよなくけ遠く慣らはせ給ふも、道理に煩はしければ、あながちにも交らひ寄らず。もし心より外の心もつかば、我も人

せつけていらつしやるのも御尤で且薫は面倒だから、強ひて女一宮に近づかうともしない。

もし心より外の……若し自分ながら意外な戀心でも萌したら。

我も人も—薫自身も女一宮も。

わがかく人に……薫はこんなに人に好かれるやうに生れついた容姿なので、一寸した捨言葉をお懸けなさる位の女でも、もうひどく惚れ込んで靡き易いといふ譯なので、自然一時の戀人も澤山出來るが。

人の爲に……その女の爲、餘り人目につくやうな待遇はせず。

情なからぬ程の……薄情でもない位の態度が却て氣が揉めるので、靡いてゐる女はそれに引摺られて。

三條の宮に……薫に逢ひたい爲に女三宮の處へ參上する女は多い。

つれなきを見るも……薫が表面無關心なやうな顏してゐるのを見るのも、その女達は苦痛ではあるが。

絶えなむよりはと……別居してゐて緣が切れてしまはうよりはと薫に見舞はれぬ心細さに煩悶して。

さもあるまじき際の……女房勸めなどするやうな低い身分でない人々で、薫とのはかない契を當にして仕へてゐるものが多い。

人の御有樣—薫の容姿風丰。

心には謀らるゝ……心中欺されるやうな氣がしてその癖何も勸辨される。

宮のおはしまさむ……女三宮の御存命中は朝夕絶えずお目にもかゝりお顏も拜する事だけでもせめての孝行にしたいと。

右の大臣—夕霧。

一人一人はと—一人づつは薫と匂宮とに緣附けたいものだと。

ゆかしげ無き……夕霧と薫とは表面兄弟の仲で餘り平凡な緣組だからなあゝとは夕霧も考へるけれど。

この君達を……薫や匂宮を擇いては他にそれに匹敵しさうな婿が求められる今の時節かいと。

やむごとなきよりも……本妻雲居雁腹の娘よりも惟光の娘の生んだ六女は。

世の覺の……世間から幾分輕く見られてゐるらしい娘が却てこんなに立派なのを。

一條の宮の……落葉宮がそんな愛兒も持たず無聊で居られる故。

わざとは無くて……六の君を表立つてでなく何かの機會にちらりと薫や匂宮にお見せ申し初めたら。

人の有樣をも……女の鑑別に目の高い薫や匂宮は、人と違つてすぐ六の君に目をつけるだらうなど夕霧

もいと惡しかるべきにと思ひ知りて、物馴れ寄ることもなかりけり。

わがかく人にめでられむと、なり給へる有樣なれば、はかなくなげの言葉を散らし給ふあたりも、こよなくもて離るゝ心なく、靡きやすなる程に、自らなほざりの通ひ所も數多になるを、人の爲に、事々しくなどもてなさず、いとよく紛らはし、そこはかとなく情なからぬ程の、なか〳〵心病ましきを思ひ寄る人はいざなはれつゝ、三條の宮に參り集まるは數多あり。つれなきを見るも苦しげなる業なめれど、絶えなむよりはと、心細きに思ひ侘びて、さもある まじき際の人々の、はかなき契に賴を懸けたる多かり。流石にいと懷かしう見所ある人の御有樣なれば、見る人みな、心には謀らるゝやうにて見過さる。宮のおはしまさむ世の限は、朝夕に御目離れず御覽ぜられ、見奉らむをだにと思ひ宣へば、右の大臣も數多ものし給ふ御女たちを、一人一人はと心ざし給ひながら、え言に出で給はず。さすがゆかしげ無き中ひなるをとは思ひなせど、この君達を置きて、外にはなずらひなるべき人を求め出づべき世かはと思し煩ふ。やむごとなきよりも、典侍腹の六の君はいと優れてをかしげに、心ばへなども足らひて生ひ出で給ふを、世の覺の貶しめ樣なるべきしも、かくあたらしきを、心苦しう思して、一條の宮のさる扱ひ種持給へらでさう〳〵しきに、迎へ取りて奉り給へり。わざとは無くてこの人々に見せそめてば、必ず心とゞめ給ひてむ、人の有樣をも見知る人は、殊にこそあるべければなど思して、いと嚴くしうはもてなし給はず、今めかしくをかしきやうに、物好せさせて、人の心つけむ便多く作りなし給ふ。

賭弓の還饗のまうけ、六條院にていと心殊にし給ひて、皇子をもおはしまさせむの心づかひし給へり。その日、皇子達大人におはするは皆侍ひ給ふ。后腹のは何れともなく、氣高く清げにおはしますなかにも、この兵部卿の宮は、げにいと勝れてこよなう見え給ふ。四の皇子、常陸の宮と聞ゆる更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣り給へり。例の左あながちに勝ちぬ。例よりは疾く事はてゝ、大將まかでゝ

は思召して。
いと嚴くしうは……六の君を餘り嚴格に深窓の内でも育てず。
今めかしく—花々しく。
人の心つけむ便……男達が目をつける機會が多いやうになさる。
賭弓の還饗—賭弓は清和天皇の時に始る、正月天子弓場殿に於て左右近衞、兵衞の舍人等の競射を見給ふ儀で、儀終り勝つた方の大將の邸に於て饗應あるを還饗といふ。
后腹—明石姫の御腹。
この兵部卿の宮—匂宮。
例の左……賭弓は例年勝つ左近衞の舍人が今日も無上に勝つた。
大將—夕霧。
后腹の五の宮—明石姫腹の中務宮。
宰相の中將—薫。薫は右中將で右方。
皇子達……皇子方が六條院へお出になりますが、その御見送かた〴〵貴方もお出なさいませんか。
御子の—夕霧の子息なる。
乘りまじり—あれこれに同車して。
道のやゝ……距離が遠くて道が少しひまどるに。
物の音……車の中で笛などを面白く吹きすさびながら六條院へ引き込まれるのを。
佛の御國—極樂淨土。
心やり所—氣の晴らし場。

給ふ。兵部卿の宮、常陸の宮、后腹の五の宮と、一つ御車に招きのせ奉りてまかゝで給ふ。宰相の中將は負け方にて、音なくまかゝで給ひにけるを、「皇子達おはします御送に參り給ふまじや」と推しとゞめさせて、御子の衞門の督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部あまた、これかれに乘りまじり、いざなひ立てゝ六條院へおはす。道のやゝ程ふるに、雪いさゝか散りて、艶なる黄昏時なり。物の音をかしきほどに吹き立て遊びて入り給ふを、げに此處をおきて、いかならむ佛の御國にかは、かやうの折ふしの、心やり所を覓めむと見えたり。寢殿の南の廂に常のごと南向に中少將着きわたり、北向にむかへて、垣下の親王達、上達部の御座あり。御土盃など始まりて、物おもしろくなりゆくに、求子舞ひてかよれる袖どものうち返へす羽風に、御前近き梅のいといたく綻びこぼれたる匂の、さとうち散り渡れるに、例の中將の御薫のいとゞしくもてはやされて、いひ知らずなまめかし。はつかに覗く女房なども、闇はあやなく心もとなきほどなれど、香にこそげ

寢殿の南の廂—廂の座、中少將は奥の方に着き親王公卿は端に着く、これを垣下の座といひ中少將を饗するに親王公卿が相伴する意。
着きわたり—並んで着座し。
むかへて—向ひあつて。
求子—東遊の曲名、但こゝでは風俗歌の八少女をいふと舊註の説。その歌「八少女はわが八少女ぞ、たつや少女たつや少女」、(一段)「神のますこのみ社に」。(二段)
かよれる袖—飜つた袖。
羽風—これは袖のあふりの風をいふ。鶯の羽風を喩へた。
中將—薫。
いとゞしく……一層引立てられて。
闇はあやなく……夕闇の頃ゆゑ薫のお姿はよく見えず心もとないけれど、御香は紛れず似るべき人もないとの意。古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ」。拾遺、「降る雪に色は紛ひぬ梅の花香にこそ似たるものなかりけれ」の二首を引いてゐる。
大臣—夕霧。
をさめたる—澄ましてゐる。
右のすけ—右近衞の中將即ち薫。
聲くはへ給へや……聲を合せてお謠ひなさい、大變お客樣ぶつていらつしやるな。

に似たるものなかりけれとめであへり。大臣もいとめでたしと見給ふ。(薫ノ)容貌用意も常より勝りて、亂れぬ樣にをさめたるを見て、「夕霧右のすけも聲くはへ給へや。いたう客人だたしや」と宣へば、にくからぬ程に、「薫神のます」など。

にくからぬ程に……程よい調子で前記の八少女の二段「神のますこのみ社に」などとお誦ひなされた。「など」の下一二言の脱文があるらしい。決して省文ではない。

紅梅（こうばい）

この巻は薫二十四歳の時の事。柏木の弟按察大納言は才氣もあり、今は太政大臣の嗣子として權威もある。盤兵部卿ノ宮の後室眞木柱は一人の姫君と共に、この大納言に再嫁した。大納言には先妻の子が二人あつて、眞木柱にまた男の子が一人生まれた。一の姫君は春宮に上げたが、次のは匂宮にと思つてゐる。纖姫君は温和な美しい人である。大納言は子息の參内するのに託して、紅梅の枝を匂宮に奉つて、一の姫を上げいた意中を仄めかしたが、宮は纖姫君の方を思つてゐるので、却て大納言の子息にその手引を頼み、大納言へはさあらぬ返歌をした。大納言は豫想が違つて慊らず思つた。纖姫君は心を動かさぬでもないが、父親の無い心細さから結婚などは斷念してゐる。然し匂宮は熱心である。母君眞木柱は夫への遠慮もあり、又匂宮が宇治に愛人を隱してゐる噂も聞いてゐるので、この緣談には餘り氣乘りもせずにゐる。

とある文から取つた。

「この東のつまに軒近き紅梅の いとおもしろく匂ひたるを見給ひて」

そのころ按察（あぜち）の大納言と聞ゆるは、故致仕（ちじ）の大臣（おとど）の次郎なり。うせ給ひにし右衞門（うもん）の督（かん）のさしつぎに、童（わらは）よりらう〳〵じう、花やかなる心ばへ物し給ひし人にて、なり昇り給ふ年月にそへて、まいていと世に

按察の大納言―後に紅梅右大臣といふ。賢木の巻で高砂誦つた人。

故致仕の大臣―昔の頭中將。

右衞門の督のさしつぎ―柏木のすぐの弟。

なり昇り給ふ……官位の御昇進なさる年月につれて。

まいていと……まして實に生き甲斐があり理想通りに振舞つて、帝の信任は大したものであつた。

後の太政大臣―髭黒。

眞木柱はなれ難くし給ひし君―眞木柱の姫君。その母君が夫髭黒の浮氣を怒つて實家に歸る時、眞木の柱に縋つて姫君が髭黒邸を去るまいと悲しんだのでかくいふ。九七四頁（眞木柱の巻）參照。

式部卿の宮が、故螢兵部卿宮に御緣附けなされたが。螢兵部卿の既に薨じた事こゝに初めて見える。

忍びつゝ通ひ……按察大納言が。

年月經れば……もう年數が立つた故さう遠慮もなさらず、今は大びらに奥方にして居られるのである。

御子は―紅梅の子息は。

今の腹―後妻眞木柱の腹。

故宮の……亡き螢兵部卿宮の忘形見として眞木柱の腹に姫君が一人いらつしやる、それを紅梅は分け隔てをせずわが子と同樣に愛していらつしやるのを。

おの〳〵御方の人……それ〳〵お子達附の女房達などは素直ならぬ氣だての者も中にはゐて、變にこじれた事も起る時があるけれど。

北の方―眞木柱。

晴れ〴〵しう……さつぱりした花やかな人で。

罪なく取りなし―いゝ具合に取りなし。

わが御方樣に……自分や連れ子にとつて迷惑を感ずるやうな事でも。

なだらかに聞きなし……穩かに聞取り胸に納められるので。

すぎ〳〵―次々。

大納言殿の大君―紅梅の長女。

中の君―次女。

宮の御方―螢兵部卿の息女、眞木柱の連れ子。

大方に……普通に一寸考へて見ると、宮の御方は父宮がおありなさらぬのがお氣の毒なやうだけれども。

此方彼方の御財物―故父宮やその他から傳はつた御遺産。

例のかく……紅梅がこんなに娘達を大切に育てゝゐる事が廣まつて、例の好色男達が次々に懸想して來られるものが多く。

御氣色あれど―御所望の仰があるが。

中宮―明石姫。

いかばかりの人……どれ程の人なら明石姫の寵に匹行出來ようぞ。

思ひ劣り―及ばぬ事と諦めて。

左の大殿の女御―夕霧の息女。

糺ろひにくけれど……競爭しにくいけれど、さうばかり言つて引込んでも居られまい。

人に勝らむと……他人よりは出世させたいと思ふ娘を。

宮仕に……禁中御寒公を斷念しては參らせ奉り給ふ―長女を春宮へお差上げなされた。

うちすがひて―打續いて。

すみわたる……取りすましてしやんとした樣子は姉君に勝つて。

たゞ人にては……臣下の人に緣附けるのは惜しくて遣りともないやうなお人柄なのを、匂宮がもし思召があるなら上げたいものだなど紅梅は思つていらつしやる。

この若君を―眞木柱腹の子の大夫。

あるかひあり、あらまほしうもてなし、御覺いとやむごとなかりけり。北の方二人ものし給ひしを、もとよりのは亡くなり給ひて、今もの し給ふは後の太政大臣の御女、眞木柱はなれ難くし給ひし君を、式部卿の宮にて、故兵部卿の親王にあはせたて給へりしを、親王うせ給ひて後、忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月經ればえさしも憚り給はぬなゝめり。御子は故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければ、さうざうしうとて、神佛に祈りて、今の腹にぞ男君一人まうけ給へる。故宮の御形見に女君一所おはす。隔てわかず、何れをも同じごと思ひ聞えかはし給へるを、おの〳〵御方の人などは、うるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまくねし〳〵しき事も出でくる時々あれど、北の方いと晴れ〴〵しう今めきたる人にて、罪なく取りなし、わが御方樣に苦しからで目安かりけり。

君達おなじ程に、すぎ〳〵大人び給ひぬれば、御裝など著せ奉り給ふ。

七間の寢殿、廣くおほきに造りて、南面に大納言殿の大君、西に中の君、東に宮の御方と住ませ奉り給へり。大方にうち思ふなどは、父宮のおはせぬ心苦しきやうなれど、此方彼方の御財物おほくなどして、内内の儀式有樣など、心にくゝ氣高くなどもてなして、けはひあらまほしうおはす。例のかくかしづき給ふ聞えありて、つぎ〳〵に隨ひつゝ聞え給ふ人多く、内裏、春宮より御氣色あれど、内裏には中宮おはしますいかばかりの人かは、かの御けはひに並び聞えむ、さりとて思ひ劣り、卑下せむもかひなかるべし、春宮には左の大殿の女御、並ぶ人なげにて侍ひ給ふは軋ろひにくけれど、さのみいひてやは、人に勝らむと思ふ女子を、宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむと思したちて、參らせ奉り給ふ。十七八の程にて、美しう匂多かる心地し給へり。中の君もうちすがひて、あてになまめかしう、すみわたる樣は勝りて、をかしうおはすれば、たゞ人にてはあたらしう見せま憂き御樣を、兵部卿の宮のさも思し寄らばなどぞ思したる。この若君を、内裏にてなど

召し纏はし……お側に引附けて遊び相手になさる。
心ばへありて……大夫は情趣があつて、生ひ先もさぞと推量される目付頴付である。
兄人を……貴方(大夫)と仲よしになつただけでは物足りないと父君にいつて下さい。中の君をも得たいとの意。せうとは兄、但兄弟といふ意味で弟にもいふ事がある。
心のゆくに……思ふ存分に嫉としてお世話してお見上げ申さうなら。
春宮の御事—大君を春宮に上げる事。
春日の神の……藤氏の氏神春日明神の御託宣も或は私の代に下つて、故父君が、息女弘徽殿女御の秋好に壓倒されて中宮にもなれなかつた事を無念に思つて死なれたその代りの心ゆかせの幸運も來よかしと。
かゝる御交らひ—かうした宮中の御奉公。
北の方添ひて……眞木柱が附添うて宮中へお上りになつたので。
思ひかしづき—眞木柱が大姫君を大切にして。
殿は—大君がゐなくなつた紅梅邸は。
西の御方は……殊に中の君は從來姉君と一緒にゐ馴れた事とて。
東の姫君—眞木柱の連れ子、宮の君。

(匂宮が)見つけ給ふ時は、召し纏はし、たはぶれ敵にし給ふ。心ばへありて、奥推し量らるゝまみ額付なり」と、大納言に申せよ」など宣ひかくるを、さなむと聞ゆれば(紅梅ハ)うち笑みて、いとかひありと思したり。「人に劣らむ宮仕よりは、この宮にこそは、よろからむ女子は見せ奉らまほしけれ。心のゆくに任せて、かしづきて見奉らむに、命延びぬべき宮の御様なり」と宣ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて、春日の神の御ことわりも、わが世にやもし出で來て、故大臣の、院の女御の御事を胸いたく思して止みにし、慰めの事もあらなむと、心のうちに祈りて、參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふよし人々聞ゆ。かゝる御交らひの馴れ給はぬ程に、はか〴〵しき御後見なくてはいかゞとて、北の方添ひてさぶらひ給へば、まことに限もなく思ひかしづき、後見きこえ給ふ。
夜々は一所に御殿ごもり、よろづの御事ならひ、はかなき御遊業をもこなたを師のやうに思ひ聞えてぞ、誰も習ひ遊び給ひける。(宮ノ君ハ)物恥を世の常ならずし給ひて、母北の方にだに、さやかにはをさ〳〵さし向ひ奉り給はず、片はなるまでもてなし給ふものから、心ばへけはひの埋もれたる様ならず、愛敬づき給へること、はた人よりもすぐれ給へり。かく内裏まゐりや何やと、わが方様をのみ思ひ急ぐやうなるも心苦しきなど思して、「さるべからむ様に思し定めて宣へ。おなじ事とこそ仕うまつらめ」と、母君にも聞え給ひけれど、「更にさやうの世づきたる様、思ひ立つべきにもあらぬ氣色なれば、なか〳〵ならむ事は心苦しかるべし。御宿世にまかせて、世にあらむ限は見奉らむ。後ぞあはれに後めたけれど、世を背く方にても、おのづから人笑へに、淡つけき事なくて過し給はなむ」などうち泣きて、御心ばせの思ふやうなることをぞ聞え給ふ。いづれも分かず親がり給へど、御容貌を見ばやとゆかしう思して、「かくれ給ふこそ心憂けれ」と恨みて、人知れ

疎々しくかたみに……大君と互に疎疎しくしないで。
こなたを師のやうに……宮の君を師匠のやうに思つて大君も中の君も習つたり弾いたりなされた。
片はなるまで……餘りに變屈な位お振舞ひなさるものゝ、心構や態度が因循な風ではなく。
わが方様をのみ……わが實子の事だけを頻に取急いでするやうなのも宮の君に氣の毒と思召して。
さるべからむ様に……婿の申込の中で相應らしいのに取締めて仰しやつて下さい、實の娘同様にお世話しませう。
更にさやうの……宮の君は全くそんな緣組の事などは考へるべき立場でもないと思つてゐる様子ですから、なま中夫など持たせることは却てかはいさうで御座いませう。
御宿世にまかせて—御運次第として。
世にあらむ限は……私が存命中は面倒見ませう。
後ぞあはれに……私の死後が可愛さうに氣がかりですけれど、その時は出家してなりとも、自然人から笑はれるやうな輕率な振舞がなくて過してくれよかしと存じます。
御心ばせの……夫の親切の十分なことを感謝なさる。

いづれも分かず……紅梅は實子繼子の區別なく親めかして居られるけれど、宮の君の容貌を見たいものよと好奇心を動かして。

見え給ひぬべしやと—宮の君の姿が見えるか知らんと。

上おはせぬ程は……母君の不在中は私が代りにお世話に來る筈ですものを、他人がましく分け隔てをなさる御樣子なので。

あはれに覺ゆる……奥ゆかしく思はれる宮の君の御樣子である。

わが御姫君たちを—紅梅は實子の大君や中の君を、

この君に—宮の君に。

かゝればこそ……だからさ、世間を廣く見るのは厄介だ、わが娘が最上と思つてゐるのに廣い世間にはそれ以上なものも自然あり得る譯だなどと。

いとゞいぶかしう……いよ〳〵宮の君はどんな人かと氣におかけなさる。

西の方に侍る人—中の君。

さもまねび取りつべくや……一かど習得出來るつもりでゐもるのか知ら、然し琵琶の生半可に彈いたのでは聞きづらい性質の樂器ですよ、同じ稽古なら注意して教へてやつて下さい。

ず見え給ひぬべしやと、覗きありき給へど、絶えて片そばをだにえ見奉り給はず。「上おはせぬ程は、立ちかはりて參りくべきを、疎々しく思しわくる御氣色なれば、心憂くこそ」など聞えて、御簾の前に居給へば、御答などほのかに聞え給ふ。御聲けはひなどあてにをかしう、樣容貌思ひやられて、あはれに覺ゆる人の御有樣なり。わが御姫君たちを、人に劣らじと思ひおごれど、この君にえしも勝らずやあらむ、かゝればこそ、世の中廣きうちは煩はしけれ、儔あらじと思ふに、勝る方も、自らありぬべかめりなど、いとゞいぶかしう思ひ聞え給ふ。「月頃何となく物騷がしき程に、御琴の音をだに承はらで、久しくなりにけり。西の方に侍る人は、琵琶を心に入れて侍るらむ。なま片ほにしたるに、聞きにくき物の音がりつべくや覺え侍らむ。なま片ほにしたるに、聞きにくき物の音がらなり。おなじくは御心とゞめて教へさせ給へ。翁は取り立てゝ習ふもの侍らざりしかど、そのかみ盛なりし世に遊び侍りし力にや、聞き知るばかりのわきまへは、何事にもいとつきなくは侍らざりしを、う

翁は……私は音樂は特別に稽古したものはありませんでしたが。

そのかみ盛なりし世に……昔世が盛だつた時分に、音樂に遊んだお蔭かして。

聞き知るばかりの……巧拙を鑑賞する位の分別は、どの音樂についても滿更相應にもたぬでもありませんでしたが。

うち解けても……貴女はしみ〴〵落着いてお彈きもなさらぬけれど。

昔おぼえ侍る……昔の斯道隆盛時代が偲ばれます。

故六條院の……源氏の傳授を受けた人で、夕霧の君が今殘つていらつしやいます。

源中納言—薫。

兵部卿の宮—匂宮。

いと契殊に—誠に天稟格別に。

遊の方—音樂の道。

手づかひ少しなよびたる……手の使ひ方少し和らいだ撥音が、とても夕霧のやうには出來ない。

この御琴の音……貴女の琵琶の音は實によく夕霧のに似てゐます。琴とは絃樂器の汎稱、こゝは琵琶。

押手靜なるを……左の手の練じて手きゝなのを上手と稱するものであるのに。

柱さす—柱を押して彈くこと。

女の御事にて―女の手法としては。
御琴まゐれ―琵琶を持參せよ。これは女房を顧みて命ずる詞。
女房などは……宮の君附の女房達は引込んでゐるものも殆ど無い、只年若で身分のよいらしい女房で紅梅にお目に懸りたくないと思ふのが、自分勝手に引込んでゐて御前へ出て來ないので。
侍ふ人さへ……侍女達までが私を餘所餘所しくするのが心外千萬だ。
若君―紅梅の子の大夫。眞木柱の腹。
宿直姿―直衣を着て髪を解き下げてゐる樣。殿上童は東帶の時はみづらに結ふが正式。
わざとうるはしき……きまりきつた正式な髪よりも。
寢殿―春宮へ參つた大君の稱。
讓り聞えて……北の方がおそばに居るので、それにお讓りして私は今晩も失禮致しませう氣分が勝れませんで、と申上げて下さい。
まだいと若き笛を―まだ頗る未熟な御身の笛だのに。
雙調―春の調子だといふ。
吹かせ給ふ―大夫に吹かしめられる。
怪しうはあらず……御身の笛が次第に聞苦しからぬやうになるのは宮の君の許で合奏するせゐです。
かはぶえ―皮笛、口笛のことか。

ち解けても遊ばさねど、時々うけたまはる御琵琶の音なむ、昔おぼえ侍る。故六條院の 御傳にて、左の大臣なむ この頃世にのこり給へる。源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に 劣るまじう、いと契殊にもの し給ふ人々にて、遊の方は取りわきて心とゞめ給へるを、手づかひ少しなよびたる撥音なむ、大臣には及び給はずと思ひ給ふるを、この御琴の音こそいとよく覺え給へれ。琵琶は押手靜なるを善きにするものなるに、柱さすほど、撥音の樣かはりて、なまめかしう聞えたるなむ、女の御事にてなか〳〵をかしかりける。いで遊ばさむや、御琴まゐれ」と宣ふ。女房などは、隱れ奉る者をさ〳〵なし。いと若き上薗だつが見え奉らじと思ふはしも、心にまかせて居たれは、「侍ふ人さへかくもてなすが安からぬ」と腹立ち給ふ。

若君内裏へ參らむと、宿直姿にて參り給へる、わざとうるはしき鬘よりもいとをかしく見えて、いみじく美しと思しけり。麗景殿に御言づけ聞え給ふ。「讓り聞えて今宵もえまゐるまじく、惱ましくなむ』と

馴れたる聲して―の下「合はせ給へり」を假に補つて聞く。
御前―宮の君の住む庭前をいふ。
心ばへありて―趣があつて。
兵部卿の宮……匂宮が今丁度禁中にいらつしやる筈です。
知る人ぞしる―古今「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる」。
いはゆる御盛の大將……近衞の大將は規模の職であるからいふ。
童にてかやうにて―私がまだ子供で今ちやうど大夫が匂宮に愛せられてゐるやうな鹽梅で。
世と共に―常に。いつも。
この宮達を―匂宮などを。
げに人に……成程人に賞美されに生れたやうな御樣子ではあるが。
端が端にも……源氏に較べると物の數ともお見えにならぬのは、矢張源氏を天下無類の方と思込んでゐた氣のせゐでもあつたらうか。
大方にて……私のやうな淺い關係で思出しても源氏の薨去は胸の晴れる時なく悲しいのに、關係深い人で跡に生き殘つて居られるのは、大抵な長命ではなくよく〳〵命に緣のある人と思はれる。でなければ悲歎の爲に死にもしさうなものだがなあとの意を含む。

聞えよ」と宣ひて、「笛すこし 仕うまつれ。ともすれば、御前の御遊に召し出でらるゝかたはら痛しや、まだいと若き笛を」とうち笑みて、雙調吹かせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、「怪しうはあらずなりゆくは、このわたりにておのづから物に合はするけなり。なほ搔き合はせ給へ」と、せめ聞え給へば、苦しと思したる氣色ながら、爪彈にいとよく合はせて、たゞ少しかき鳴らし給ふ。かはぶえふつゝかに馴れたる聲して、この東のつまに、軒近き紅梅のいと面しろく匂ひたるを見給ひて、「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮内裏におはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞしる」とて、「あはれ光源氏のいはゆる御盛の大將などにおはせし頃、童にてかやうにて交らひ馴れ聞えしこそ、世と共に戀しう侍れ。この宮達を世の人もいと殊に思ひ聞え、げに人にめでられむとなり給へる御有樣なれども、端が端にも覺え給はぬは、なほ傷あらじと思ひ聞えし心のなしにやありけむ。大方にて思ひ出で奉るも、胸あく世なく悲しきを、氣近き人の後れ奉りて生

ついでの忍び難きにや―折柄のさし置き難いのかして。
參らせ給ふ―大夫を内裏へ。
いかゞはせむ……源氏に及ばぬといつても仕方がない、とにかく懷かしい源氏の形見としては矢張匂宮お一人だ。
佛の……釋尊の滅後弟子達が遺經を結集した時、阿難尊者高座に在つて容貌釋尊に似てゐたので一同釋尊の再現と思つて尊んだとの故事。
闇に惑ふ……源氏を思ふ遣瀬ない心の慰め處に、匂宮に手紙を差上げようといつて。
心ありて……心あつて私がかうして消息を上げますのに、娘の許へ貴方がお出下さらぬといふ法が御座いませうかとの意。風を自分に、梅を中の君に、鶯を匂宮に擬す。
この君の―大夫の。
出だし立て給ふを―大夫を促して出しておやりなさるを。
馴れ聞えまほしと―匂宮に親密に馴れ睦びたいと。
中宮の……匂宮は丁度御母明石中宮の上局から御自分の宿直所へお下りになる所であつた。上局は中宮や女御方が清涼殿へ上つた折の控室。
まだ内裏に……貴方樣がまだ宮中に

きめぐらふは、おぼろげの命長さならじかしとこそ覺え侍れ」など聞え出で給ひて、物あはれにすごく、思ひ廻らししをれ給ふ。ついでの忍び難きにや、花折らせて急ぎ參らせ給ふ。「紅いかゞはせむ、昔の戀しき御形見には、この宮ばかりこそは、佛のかくれ給ひにけむ御名殘には、阿難が光放ちけむを、二たび出で給へるかと疑ふさかしき聖のありけるを、闇に惑ふはるけ處に聞えおかさむかし」とて、

「紅心ありて風のにほはす園の梅に
まづ鶯の訪はずやあるべき」

と、紅の紙に若やぎ書きて、この君の懷紙に取りませ押したゝみて、出だし立て給ふを、幼き心にいと馴れ聞えまほしと思へば、急ぎまゐり給ひぬ。

中宮の上の御局より、御宿直所に出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐるなかに、見つけ給ひて、「昨日はなどいと疾くはまかゞでにし。いつ參りつるぞ」など宣ふ。「疾くまかゞで侍りにし悔しさに『まだ

いらつしやると人が申しました故。
心やすき所……打寛ろいだ二條院へも遊びにお出なさい。
この君召し放ちて……匂宮が大夫を別間に呼んでお話なさるので。
春宮には……近來貴方は東宮樣からはお暇が出たやうですね、以前は繁々と呼ばれて困る位だつたらしいのに、姉の大君に寵を奪はれて體裁が惡いでせう。
まつはさせ給へりし……餘りお側を離されなかつたのが閉口でした、貴方樣には參りよいのですが。
我をば……大君は私を物の數でもない者とお嫌ひなされたさうですね、それも尤です、然し私は平氣では居れませんよ。
古めかしき……珍しくもない私と同じ王家の血統で。
東と聞ゆなるは……宮の君は私と相愛の仲になつてくれませんかと。
この花を……大夫が例の紅梅の花を匂宮に差上げると。
怨みて後……自分が大君に嫌はれた恨をいひ送つて後にこの歌を貰つたのならまづかつたらうに、まあよかつたと。
園に匂へる……園に咲く紅梅は色の方に氣を取られて香は白梅に劣るといふが、この紅梅は大變氣がき

内裏におはします』と人の申しつれば、急ぎ參りつるや」と、幼げなるものから馴れ聞ゆ。「内裏ならで、心やすき所にも時々は遊べかし。若き人どものそこはかとなく集まる所ぞ」と宣ふ。この君召し放ちて語らひ給へば、人々は近うも參らず、まかゞで散りなどして、しめやかになりぬれば、「春宮には暇すこし許されにたゞめりな。いとしげう思ほし惑はすめりしを、時取られて人わろかゞめり」と宣へば、「まつはさせ給へりしこそ苦しかりしか。御前にはしも」と聞えさして居たれば、「我をば人げなしと思ひ放たれたるとな。道理なり。されど安からずこそ。古めかしき同じ筋にて、東と聞ゆなるは、『あひ思ひ給ひてむや』と、忍びて語らひ聞えよ」など宣ふついでに、この花を奉れば、うち笑みて、怨みて後ならましかばとて、うちも置かず御覽ず。枝のさま花ぶさ、色も香も世の常ならず。「園に匂へる紅の、色にとられて、香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこく取り竝べても咲きけるかな」とて、御心とゞめ給へる花なれば、かひありてもてはや

いて色も香も兼備してゐるわい。
御心とゞめ……紅梅は匂宮が平素お好きな花ゆゑ上げた甲斐があつて。
今宵は……今夜は貴方の宿直でせう
この儘私の處にお泊りなさいよ。
「を」は歎辭。
芳ばしくて―匂宮の薫物が香つて。
この花のあるじは……宮の君はどうして東宮へは宮仕にお上りなさらなかつたのですか。
心知らむ人に……何事もよくお分りの方(匂宮をさす)にわが娘は上げたいものだと父が申すのを聞きました。
大納言の……紅梅の積りでは中の君を自分にと思つてるらしく匂宮はお聞きになつてゐるが、自分の心は別の宮の君にひかれるので。
この返事……紅梅の歌に對する返事を明瞭にもなさらず。
つとめて……翌朝大夫が退出するのに託して氣の無い書き振りで。
花の香に……中の君の夫としてふさはしい程の私なら何の貴方の御消息を無關心では居りませうぞ、然し不似合なわが身が殘念です。
なほ今は……もうかうなつては父紅梅などに立入らせず、貴方が窃に宮の君に手引をして下さい。

し給ふ。「今宵は宿直なゝめり。やがて此方にを」と召し籠めつれば、春宮にもえ參らず、花も恥かしく思ひぬべく芳ばしくて、氣近く臥せ給へるを、若き心地には、類なく嬉しく懷かしく思ひ聞ゆ。「この花のあるじは、など春宮には移ろひ給はざりし。」「知らず。心知らむ人になどこそ聞き侍りしか」など語り聞ゆ。大納言の御心ばへは、わが方樣に思ふべかゝめると聞き合はせ給へど、思ふ心は異に沁みぬれば、この返事けざやかにも宣ひやらず。つとめてこの君のまかゝづるに、なほざりなるやうにて、

「花の香にさそはれぬべき身なりせば
風のたよりを過さましやは」

さて「なほ今は翁どもに、さかしらせさせで、忍びやかに」と返す〴〵宣ひて、この君も東のをば、やむごとなく睦ましう思ひ增したり。なかなか異方の姫君は見え給ひなどして、例の兄弟のさまなれど、童心地に、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへを、かひある樣にこの君も……大夫も宮の君を。
なか〳〵異方の……却て腹違ひの中の君は大夫に顔を見せたりして。
いと重りかに……大變おつとりして望ましい宮の君のお氣立なので。
かひある樣にて……いゝ婿取して立派な有樣にして上げたいものと。
春宮の御方―大君。
おなじ事とは……何れにしても同じ姉とは思ふが、宮の君が東宮妃にならなかつたのが殘念だから、せめて匂宮でも宮の君の婿君にしたらなあと思つてゐたのに。
花のついでなり―花につけた便りである。
あまり好きたる……匂宮は餘り浮氣つぽい傾があるのを我々が感服しないとお聞きになつて、夕霧や我我の前では如何にも實體らしく自制していらつしやるのが笑止だ。
あだ人に……浮氣男としての資格は十分な御樣子だものを。
後言ちて―蔭口をいつて。
參らせ給ふに―大夫を參内させるのに託して。
もとつ香の……元々からの貴方の芳ばしい御袖が觸れましたら花も猶更色香が增して、いふにいはれぬ美しい花よと評判が立ちませう。
誠にいひならさむと……紅梅が一時

て見奉らばやと思ひありくに、春宮の御方のいと花やかにもてなし給ふにつけて、おなじ事とは思ひながら、いと飽かず口惜しければ、この宮をだに氣近くて見奉らばやと思ひありくに、嬉しき花のついでなり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。「ねたげにも宣へるかな。あまり好きたる方にすゝみ給へるを、宥し聞えずと聞き給ひて、右の大臣、われらが見奉るには、いと物まめやかに、御心をさめ給ふこそをかしけれ。あだ人にせむに、足らひ給へる御樣を、强ひてまめだち給はむも、見所少なくやあらまし」など後言ちて、今日も參らせ給ふに、また、

「もとつ香のにほへる君が袖なれば
花もえならぬ名をや散らさむ

すき〴〵しや。あなかしこ」と、まめやかに聞え給へり。誠にいひならさむと思ふ所あるにやと、さすがに御心ときめきし給ひて、

「花の香をにほはす宿にとめゆかば

の挨拶でなく本氣で中の君をやらうと思つてゐるのか知らんと。

花の香を……中の君の立派なお人柄を慕つて行きたいが、若しや只色香のみをめでる浮氣心だと世の人が誇らうかと心配です。

北の方……大君の介添で參内してゐた眞木柱が退出なされて。

若君の……大夫が先夜宿直して。

人はなほど……外の人は何でもないと思ひましたが、春宮が機敏にお感づきなされて。

うべ我をば……道理で私を嫉つて寄りつかぬのだと。

こゝに御消息や……貴方から匂宮にお手紙でもお上げになりましたかあなたのつま—宮の君の室の軒端。

たゞならで—無意味でなく。

交らひし給はむ……宮中御奉公の女房も中々匂宮などには薫物を炷きしめてゐないものです。

源中納言—薫。

から樣に—匂宮のやうに。

人香こそ—身體に具はる香が世に類がない。

かけ聞え給ふ—匂宮の事を口に上せて噂をなさる。

宮の御方は……宮の君はもう樣々の分別つく位に成人していらつしやるので。

などなほ心解けずいらへ給へるを、心やましと思ひ居給へり。

北の方まかでて給ひて、内裏わたりの事宣ふついでに、「若君の一夜宿直して罷り出でたりし匂のいとをかしかりしを、人はなほと思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、『兵部卿の宮に近づき聞えにけり。うべ我をばすさめたり』と氣色どり怨じ給ひしこそをかしかりしか。こゝに御消息やありし。さも見えざりしを」と宣へば、「さかし。梅の花めで給ふ君なれば、あなたのつまの紅梅いと盛なりしを、たゞならで折りて奉れたりしなり。移香はげにこそ心殊なれ。交らひし給はむ女などは、さはえしめぬかな。源中納言は、かう樣に好ましうは炷き匂はさで、人香こそ世になけれ。怪しう前の世の契いかなりける報にかと、ゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど、梅はおひ出でけむ根こそあはれなれ。この宮などのめで給ふ、さる事ぞかし」など、花によそへてもまづかけ聞え給ふ。

見知り聞き咎め……眼にも耳にもとめぬでもないけれど。

人に見え……夫を持ち人並に夫婦生活などいふ事は全くよそ事のやうに斷念していらつしやる。

時による心—追從心。

さし向ひたる……押晴れて親に大事にされる姫君達には皆骨折つて御機嫌を取結び。

此方は—宮の君の方は。

宮は御ふさひの方に……匂宮は宮の君こそ自分にふさはしい方らしく傳聞なされて、どうか手に入れたいものと深く思ふやうになられた。

若君を—匂宮は大夫を。

大納言の君……夫紅梅が匂宮を中の君の壻君にと深く思込まれて、若し匂宮が當方の望通り申込んで來られたらと、匂宮の御意向をさぐり。以上眞木柱の意中。

かく思ひ寄るべくも……匂宮がこんなに、一向さうした氣もない宮の君へ假令本心からでないにしても色々仰しやつて下さるのは詮もない事だのにと。

はかなき御返り……一寸した御返事すら宮の君から來ないので。

何かは……匂宮の御人柄などは宮の君の壻君としてかしづきもしたく、將

宮の御方はもの思し知る程にねびまさり給へれば、何事も見知り聞き咎め給はぬにはあらねど、人に見え、世づきたらむ有樣は、更にも思し離れたり。世の人も時による心ありてにや、さし向ひたる御方々には、心をつくし聞え佗び、今めかしき事多かれど、此方はよろづにつけ、物しめやかに引き入り給へるを、宮は御ふさひの方に聞き傳へ給ひて、深ういかでと思ほしなりにけり。若君を常に纏はしよせ給ひつゝ、忍びやかに御文あれど、大納言の君、深く心かけ聞え給ひて、さも思ひたちて宣ふことあらばと、氣色どり心設し給ふを見るにいとほしう、「眞木柱ひき違へて、かく思ひ寄るべくもあらぬ方にしも、なげの言の葉を盡し給ふ。かひなげなる事」と、北の方も思し宣ふ。はかなき御返りなどもなければ、負けじの御心そひて、思ほしやむべくもあらず。何かは、人の御有樣、などかさても見奉らまほしう、おひ先遠くなどは見えさせ給ふになど、北の方思ほし寄る時々あれど、いといたう色めき給ひて、通ひ給ふ忍所多く、八の宮の姫君にも御志淺からで、い

と繁うまかでありき給ふ頼もしげなき御心のあだ〳〵しさなども、いとど つゝましければ、まめやかには思ほし絶えたるを、辱なきばかりに、忍びて母君ぞ、たまさかにさかしらがり聞え給ふ。

来有望にもお見えなさるものを、などと眞木柱は考へることもあるけれど、「などか」の「か」は衍で「御有様などは」と續くのであらうといふ宣長説を採る。

八の宮―橋姫の巻の初に出る宇治の八の宮。源氏の異母弟。

まめやかには……眞木柱もまじめに考へ直すと宮の君を許す事は斷念して居られるけれど。

辱なき……御返事上げぬのも勿體ないといふ心持だけで以て。

母君―眞木柱。

さかしらがり……差出がましいながら御返事をお上げになる。

これは源氏の……この物語は源氏の御一族ではなかつた髭黒のお屋敷にゐた老女房達の生き殘つてゐるのが問はず語りに話し置いた事で、それは紫上方の女房達の話し傳へとは少し違ふやうだが、髭黒方の女房達のいふには「源氏の御子孫の事で誤つたいひ傳へなどの交つてゐるのは、我々よりも老耄した紫上方の女房達が間違へて話したものか知らん」など訝しがつてゐた、然し果してどちらの話が本當なのだらう、と以上記者の註。

尚侍―玉鬘。

故殿―髭黒。但その逝去の事はこゝに初めて見えた。

いつしかと……いつか〳〵と氣がせけてゐた姫君のお輿勸の事も、つひ延々になつてしまつた。

人の心……世間の人情は權勢にのみ追從する譯のものゆゑ。

大臣―髭黒。

その方の……さうした財政的の裏徴

竹河

この巻は薫十四五歳から二十三歳の時までの事。髭黒の關白が薨じて玉鬘は女の子の將來に心を痛めた。帝からも冷泉院からも、夕霧の子藏人少將からもその姉姫を望んで來た。薫は勸められて琴を一寸彈いたが、玉鬘はその爪音が我が父君のに似てゐるし、又容貌は不思議に兄の柏木に似てゐると思つた。少將も諦つたが、父髭黒に似て無風流な侍從は、母に勸められてやつと竹河を人につけて諦つた。冷泉院から又御消息があつたので、玉鬘は昔自分が院につらかつた償だと思つて、遂に姉姫を上げることにした。少將は失戀に泣いてゐるので、母雲居の雁もあはれに思つた。この新女御に對する院の御寵愛は格別で、女二の宮、男宮と續いて生まれた。女房達も女一の宮の御母弘徽殿の女御に同情して新女御をよくいはないので、玉鬘は院に上げた事を後悔した。それで帝へは妹姫を上げた。

巻の名は、薫の「竹河のはしうち出でし一ふしに深き心の底は知りきや」、藤侍從の「竹河に夜をふかさじと急ぎしもいかなるふしを思ひおかまし」の歌や、「竹河をおなじ聲に出だしてまだしけれどをかしう謠ふ」の文などによる。

これは源氏の御族にも離れ給へりし、後の大殿わたりにありける御達の落ちとまり殘れるが、問はず語りしおきたるは、紫のゆかり

はないけれど、ちよつと見ても穩ての樣子が打つて變つたやうで。かんの君の……玉鬘の近親の紅梅右大臣一門こそ數多世に時めいて居られるけれど、却て身分高い方々の間柄の常として、元々からも疎遠勝であつたのに。

故殿の……髭黒が情に乏しく、一本調子過ぎた御性格で。

誰にも……玉鬘も紅梅一門の人々に懷かしく音信も出來かねていらつしやる。

六條院には……源氏はすべて昔の通り玉鬘を娘分として、死後の財產處分の遺言狀にも、明石姫の次に玉鬘の事を書いて置かれたので。

右の大殿……夕霧などは源氏の志通り、紅梅等よりも却て玉鬘に親切があつて。

男君達―玉鬘腹の子息達。

殿おはせで後―髭黒の殘後。

自らなり出で……自然追々と立身なさる事もあらう。

大臣の奏し置き……生前髭黒が申上げてお置きなされたので、もう姫君達も妙齡になつたらうと主上が年月を御推量なされて、早く宮仕に上げよとの御諚が頻にあるが。

中宮の……明石姫が肩を並べるものも無い位に益々帝の殊寵を得て居られる御威勢に壓倒されて、他の女御更衣方は全く型無しであるその末席に連なつて。

遙に……高い所から明石姫にけらしからぬ女と目をそむけられるのも厄介だし、又さうかというて他の方に劣り、あれども無きが如き有樣でお仕するのを親として見て居らうのも心配だらうと、玉鬘は二の足踏んでいらつしやる。

いと懇に……熱心に玉鬘腹の姫君を御所望なされて。

かんの君の……玉鬘が昔冷泉院の御懇望に背いて髭黒の妻となつたつれなさまで。

今はまいて……昔ですら嫁つたものを今はまして自分の年老いて、貴女がぞつとせぬものとお嫁ひなさらうとも、安心な親代りと思つて姫君をお預け下さい。

いかゞはあるべき……どうしたものだらうか、自分が誠に拙い運命で髭黒に嫁したので帝からは案外に氣にくはぬものと思はれたので恥しく勿體ないのを、せめてわが晩年になりとも娘を上げて御機嫌を直して戴いたものか知らんと。

右の大殿の藏人の少將―夕霧の子息。

三條殿―雲居雁。

兄君達よりも……兄達よりも官途も

にも似ざゝめれど、かの女どものいひけるは、「源氏の御末々に僻事どものまじりて聞ゆるは、我よりも年の數つもり惚けたりける人の、僻覺にや」など怪しがりける、いづれかは實ならむ。尙侍の御腹に、故殿の御子は、男三人、女二人なむ おはしけるを、樣々にかしづき立てむことを思し掟て、年月の過ぐるも心もとながり給ひし程に、あへなくうせ給ひにしかば、夢のやうにて、いつしかと急ぎ思し、御宮仕もおこたりぬ。人の心、時にのみよる業なりければ、さばかり勢いかめしくおはせし大臣の御名殘、內々の御財物、領じ給ふ所々など、その方の衰へはなけれど、大方の有樣引きかへたるやうに、殿の內しめやかになりゆく。かんの君の御近きゆかり、そこらこそは世に廣ごり給へれど、なか〳〵やむごとなき御中らひの、もとよりも親しからざりしに、故殿の情少しおくれ、すく〳〵しさ過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふ事ありけるゆかりにや、誰にもえ懷かしく聞え通ひ給はず。六條院には、すべてなほ昔に變らず數まへ聞え給ひて、うせ給ひなむ後の事ども書きおき給へる 御處分の文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、右の大殿などは、なか〳〵その心ありて、さるべき折々音づれ聞え給ふ。男君達は御元服などして、おの〳〵大人び給ひにしかば、殿おはせで後、心もとなくあはれなる事もあれど、自らなり出で給ひぬべかゝめり。姫君達をばいかにもてなし奉らむと思しあれど、中宮のいよ〳〵並びなくのみ、なり勝り給ふ御けはひに壓されて、みな人無德に物し給ふめる末に參りて、遙に目をそばめられ奉らむも煩はしく、また人に劣り、數ならぬ樣にて見む、はた心盡しなるべきを思したゆたふ。冷泉院よりまた、いと懇に思し宣はせて、かんの君の昔本意なくて過し給ひしつらさをさへ、取り返し恨み聞え給ひて、「今はまいてさだすぎ、すさまじき有樣に思ひ捨て給ふとも、後やすき親になずらひて讓り給へ」と、いとまめやかに聞え給ひければ、い

越えて。少將は六男である。
申し給ふ—玉鬘腹の姫君に女をお迎
りなさる。
いづ方に……父方でも母方でも玉鬘
は夕霧とは深い親類關係ゆゑ。
氣遠くなどは……玉鬘の方ではよそ
よそしくは待遇なさらない。
女房にも……藏人少將は玉鬘方の女
房達へも近づき取入つて心の丈を
述べて相談する便宜があり、從つ
て女房達が少將の事を玉鬘母子の
傍で耳に眞の出來さうな程始終噂
してゐるのを、うるさくはあるも
のゝ又少將を氣の毒にも玉鬘は思
つていらつしやる。
母北の方の……この緣談が纏まるや
うにと、母君雲居雁からのお手紙
も度々玉鬘へお上げになる。
いと輕びたる……まだ少將は低い地
位ではありますが親類續きではあ
り、御承引下さる御樣酌もおあり
でせうか。
姫君をば……玉鬘は長女は更に臣下
の妻にやる氣はなく、次女を藏人
少將が今少し立身して世間の評判
も重々しく此方と釣合ふやうにな
つたら遣つてもよからうかと思つ
て居られた。
許し給はずば—藏人少將は玉鬘が御
承諾ないならば。

かゞはあるべき事ならむ、自らのいと口惜しき宿世にて、思の外に心づきなしと思されにしかば、恥かしう辱なきを、この世の末にや御覽じ直されまし、など定めかね給ふ。（コノ姫君ヘ）容貌いとようおはする聞えありて、心かけ申し給ふ人多かり。右の大殿の藏人の少將とかいひしは、三條殿の御腹にて、（兩親ガ）兄君達よりも引き越しいみじうかしづき給ひて、人柄もいとをかしかりし君、いと懇に申し給ふ。いづ方につけても、もて離れ給はぬ御中らひなれば、この君達の睦びまゐり給ひなどするは、いと氣遠くなどはもてなし給はず。女房にもけ近う馴れ寄りつゝ、思ふことを語らふにもたよりありて、夜晝あたり去らぬ耳かしがましさを、うるさきものゝ、心苦しきに、かんの殿も思したり。母北の方の御文も、しば〳〵奉り給ふ。（夕霧ハ）いと輕びたる程に侍れど、思しゆるす方もやと」となむ大臣も聞え給ひける。姫君をば（玉鬘ハ）更にたゞの樣にも思ひ掟て給はず、中の君をなむ、今少し世の聞えかろ〳〵しからぬ程に、なずらひならば、さもやと思しける。許し給はずば盜みも取りつべく、

こよなき事とは……この緣組を玉鬘はひどく不釣合だとも思はないが、娘の方でまだ承諾しないのにふと した拍子に關係でもつけられては世間の音沙汰も面白からぬ譯だから、この緣談を取次ぐ女房達をもお戒めになつて。
過ちひき出づな—輕率な事をするな。
くたされて—氣を折られて。
六條院の御末—源氏の晩年。
朱雀院の宮—女三宮。
生まれ給へりし君—薫。
冷泉院に……冷泉院が皇子の如くに愛していらつしやる四位の侍從。
これは薫の身分の說明句。
きびはに幼かるべき……年端もゆかぬ幼い年配にあはせては。
かんの君は—玉鬘は。
この殿は……玉鬘の邸は女三宮の邸と大變近い距離なので。
君達にひかれて—薫が髭黒の子息達に誘はれて。
心にくき女の……玉鬘邸はゆかしい姫君達のいらつしやる處だから、若い男の氣どらぬは無くちらほら妻を見せる中に。
この立ち去らぬ—常に入り浸りの。
四位の侍從—薫。
六條院の……薫は源氏の近親と思ふせねで、一層立勝つて見えるので

むくつけきまで（少將ハ）思へり。（玉鬘ハ）こよなき事とは思さねど、女方の心ゆるしをも、「あなかしこ、過ちひき出づな」など宣ふにくたされてなむ煩はしがりける。
六條院の御末に、朱雀院の宮の御腹に生まれ給へりし君は、冷泉院に御子のやうに思しかしづく四位の侍從、その頃十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべき程よりは、心掟おとなゝ〳〵しく、目やすく、人に勝りたる生先しるく見え給ふを、かんの君は、婿にても見まほしと思したり。この殿は、かの三條の宮といと近き程なれば、さるべき折折の遊び所に、君達にひかれて見え給ふ時々あり。心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬなう、見えしらがひさまよふ中に、容貌のよきはこの立ち去らぬ藏人の少將、懷かしく心恥かしげにてなまめいたる方は、この四位の侍從の御有樣に似る人ぞなかりける。六條院の御けはひ近うと思ひなすが、心殊なるにやあらむ、世

もあらうか。
若き人々―玉鬘邸の若い女房達。
院の御心ばへ―源氏のお氣だて。
右の大臣は……夕霧は餘り大層な御身分で何か機會がなくては容易にお目にかゝれないものを。
兄弟のつらに―玉鬘が薫を兄弟と同列に。
かの君も……薫の方でも懐かしい所と思つて玉鬘の許へ出入なさる。
若き人ども……若い女房達。
口惜しくさう〳〵しき……殘念な物足らぬ氣がして薫を唆かした。
大納言―紅梅。
高砂謡ひしよ―この人は曾て賢木の巻で高砂を謡つた人だと、記者の説明。（三九一頁參照。）
藤中納言……藤中納言これは鬚黒の長男で眞木柱と同腹。
參り給へり―玉鬘の許に。
人の御有樣―夕霧の御樣子。
君達―夕霧の子息達。
何事を思ふらむと―何の物思があらうか少しの心配も無さうにと。
世と共に……藏人少將は兩親に愛せられてゐる事は格別であるが、常不斷に打沈んで物思がありさうに見える。世と共には「打濕り」にかゝる句。
大臣は……夕霧は玉鬘と几帳を間に

の中に自らもてかしづかれ給へる人なり。若き人々は、心殊にめであへり。かんの殿も「玉」げにこそ目やすけれ」など宣ひて、懐かしう物聞え給ひなどす。「玉」院の御心ばへを思ひ出で聞えては、慰む世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも誰をかは見奉らむ。右の大臣は事々しき御程にて、ついでなき對面も難きを」など宣ひて、兄弟のつらに思ひ聞え給へれば、かの君もさるべき所に思ひ聞え給ひて參り給ふ。世の常のすき〳〵しさも見えず、いといたう靜まりたるをぞ、こゝかしこの若き人ども、口惜しくさう〳〵しきことに思ひて、いひ惱ましける。

正月の朔日ごろ、かんの君の御兄弟の大納言、高砂謡ひしよ、藤中納言、故大殿の太郎眞木柱の一つ腹など參り給へり。右の大臣も、御子ども六人ながら引き連れておはしたり。御容貌よりはじめて、飽かぬことなく見ゆる、人の御有樣おぼえなり。君達も樣々いと清げにて、年の程より官位も過ぎつゝ、何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に

おいて昔通りにお話をなさる。
その事となくて……これといふ用が無いので繁々御機嫌も伺ひませぬ。
うひ〳〵しく―臆劫に。
過し侍るをなむ―心には懸けながら打過してゐるのが殘念です。
若き男どもは……私の子供達は然るべき御用があつたらお命じ下さい、必ず誠意を盡して當方の心持を認めて戴くやうにせよと爺々數へて居ります。
世に經る數にも……世にある人數にも入らぬやうになりゆく私を、人がましく相手にして下さるので。
過ぎにし御事―源氏の御事。
院より宣はする事―冷泉院から長女を懇望される事を。
はか〴〵しう……歴とした後楯の無い者の宮仕は却てせぬがましな位の結果になるものをと。
内裏に仰せらるゝ……主上の方でも御所望の仰があるやうに承つてゐましたが、どちらに御決定なすつたものでせうね。
院は―冷泉院は。
世にあり難き……世に稀な御器量は少しもおふけなさいませんので、私も可なりな娘を持つてゐたら院へ上げたいと思ひつきながら、立派な方々擇ひの中に御奉公出來る

藏人の君は、かしづかれたる樣殊なれど、うちしめりて思ふ事あり顔なり。大臣は御几帳へだてゝ、昔に變らず御物語きこえ給ふ。「夕」その事となくて、しば〳〵も聞え承はらず。年の數そふまゝに、内裏參よりはかのありきなど、うひ〳〵しくなりて侍れば、古への御物語も聞えまほしき折々、おほく過し侍るをなむ。若き男どもはさるべき事には召し使はせ給へ。『必ずその志御覽ぜられよ』といましめ侍る」など聞え給ふ。「玉」今はかく世に經る數にもあらぬやうになりゆく有樣を、思し數まふるになむ、過ぎにし御事もいとゞ忘れ難く思ひ給へられける」と申し給ひけり。序に、院より宣はする事ほのめかし聞え給ふ。「玉」はか〴〵しう後見なき人の交らひは、なか〳〵見苦しきをと、かたぐ〳〵思ひ給へなむ煩ふ」と申し給へば、「夕」内裏に仰せらるゝ事のあるやうに承はりしを、いづ方に思ほし定むべき事にか。院はげに御位を去らせ給へるにこそ、盛過ぎにたる心地すれど、世にあり難き御有樣は、舊り難くのみおはしますめるを、よろしう生ひ出づる女子侍

やうな娘が居りませんので。
女一の宮の女御は……女一宮の御母なる弘徽殿女御（冷泉院の第一女御）は、貴女の姫君を冷泉院へお上げの事を御承諾なされましたか。
弘徽殿は玉鬘には異腹の姉に當るゆゑにいふ。
先々の人……前々にも冷泉院へ娘を上げようとした人で、弘徽殿の御苦情ゆゑにうまく運ばなかつた事もありました。
女御なむ……弘徽殿が、今では無聊閑散になつた境涯をも、冷泉院と心を合せて姫君の面倒を見て紛らはしたいからなど、あの方がお勸め下さるにつけて、どうしよう上げようか知らといふ氣にもなる譯で御座います。
これかれ—誰彼一同。
三條の宮—女三宮の邸。
朱雀院の……朱雀院の舊恩を忘れぬ人達も、源氏の御關係の人々も。
猶かの入道の宮……矢張あの女三宮のお邸を捨置きかねて。
左近の中將—髭黒の子息で玉鬘腹。
右中辨、侍從も同樣。
大臣の御供に—夕霧にお供して。
四位の侍從……薫が玉鬘の許へ參上なされた。
そこら大人しき……大勢集つた優雅らましかばと思ひ給へ寄りながら、恥かしげなる御中に交らふべき者の侍らでなむ、口惜しう思ひ給へらるゝ。そも〳〵女一の宮の女御は許し聞え給ふや。先々の人、さやうの憚りにより、滯ることも侍りし」と申し給へば、「女御なむ『徒然にのどかになりにたる有樣も、同じ心に後見て慰めまほしきを』など、かの勸め給ふにつけて、いかゞひて、三條の宮に參り給ふ。朱雀院のふるき心物し給ふ人々、六條院の方ざまのも、方々につけて、猶かの入道の宮をば、えよきず參り給ふなゝめり。この殿の左近の中將、右中辨、侍從の君なども、やがて大臣の御供に出で給ひぬ。ひき連れ給へる勢ことなり。夕つけて四位の侍從參り給へり。そこら大人しき若君達も、あまた樣々に何れかはわろびたりつる、皆目安かりつる中に、たち後れて、この君の立ち出で給へる、いとこよなく目とまる心地して、例の物めでする若き人々は、「なほ殊なりけり」などいふ。「この殿の姫君の御傍には、これをこ

な貴公子達も各人各樣誰が醜い人があらうかい。
たち後れて—時刻が遲くなつて。
この君の—薫が。
若き人々—若い女房達。
なほ殊なりけり—矢張薫君は格別優れた御容姿だなあ。
この殿の姫君の……姉姫君のお婿樣には薫君をして上げて見たいとあたり憚らずいふ。
姫君と聞ゆれど……いかに深窓に育つた世間見ずのお姫樣でも少し氣のつく人なら、薫が成程人より優れてゐるわと、お分りになるだらうと思はれる。
かんの殿—玉鬘。
おほどかなるに—まだ解が訓はず大まかであるのに。
いと好かせ……薫が多少あだつぽく振舞つてほしいと思はれる程しなやかな樣子をして居られるので。
人々はかなきことを……女房達がたわいも無い事をいひ懸けるのに。
宰相の君—女房の名。
折りて見れば……手折つて見たら一層色艶も立勝つて見えようかと思はれるほど、紅梅の初花よ、もつと色つぽくなまめいてくれとの意。
梅は薫にたとへていふ。
口はやしと—當意卽妙だと。
そさし並べて見め」と聞きにくゝいふ。げにいと若うなまめかしき樣して、うちふるまひ給へる匂香など尋常ならず。姫君と聞ゆれど、心おはせむ人は、げに人よりは勝るなゝめりと、見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿、御念誦堂におはして、「こなたに」と宣へば、東の階より昇りて、戸口の御簾の前にゐ給へり。御前近き若木の梅、心もとなく蕾みて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いと好かせ奉らまほしき樣のし給へれば、人々はかなきことをいふに、言少なに心にくき程なるを、ねたがりて、宰相の君と聞ゆる上﨟の詠みかけ給ふ。

宰相「折りて見ばいとゞ匂もまさるやと
すこし色めけ梅のはつはな」

口はやしと聞きて、

薫「よそにてはもぎ木なりとや定むらむ
したに匂へる梅のはつはな

さらば袖ふれて見給へ」などいひすさぶに、「まことは色よりも」と、口

よそにては……よそ目では私を殺風景な男だと思込んでゐるでせうが、案外さうでなく内々は色香もありますよ。もぎ木は只茂つた木。さらば袖ふれて……嘘と思ふならかかり合つて御覧なさい。次項參照。まことは色よりも—古今「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」。薫が既にこの歌を引いて「袖ふれて」といつた故、同じ歌で答へた。この應答は暗に薫の體香をいつてゐる。引きも動かしつべく—袖も引張りかねない位に。かんの君—玉鬘。恥かしげなるまめ人……薫のやうな此方で極り悪い位な眞面目男にまで驚ぎ立てる、よく〳〵まあ厚かましいことよ。まめ人とこそ……眞面目男とはあり難迷惑な、どうも不景氣な名ではあるじと薫は思つて居られた。あるじの侍從—玉鬘の三男藤侍從。殿上などもまだ殿上に出仕しないので、處々へ年賀にも回らないで丁度居合はせた。淺香の折敷—沈香の若木で作つた折膳。大臣は……夕霧は御叔父になるに關つて、源氏に大變よく似ていらつしやる。この君は—薫は。かの御若盛—源氏の青年時代。名殘さへ……薫の歸つたあとに仄かに殘つた香を。めでくつがへる—甚しく愛でる。侍從の君……薫は眞面目男といはれた評判を心外だと思つたので。匂少なげに……無風流なやうに取扱はれたので、浮氣者の女房達に私の好色ぶりを見せてやらうわいと薫は思つて。藤侍從—玉鬘の三男。隱れなむと……その人が隱れようとしたのを薫が引留めたところが。この常に……いつも此處らを徘徊する例の藏人少將であつた。人のゆるさぬ事……藏人少將のやうに無理な戀路に踏入るのは。まろはいと……私は一向に勝手が分りません。梅が枝—催馬樂「梅が枝に來ゐる鶯や、春かけてハレ、春かけて鳴けども未だヤ、雪はふりつゝアハレ、ソコヨシヤ雪はふりつゝ」。うそぶきて—口ずさんで。人々あづまを……女房達が和琴を大變面白く梅が枝に合せて彈いた。女の琴にて……梅が枝は呂の調で、女の彈奏としてはその調はかう上口引きも動かしつべくさまよふ。かんの君、奥の方よりゐざり出で給ひて、「玉うたての御達や、恥かしげなるまめ人をさへ、よくこそ面なけれ」と忍びて宣ふなり。まめ人とこそ附けられたりけれ、いと屈したる名かなと思ひ給へり。あるじの侍從、殿上などもまだせねば、所々にもありかでおはしあひたり。淺香の折敷二つばかりして、菓子、盃ばかりさし出で給へり。「大臣はねびまさり給ふまゝに、故院にいとようこそ覺え奉り給へれ。この君は容貌似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとしめやかに、なまめきたるもてなしぞ、かの御若盛思ひやらるゝ。」かう樣にぞおはしけむかし」など思ひ出で聞え給ひて、うちしをれ給ふ。名殘さへとまりたる芳ばしさを、人々はめでくつがへる。侍從の君、まめ人の名をうれたしと思ひければ、二十餘日の頃、梅の花盛なるに、匂少なげに取りなされしすき者、馴らはさむかしと思しにもありかでおはしあひたり。中門入り給ふ程に、前よりおなじ宿直姿なる人立てりけり。隱れなむと思ひけるを、引きとゞめたれば、

この常に立ち煩ふ少將なりけり。寢殿の西面に、琵琶、箏の琴の聲するに、心を惑はして立てるなゝめり。苦しげや、人のゆるさぬ事思ひはじめむは、罪深かるべき業かなと思ふ。琴の聲も止みぬれば、「薫いざしてよりもしるく、さとうち匂へば、妻戸おし開けて、人々あづまをいとよく掻き合はせたり。女の琴にて、呂の歌はかうしも合はせぬを、いたしと思ひて、今ひとかへし返し謠ふを、琵琶も二なく今めかし。故ありて、もてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば、今宵は少しうち解けて、はかなし言などもいふ。内より和琴さし出でたり。かたみに讓りて手觸れぬに、侍從の君して、かんの殿「故致仕の大臣の御爪音になむ、いとよう通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今宵はなほ驚にもさそはれ給へかし」と宣ひ出だしたれば、あまえて爪くふべき事にもあらぬをと思ひて、をさ〳〵心にも入れ

手には合せられぬものだのに中々うまいと薫が思つて。

故ありて……こゝは中々風情深く取繕つてゐるお屋敷だわいと。

かたみに―薫と蔵人少将と互に。

侍従の君して……三男藤侍従を取次として玉鬘が。

故致仕の大臣……貴方のお琴は私の亡父の爪音に似て居られると豫て聞いてゐますので、眞實聽きたいと存じます、今晩は鶯の音に誘はれて、やはり貴方も音をお立てなさい。

あまえて……はにかんで爪を噛んでゐるでもないと薫は思つて。

掻き渡し―彈いた。

常に見奉り……玉鬘には、致仕大臣は常に馴れ親しんだ親ではないが。

この君は―薫は。

故大納言―柏木。

只それとこそ―全く柏木その儘と。

舊めい給ふしるしの……年寄つて愚痴になつた證據の。

さき草―催馬樂「この殿は、うべも富みけり、さき草のアハレ、さき草のハレ、さき草の三つば四つばの中に、殿作りせりヤ、殿づくりせりヤ」。

さかしら心……餘計なおせつかひしようとする年寄も交つてゐない故。

ず掻き渡し給へる氣色、いとひゞき多く聞ゆ。常に見奉り睦びきこえざりし親なれど、世におはせずなりにきと思ふにいと心細きに、はかなき事のついでにも思ひ出で奉るに、いとなむあはれなる。「大方この君は、あやしう故大納言の御有樣に、いとよう覺え、琴の音なども、只それとこそ覺えつれ」とて泣い給ふも、舊めい給ふしるしの涙もろさにや。少將も聲いと面白うて、さき草うたふ。さかしら心つきて、うち過したる人もまじらねば、自らかたみに催されて遊び給ふに、あるじの侍從は、故大臣に似奉り給へるけにや、かやうの方はおくれて、盃をのみすゝむれば、「こゝに有り合せたまゝに薫にお贈りになる。河をおなじ聲に出だして、まだ若けれどをかしう謠ふ。簾のうちより土盃さし出づ。「酵の進みては、忍ぶることもつゝまれず、僻言する業とこそ聞き侍れ。いかにいかにもてない給ふぞ」と、とみにうけひかず。小桂重なりたる細長の、人香懐かしう沁みたるを、取りあへたるまゝに被け給ふ。「何ぞもぞ」など さうどきて、侍從はあるじの君にうち被け

あるじの侍從……藤侍從は亡父髭黒に似て居られるせぬか、音樂などは下手で酒ばかり飲んでゐるので。

ことぶきをだに……御祝儀だけでもお謠ひなさらぬか。

竹河―催馬樂「竹河の橋の詰なるヤ花園にハレ、花園に我をば放てヤ、めざしたぐへて」。

おなじ聲に―他の人々と合せて。

僻言する……つまらぬ事まで喋つてしまふものだと聞いてゐます。

いかにもてない給ふぞ―どれ程飲ませようと仰しやるのですか。

うけひかず―杯を受けない。

取りあへたるまゝに……そこに有り合せたまゝに薫にお贈りになる。

何ぞもぞ……何の爲の下され物ですか、など戯れつゝ薫はそれを藤侍從に打掛けて。さうどきは騒ぐ意。

引きとゞめて……藤侍從は薫を引留めて又打掛けようとするけれど。

水驛にて……謌歌の人々の廻り歩く家々を驛路に擬し鄭重に饗應する處を飯驛又は夠驛といひ、酒や湯漬のみを出して小憩せしめる處を水驛といふ。「竹河」は謌歌の時謠ふもの故かく戯れたので、酒ばかり飲まされて夜も更けましたの意。

この源侍從の君……この邸には薫がこんなに徘徊するらしいから、邸

内の人々は皆薫に好意をもつて居るのだらう。

人はみな……人々は皆薫君に好意を寄せてゐるのであらう、私は只一人で春の夜の闇に惑うて歎いて居りますとの意。花を薫に擬した。

をりからや……折にふれては誰に對しても情は知つてゐるつもりです只薫君に對してのみ心を傾ける譯でもありませんとの意。

四位の侍従―薫。

見給へと覺しう―玉鬘にも御覽なさいといふ樣りらしく。

竹河の……竹河の歌の一端を誦つて仄めかしたあの一句の中に、私の深い心の底はお汲み下されましたかの意。竹河の歌の末節に「めざしたぐへて」とあるにより、姫君に心あるをいふ。端に橋をかけた。

いかなる人―いかなる人なれば。

院にも……源氏にも死別なされ、御母女三宮が出家の身で不十分な養育をなされたけれど。

この君達の……御自分の子息達の手蹟の拙いことを。

げにいと若く―成程大變未熟な筆で。

夜べは水驛……昨夜は水驛のやうにすぐお立になつたのを、人々が怪んでをりました。

竹河に……竹河歌うた夜貴方が急いで去ぬ。引きとゞめてかづくれど、「水驛にて夜更けにけり」とて逃げにけり。少將は、この源侍従の君のかうほのめき寄るめれば、皆人これにこそ心寄せ給ふらめと、我が身はいとゞ屈んじ、いたく思ひ弱りて、あぢきなうぞ怨むる。

「人はみな花に心をうつすらむ
　ひとりぞまどふ春の夜のやみ」

うち歎きて立てば、内の人の返し、

「をりからやあはれも知らむ梅の花
　たゞかばかりに移りしもせじ」

あしたに四位の侍従の許より、あるじの侍従のもとに「夜べはいと亂りがはしかりしを、人々いかに見給ひけむ」と、見給へと覺しう、假名がちに書きて、端に、

「竹河のはしうちいでしひと節に
　ふかき心のそこは知りきや」

と書きたり。寢殿にもて參りて、これかれ見給ふ。「手などもいとをかしうもあるかな。いかなる人、今よりかく整ひ給ふらむ、幼くて院にも後れ奉り、母宮のしどけなうおほし立て給へれど、なほ人には勝るべきにこそあゝめれ」とて、かんの君は、この君達の手など あやしきを恥かしめ給ふ。返事げにいと若く、「夜べは水驛をなむ、人々各め聞ゆめりし。

竹河に夜をふかさじといそぎしも
　いかなる節に思ひおかまし」

げにこの節をはじめにて、この君の御曹司におはして、氣色ばみ寄る。少將の推し量りしもしるく、皆人こゝろ寄せたり。侍従の君も若き心地に、近きゆかりにて、且暮睦びまほしう思ひけり。

三月になりて、咲く櫻あれば散りかひ曇り、大方の盛なる頃、のどやかにおはする所は紛るゝことなく、端近なる罪もあるまじかゝめり。そのほど十八九ばかりにやおはしけむ、御容貌も心ばへも、とりど

で歸つたのも、あれはどういふ事情に分別したらよいのでせう、餘所にさう急ぐ處のあるやうでは貴方の深き心と仰しやるも當になりませんとの意。

この節を……この機會を最初として薫は藤侍従のお部屋に出入し姉姫君に氣のある樣子を見せる。

皆人こゝろ寄せたり―玉鬘始め人々が皆薫に好意をもつてゐる。

侍従の君も―藤侍従も。

咲く櫻あれば……「櫻咲く櫻の山の櫻花咲く櫻あれば散る櫻あり」(河海)古今「櫻花ちりかひ曇れ老らくの來むといふなる道まかふがに」。この二首の意を取らず詞のみを取り來つたもの。

のどやかにおはする……閑散な玉鬘の邸は他に取紛るゝ事もなく、端近く出て春光を賞しても人目に觸れる處もないから、輕率の誘を受ける事も無さうである。

姫君は―玉鬘腹の姉姫君は。

たゞ人にて……臣下の妻として見るには不似合な程お立派である。

櫻―櫻がさね。表白、裏濃赤。

山吹―山吹襲。表朽葉色、裏黃。

今一所―玉鬘の妹姫君。

薄紅梅に櫻色―薄紅梅のは細長、櫻色は衣。

りにぞをかしき。姫君はいとあざやかに氣高う、今めかしき樣し給ひて、げにた〻人にて見奉らば、似げなうぞ見え給ふ。櫻の細長、山吹などの折にあひたる色合の、懷かしきほどに重なりたる裾まで、愛敬のこぼれ落つるやうに見ゆる、御もてなしなどもらう〳〵じう、心恥かしき氣さへ添ひ給へり。今一所は、薄紅梅に櫻色にて、柳の絲のやうにたを〳〵と見ゆ。いとそびやかに、なまめかしう澄みたる樣して、重りかに心深き氣はまさり給へれど、匂ひやかなるけはひは、こよなしとぞ人思ひたる。碁うち給ふとてさし向ひ給へる、かんざし御髪のかゝりたる樣ども、いと見所あり。侍從の君見證し給ふとて、近うさぶらひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて、侍從の覺こよなくなりにけり。御碁の見證許されにけるをや」とて、おとな〳〵しき樣して、つい居給へば、御前なる人々とかう居直る。中將、「宮仕のいそがしう侍る程に、人に劣りにたるは、いと本意なきわざかな」と愁へ給へば、「辨官はまいて、私の宮仕怠りぬべきまゝに、さのみやは思し棄てむ」など申し給ふ。碁打ちさして恥らひておはさうずる、いとをかしげなり。

「內裏わたりなど罷りありきても、故殿のおはしまさましかばと思ひ給へらるゝことの多くこそ」など、涙ぐみて見奉り給ふ。二十七八の程に物し給へば、いとよく整ひて、この御有樣どもを、いかでいにしへも、匂まさりてをかしき櫻を折らせて、「外のには似ずこそ」など、翫び給ふを、「幼くおはしましゝ時、『この花はわがぞ、わがぞ』と爭ひ給ひしを、故殿の『姫君の御花ぞ』と定め給ふ。上は『若君の御木』とこそ」など、この櫻の、老木になりにけるにつけても、過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人に後れ侍りにける身の愁もとめ難うしはや」とて、こぼれ出でぬべき涙を紛らはし給ふ。

居られた通りに型をつけたいものだと思つて居られた。

爭ひ給ひしを……姉姫と妹姫と爭はれたのを、父君髭黒は姉君の花だとお極めになつた、又母上玉鬘は妹姫の木とお極めになつたのに。いとさは……私はそれ程泣き騷ぎはしないけれど隨分不平で堪へられませんでしたよ。

數多の人に……父上髭黒を始め多くの人に死に別れました悲歎も忘れかねます。

例よりは……平生よりもゆつくり落着いていらつしやる。

人の腑になりて……中將は既に妻を持つて今はゆつくり自邸に落着いては居られぬが、今日花に心を奉かれて眺めて居られる。

かんの君……玉鬘はこんなに成人した人の親になられた御年配の割合には。

この御有樣……玉鬘の御容姿。

何につけてかはと……どんな口實で玉鬘を近づけようかと。

姫君の御事を……姉姫君を早く宮仕に出すやうに、達て玉鬘に催促なさるのであつた。

院へ……姫君を冷泉院へ差上げる事は。

この君達……中將や右中辨等をいふ。

と若う清げに、なほ盛の御容貌と見え給へり。

冷泉院の帝は、多くはこの御有様の猶ゆかしう、昔戀しう思し出でられければ、何につけてかはと思し廻らして、姫君の御事を、あながちに聞え給ふにぞありける。院へ參り給はむことは、この君達ぞ「なほ物のはえなき心地こそすべけれ。よろづの事時につけたるをこそ、世の人も許すめれ。げにいと見奉らまほしき御有様は、この世に儔なくおはしますめれど、盛ならぬ心地ぞするや。琴笛のしらべ、花鳥の色をも音をも、時に從ひてこそ、人の耳にもとまるものなれ。春宮はいかゞ」など申し給へば、「いさや、初めよりやむごとなき人の、傍もなきやうにてのみ物し給ふめればこそ、なか〳〵にて交らはむも、胸いたく、人笑はれなる事もやあらむとつゝましけれど、殿おはせましかば、行末の御宿世は知らず、只今はかひある様にもてなし給ひてましを」など宣ひ出でて、皆物あはれなり。

中將など立ち給ひて後、君達は打ちさし給ひつる碁うち給ふ。昔より

なほ物のはえなき……冷泉院への宮仕では矢張はえない感が致しませう。

時につけたる―權勢に近づく。

げにいと……成程冷泉院のいつまでも〳〵眺めたい程美しい御委は。

盛ならぬ……御退位の御身ゆゑ下り阪のやうな氣が致します。

春宮はいかゞ―春宮へ差上げたらどんなものでせう。

いさや―さあ、それもどんなものか。

初めより……春宮には最初から夕霧の息女が竝ぶ人もない寵を受けて附いていらつしやるので、なまじつかな幅の利かぬ宮仕するのも。

殿おはせましかば……髭黒御在世ならば將來の運不運はとにかく、現在の處では姫君達を在甲斐あるやうにお世話なされませうものを。

君達は―姉妹の姫君達は。

昔より……幼い時互にわが物と爭ひ合つた櫻を賭物にして。

花を寄せてむ―櫻を引渡しませう。

人々みな……雙方の侍女達は皆わが御主人の方に力瘤を入れてゐる。

例の少將……藏人少將が藤侍從の處へ來られたのに。

うち連れて……藤侍從は兄弟達と連立つて出て行かれた跡なので。

から嬉しき折を……こんな絶好の機會を見つけたのは。

はかなき心になむ―少將は我ながらたわいもない心だと思ふ。

櫻色の……櫻襲を着たのが姉姫と見分けられた。

散りなむ後の形見―古今「櫻色に衣は深く染めて著む花の散りなむ後の形見に」。

異樣に……姉姫君が他人の物になつてしまはれることが。

若き人々―侍女達。

右勝たせ給ひぬ―妹姫が勝たれた。

高麗の亂聲……早く勝圖をお揚げなさいよとの意。高麗樂は右方の樂ゆゑ物爭に右が勝つと高麗の樂を奏する。今はそれに擬していふ。

右に心よせ奉り……妹君を慕うてそのお居間なる西の御殿に接近してゐた櫻を姉君が御自分の物になされて、だから年來お爭があつたのさ。それが今解決して最早安心だとの意を含む。

さしいらへも……横から何か口出しをしたいけれど。

心地なくやはと……無遠慮でよいものか、差控へるが至當だと。

紛れもや……不慮の機會もあるかしらと、少將はあたり去らず密かに君達は―姉妹の姫君達は。

爭ひ給ふ櫻を賭物にて、三番に數ひとつ勝ち給はむ方に、花を寄せてむ」と戯れかはし聞え給ふ。暗うなれば、端近うて打ちはて給ふ。御簾巻きあげて、人々みな挑み念じ聞ゆ。折しも例の少將、侍從の君の御曹司に來たりけるを、うち連れて出で給ひにければ、大方人少なになるに、廊の戸のあきたるに、やをら寄りて覗きけり。かう嬉しき折を見つけたるは、佛などの現はれ給へらむに參り會ひたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕暮の霞の紛れはさやかならねど、つく〳〵と見れば、櫻色のあやめもそれと見分きつゝげに散りなむ後の形見にも見まほしく、匂多く見え給ふを、いとゞ異樣になり給はむこと、佗しく思ひまさる。若き人々のうち解けたる姿ども、夕映もをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗の亂聲遲しや」など、はやりかにいふもあり。「右に心よせ奉りて、西の御前によりて侍る木を、左になして、年頃の御爭のかゝればありつるぞかし」と、右方は心地よげに勵まし聞ゆ。何事と知らねどをかしと聞きて、さしいらへもせまほしけれど、うち解

櫻ゆゑ……私の負にも思ひやりのない花だとは知りながらも、この櫻ゆゑに風が吹くと氣が揉めることだ。

御方の宰相の君―姉姫の侍女。

咲くと見て……咲くかと見る片端から散つてしまふ花ゆゑ、この櫻を負けて取られても殘念とも思ひはしませんとの意。

聞え助くれば―辯護すれば。

風にちる……風の爲に花が散るのは當然な事ですが、枝の儘で私の手に歸したこの櫻を、恐らく平氣で見ては居られますまいとの意。

この御方の大輔の君―妹姫の侍女。

心ありて……池の汀に散る花よ、水の泡と浮んでも氣をつけて此方の清に寄つてくれとの意。古今「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ」による。

大ぞらの……どちらといふことなしの風に散つても、この花は我々の方のものとして、花びらを搔集めて賞翫しませう。

なれき―童女の名。馴君の意。

櫻ばな……いかに櫻を獨占しようとなされても、この色香を他に見せまい爲に打覆ふ程の袖はお持ちなさるまいとの意。後撰「大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風に任せじ」。

心せばげにこそ……いかにも狹量のやうに見えますよと、「おのがものとぞ」とあるを受けてけなす。

行末うしろめたきを―姫君達の將來が氣づかはれるので。

院よりは御消息―冷泉院からは姫君を早く差出せと御催促のお手紙。

疎々しく……姫君の宮仕をお濟りなさるは當方を芳しからず思召すのですか、院は私が嫉妬で邪魔立するのだと憎げに仰しやるので、假令冗談でも私は苦しいのです。

思し宣へば……弘徽殿女御が。

思し立ちね―御決心なされて姫君をお上げなさい。

さるべきにこそは……結局さうなるべき姫君の宿運なのだらう、かうまで冷泉院がしつこく仰しやるのも勿體ないなど、玉鬘は姫君を院の宮仕にと決心した。

人々の裝束―侍女達の衣裳。

急ぎ給ふ―支度をなさる。

死ぬばかり―落膽の結果死んでもしまひさうに。

母北の方―雲居雁。

聞き煩ひ給ひて―愁訴を聞いて捨て置けず。

いとかたはら痛き……誠に苦々しい事についてお願ひ致すのも、子ゆ

け給へる折、心地なくやはと思ひて、やをら出でて去ぬ。又かゝる紛れもやと、影に添ひてぞ窺ひありきける。君達は花の爭をしつゝ、明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方、亂れ落つるがいと口惜しうあたらしければ、負方の姫君、

「櫻ゆゑ風にこゝろのさわぐかな
おもひぐまなき花と見るゝ」

御方の宰相の君、

「咲くと見てかつは散りぬる花なれば
まくるを深きうらみともせず」

と聞え助くれば、右の姫君、

「風にちることは世のつね枝ながら
うつろふ花をたゞにしも見じ」

この御方の大輔の君、

「心ありて池のみぎはにおつる花
あわとなりてもわが方に寄れ」

勝方の童べおりて、花の下にありきて、散りたるをいと多く拾ひて、もて參れり。

「大ぞらの風にちれどもさくら花
おのが物とぞかきつめて見る」

左のなれき、

「櫻ばなにほひあまたに散らさじと
おほふばかりの袖はありやは」

心せばげにこそ見ゆめれ」などいひ貶す。かくいふ月日はかなく過すも、行末うしろめたきを、かんの殿はよろづに思す。

院よりは御消息日々にあり。「疎々しく思し隔つるにや。上はこゝにて聞え疎むるなゝめり」と、いとにくげに思し宣へば、戯にも苦しうなむ。

同じくはこの頃の程に思し立ちね」など、いとまめやかにそゝのかし聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いとかうあやにくに宣ふも、

呉なしなど思したちにけり。御調度などは、そこらし置かせ給へれば、人々の裝束、何くれのはかなき事をぞ急ぎ給ふ。これを聞くに、藏人の少將は死ぬばかり思ひて、母北の方をせめ奉れば、聞き煩ひ給ひて、いとかたはら痛き事につけて、ほのめかし聞ゆるも、世に頑しき闇の迷になむ。思し知る方もあらば推し量りて、なほ慰めさせ給へ」など、いとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかなとうち歎き給ひて、

「いかなる事と思ひ給へ定むべきやうもなきを、院よりわりなく宣はするに、思ひ給へ亂れてなむ。まめやかなる御心ならば、この程を思し靜めて、慰め聞えむさまをも見給ひてなむ、世の聞えもなだらかならむ」など申し給ふも、この御まゐり過して、中の君をと思すなるべし。さし合はせては、うたてしたり顏ならむ、まだ位などもあさへたる程をなど思すに、男は更にしか思ひ移るべくもあらず。ほのかに見奉りて後は、面影に戀しう、いかならむ折にかとのみ覺ゆるに、かう賴みかゝらずなりぬるを、思ひ歎き給ふこと限なし。かひなき事もいはむと思ひて、例の侍從の曹司に來たれば、源侍從の文をぞ見居給へり。

と姉姫との間に關係でもあつたやうに少將が疑はうかと思ひ。そこはかとなくて……薫の手紙は格別具體的のものでなく、姉姫の無情を怨んだ風に。

つれなくて……表面何となく春愁を歌つて、裏面に、無情な姫君が私を可愛さうとも思はず院へ行くのが怨めしいとの意を含めた歌。普本結句「春の暮かな」とある。

人はかうこそ……成程他人はこの通りまあ大樣に體裁よく怨を述べてゐるのだなあ、人の物笑になるやうな私の性急さを、一つは姫君始め皆々訓れつこになつて、それで私は安く見られてゐるのだと藏人少將は思ふにつけても。

例語らふ……少將が常に相談相手にしてゐる中將の部屋へ今又行くにつけても。この中將は侍女の名。

侍從の君は……藤侍從は、薫への返事を書かうといつて母君玉鬘へこの手紙を見せに行かれるのを少將が見ると。

淺ましきまで……少將が侍女中將に向つてひどく怨み歎くと。

前申し一取次。こゝは中將のおもとをいふ。

かの御葬の見證……過日姫君達の圍碁を隙見した夕暮の事をも少將が

むと思ひて、例の侍從の曹司に來たれば、源侍從の文をぞ見居給へりける。ひき隱すを、さなゝめりと見てうばひ取りつ。事あり顏にやと思ひて、いたうも隱さず、（寒ノ文ハ）そこはかとなくて、只世を怨めしげにかすめたり。

「つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ

ものうらめしき暮の春かな」

人はかうこそそのどやかに、樣よく妬げなゝめれ。わがいと人笑はれなる心焦られを、片へは目馴れて、侮りそめられにたると思ふも、胸痛ければ、殊に物もいはれで、例語らふ中將のおもとの曹司の方に行くも、例のかひあらじかしと歎き勝なり。侍從の君は、この御返事せむとて、上に參り給ふを見るに、いと腹立たしう安からず、若き心地には、ひとへに物ぞ覺えける。淺ましきまで恨み歎けば、この前申しも、あまり戯れにくゝ、いとほしく思ひて、答もをさ〳〵せず。かの御葬の見證せし夕暮の事もいひ出でて、「さばかりの夢をだにまた見てし

語り出して。見證とは實は隙見したのをかく體裁よくいふ。さばかりの夢をだに—あの時位のはかない隙見をでも。

かう聞ゆる……かうして貴女と話するのも永くないと思はれるから。つらきもあはれ—無情な態度も亦一面には懐しいとの意。引歌未詳。あはれとて……いか程お可愛さうでも何ともいひ慰めやうもないことだ、母君玉鬘が妹姫を與へて慰めようとする事を少將は少しも嬉しいと思ひさうな樣子もないのでほんにあの夕暮の圍碁の折姫君の袖があらはだつたのを少將が見て、猶更かう遣瀬ない心は增したのだらうと、侍女中將は尤に思つて。

聞し召させ……貴方が隙見なされた事を母君玉鬘にお話し申したら。心苦しと……私も貴方をお可愛さうと思つてゐた心も消えました。向火つくれば—攻撃の火の手を上げると。

さばれや—まゝよ、どうでもよい。負け給ひしこそ—姫君が根氣負けをして冷泉院へ行かれたのが。

おいらかに……貴女が私を何氣なく呼寄せて、姫君に目で知らせてくれたらよかつたものを。

いでやなぞ……扨もまあどうした事ぞ、この數ならぬ身に思ふ通りにもならぬのは、私の負けじ魂でありますわい。

わりなしや……強いものが勝つに定つてゐる競爭を、自分の心一つに任せて無理にも勝たうとはどうしてなされますか、無謀な事です。

あはれとて……今はもう生死も姫君次第と思ふ私です、可愛さうと思つて、私に打解けて語らつて下さい。手を許す、生死は圍碁の詞。

兄弟の君達—歳人少將の兄弟達。

母北の方—雲居雁。

院の聞し召す……少將の望を打明けて申込んだ處で冷泉院のお手前もあらうし、何の玉鬘が體よく承知してくれようぞと思つて、殘念ながら面會した折にも私の口からはいひ出さずにしまつた。

自らあながちに……實は私自身で强ひて願んだら何が何でも否とは仰しやるまいものを。

花を見て……花を眺めて春は暮したが卯月に入つた今日からは茂つた樹蔭に空しく彷徨するのみであらう。裏の意は、今までは餘所ながらでも姫君の姿を見て心を慰めてゐたが、今からは只一人歎きにくれて心も惑ふ事であらう。歎きに木をかけた。

「わりなしやよわきによらむ勝負を
心ひとつにいかゞまかする」

と答ふるさへぞつらかりける。

「あはれとて手を許せかし生死を
君にまかするわが身とならば」

泣きみ笑ひみ語らひ明す。

又の日は卯月になりにければ、兄弟の君達の內裏に參りさまよふに、いたう屈し入りて詠め居給へれば、母北の方は涙ぐみておはす。大臣も、「院の聞し召す所もあるべし。何かはおふな〳〵聞き入れむと思ひて、くやしう、對面の序にもうち出で聞えずなりにし。自らあながちに申さましかば、さりともえ違へ給はざらまし」など宣ふ。さて例の、

しげきなげきの下にまどはむ」

と聞え給へり。御前にて、これかれ上臈だつ人々、この御懸想人の、

この御懸想人の―この姉姫君に懸想する男達の。
生死をと……蔵人少将がこの懸ゆゑに生死を賭してまでもといつた様子が口先だけでなく。
大臣北の方の……夕霧夫妻の思はくもあるので、ひどくこの少将の怨が深いのなら妹姫を姉姫の代りに與へようと考へた。
この御參を……この姉姫の宮仕を夕霧方で邪魔立てするやうな仕打に出ようことは、まあ心外な頂上ではあるものゝ、臣下には決して縁付けまいと。
故殿―髭黒。
院に……姉姫が冷泉院に上るのすら。
この御文……蔵人少将の手紙を女房達が受取つて同情する。
今日ぞしる……うはべは何心ない有様でゐながら實は姫に心を懸けていらしつたのだと今日始めて知りましたとの意。
戯にのみも……冗談にのみいひなすことよなど女房達はいふが、代筆の女房は面倒がつて書直さない。
九日にぞ……四月九日に玉鬘腹の姉姫が冷泉院へお上りになつた。
右の大殿―夕霧。
御前の人々―御前隔の人々。
北の方も―雲居雁も玉鬘を。

様々にいとほしげなるを聞え知らするなかに、中將のおもと、『生死を』といひし様の、言にのみはあらず心苦しげなりし」など聞ゆれば、かんの君も、いとほしと聞き給ふ。大臣、北の方の思す所により、せめて人の御怨深くはと、取りかへありて思す。この御參を妨げざまに思ふらむはしも、目ざましき事限なきにても、たゞ人にはかけてもあるまじきものに、故殿の思し掟てたりしものを、院に參り給はむだに、行末のはえ〳〵しからぬを思したる折しも、この御文取り入れてあはれがる。御返し、

中將カ「今日ぞしる空をながむる氣色にて
　花にこゝろを移しけりとも」

人々「あないとほし。戯にのみも取りなすかな」などいへど、うるさがりて書きかへず。
九日にぞ參り給ふ。右の大殿、御車、御前の人々、あまた奉り給へり。北の方も怨めしと思ひ聞え給へど、年頃もさもあらざりしに、この御

年頃も……從來も玉鬘とさ程親密にもしてゐなかつたが、姫君と蔵人少將との問題の爲に。
又かき絶えむも……再び疎遠になるのも現金過ぎて面白くないので。
あやしう現心も……變に魂も抜けてしまつたやうな少將の樣子を介抱してゐる間に、御用を承る事も致しませんでしたが、貴女から何事もおいひつけ下さらぬのも他人行儀でお怨みです。
ほのめかし給へるを―それとなく不平をお漏しになつたのを。
慣むこと―物忌などをいふ。
男ども……子供等を色々の御用を勤めさせに差出します。
源少將、兵衛佐―共に夕霧の子息。
大納言殿―紅梅。
人々の御車―お供の人達の乘る車。
北の方は……紅梅の奥方は髭黒の御息女で即ち眞木柱だから。
藤中納言―眞木柱の弟。
中將、辨の君―玉鬘腹の長男二男。
殿の……髭黒御在世ならばと。
蔵人の君―夕霧の子息蔵人少將。
例の人―姫君の侍女、中將のお許。
一言宣はせば！一言でも姫君が仰しやつて下されたら。
もて參りて見れば―中將のお許が姫君の處に取次ぐと。

事ゆゑ、しげう聞えかよひ給へるを、又かき絶えむもうたてあれば、被物ども、よき女の裝束あまた奉れ給へり。「あやしう現心もなきやうなる人の有樣を見給へ扱ふほどに、承はりとゞむる事もなかりけるを、驚かさせ給はぬも疎々しくなむ」とぞありける。おいらかなるやうにて、ぼのめかし給へるを、いとほしと見給ふ。大臣も御文あり。「自らも參るべきにと思ひ給へるに、愼むことの侍りてなむ。男ども雜役にとて參らす。疎からず召し使はせ給へ」とて、源少將、兵衛の佐など奉れ給へり。情はおはすかしと、よろこび聞え給ふ。大納言殿よりも、人の御車奉れ給ふ。北の方は故大臣の御女、眞木柱の姫君なれば、いづ方につけても、むつまじう聞え通ひ給ふべけれど、さしもあらず。藤中納言はしも自らおはして、中將、辨の君達、もろともに事行ひ給ふ。殿のおはせましかばと、よろづにつけてあはれなり。蔵人の君、例の人にいみじき詞を盡して、「今は限と思ひはつる命の、さすがに悲しきを、あはれと思ふとばかりだに、一言宣はせば、それに懸けとゞめら

もろ共に……姉妹一所に住み馴れ、
眞中の戸一枚を隔てゝ東西に分れ
てゐるのすら不滿に思召して。
よそ〳〵に……姉妹別れ〳〵になる
ことを歎かれるのであつた。
心殊に……格別心して化粧や身繕ひ
をおさせ申した姉姫の御習癖は。
殿の思し宣ひし……父髭黒の豫定計
畫などを姉姫君が思ひ出し。
取りて見給ふ——藏人少將の手紙を。
大臣北の方……少將はあれ程立派に
兩親揃つて何不足なさうな境遇
で、何でこんな下らぬ事を。
限とあるを——少將の手紙に命も危い
と書いてあるのを。
あはれてふ……あはれ氣の毒なとい
ふ一通りならぬ深い言葉も、どん
な人に向つていふべきものか、世
馴れぬ私には分りません。「は」は
歎辭。
ゆゝしき方にて……忌々しい人の死
などの場合に於てのみ機にそれは
知つて居ります。
かういひやれ——代筆してかう書いて
遣れ。
やがて奉れたるを——その儘そつくり
侍女が代筆せずに少將に上げたの
を。
折を……場合が場合、卽ち危今日限
り姫君が餘處の花となる事を考へ
れて、暫しも永らへやせむ」などあるを、もて參りて見れば、姫君二所
うち語らひて、いといたう屈し給へり。夜晝もろ共にならひ給ひて、
中の戸ばかり隔てたる、西東をだにいといぶせきものにし給ひて、か
たみに渡り通ひつゝ、おはするを、よそ〳〵にならむことと思すなり
けり。心殊にしたて、引きつくろひ奉り給へる御樣、いとをかし。殿の
思し宣ひし樣などを思し出でて、物あはれなる折からにて、取りて見
給ふ。大臣、北の方の、さばかり立ち竝びて賴もしげなる御中に、など
かう、すゞろ言を思ひいふらむと怪しきにも、「限」とあるをまことに
やと思して、やがてこの御文の端に、

姫君「あはれてふ常ならぬ世のひと言も
いかなる人にかくるものぞは

ゆゝしき方にてなむ、ほのかに思ひ知りたる」と書き給ひて、「かう言
ひやれかし」と宣ふを、やがて奉れたるを、少將「限なう珍しきにも、折を思
しとむるさへ、いとゞ涙もとゞまらず。立ち返り、少將「誰が名は立たじ」な

誰が名は立たじ——古今、「戀ひ死なば
誰が名は立たじ世の中を常なきも
のといひはなすとも」。
生ける世の……貴女は死者に對して
は同情もすると仰しやる故一層私
も死にたいけれど、この世の死は
思ふ通りにもならぬので、結局貴
女から同情の一言を聞く事は出來
ないのでせうかなあ。
塚の上にも……墓標に向つてでも可
愛さうと一言仰しやつて下さるお
情があるなら、遲疑する所もなく
急いで死にもしませうものをとの
意。呉の季札が徐國の君に劍を贈
る積りでゐたが果さぬ中に徐君が
歿したのでその塚に劍を懸けて去
つた故事を引いていふ。
うたても答を……不覺にも先程は少
將に返事をやつたなあ、侍女の中
將は私のいつた通りその儘書いて
やつたらうよ、困つた事だと姫君
は煩悶なされて。
大人、童——姫君の御附添の。
參り給はましに——宮仕に上られるに。
まづ女御の御方に……姫君が冷泉院
の御前へ出る前、まづ弘徽殿女御
の方へ行かれて附添の玉鬘はお話
などなさる。
上に——姫君が冷泉院の御前に。

ど、かごとがましくて、

少將「生ける世の死は心にまかせねば
聞かでややまむ君がひと言

塚の上にも懸け給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちに
も急がれ侍らましを」などあるに、うたても答をしてけるかな、書き
換へて遣りつらむよと苦しげに思して、物も宣はずなりぬ。大人、童
など、よしありて目やすき限を整へられたり。大方の儀式などは、内
裏に參り給はましに變ることなし。まづ女御の御方に渡り給ひて、か
んの君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなむ上にまう上り給ひける。
后、女御など皆年頃經てねび給へるに、いと美しげにて、盛に見所あ
る樣を見奉り給ふには、などてかはおろかならむ。花やかに時めき給
ふ。たゞ人だちて、心安くもてなし給へる樣しもぞ、げにあらまほし
うめでたかりける。かんの君を、暫し侍ひ給ひなむと、心とゞめて思
しけるに、いと疾くやをら出で給ひにければ、口惜しう心憂しと思し

たり。

源侍従の君をば、旦暮御前に召しまつはしつゝ、げにたゞ昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御覺なり。院の内には、いづれの御方にも疎からず、馴れ交らひ ありき給ふ。この御方にも、心寄せあり顔にもてなして、下にはいかに見給ふらむの心さへ添ひ給へり。夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連れてありくに、かの御方の御前近く見やらるゝ五葉に、藤のいと面しろく咲き懸かりたるを、水のほとりの石に、苔を席にてながめ居給へり。まほにはあらねど、世の中怨めしげにかすめつゝ語らふ。

「手にかくるものにしあらば藤の花
松よりまさる色を見ましや」

とて、花を見上げたる氣色など、あやしくあはれに心苦しくも思ほゆれば、わが心にもあらぬ世の有樣にほのめかす。

「むらさきの色はかよへど藤の花

后、女御―秋好中宮、弘徽殿女御。

などてかは……冷泉院の御寵愛が何の疎かであらう。

たゞ人だちて―御退位の御身ゆゑ儀式ばらず平人のやうな御日常で。

かんの君を……玉鬘を、この儘當分御所に逗留してくれゝばよいと。

源侍従の君―薫。

人の御覺―薫の御寵愛。

院の内には……薫は冷泉院の御所では秋好にも弘徽殿にも親密に。

この御方―玉鬘腹の姫君。

下には……心の中では姫君が自分をどう思つて居られるか知らん、氣を引いて見たいといふやうな心持まで出て来た。

かの御方―玉鬘の姫君。

まほには……薫は藤侍従に正面から姫君の事を露骨にはいはぬが。

手にかくる……あのお庭の藤は手に取られる物でもないから、松よりもいゝその花の色が見られようかいとの意。藤を姫君に擬へ、もう尊貴の方の持物となつて己が物とも眺める事の出来ない意をよせた。

わが心にもあらぬ……藤侍従は姉君の今度の事件は自分も不本意な成行だといふ風に仄めかす。

むらさきの……私と姉姫君とは同じゆかりの兄弟ではありますが私の思ふ通りにもなりませんとの意。

まめなる君……藤侍従は實直な人で薫を氣の毒と思つて居られる。

いと心惑ふばかりは……薫はそんなに分別を失ふ程までに姫君に熱中してゐたのではないけれど。

まめやかに……眞劍にどうしたものだらうと煩悶し、失態も犯しかねない位自制力を失つたやうな氣がした。

聞え給ひし人々―姉姫君に懸想してゐた人々の、妹姫君に乘換へるのもあつた、玉鬘は藏人少將を、母君雲居雁の不機嫌を憚つて妹姫の婿にしようと思つて仄めかされたけれど。

かの君達も―夕霧の子息達も。

この參り給ひて後……玉鬘の姫君が上られて以來は餘り藏人少將は參上せず、たまさか院の殿上に一寸顔出しをしても。

故大臣の……髭黒が姫君を入内させる決心の固かつたのに。

中將を……主上が姫君の兄中將を召して事情をお問ひになつた。

御氣色―主上の御機嫌。

さればこそ……だから姫君を冷泉院に上げる事は世間の人の心でも不賛成さうな事ですと。

思し取る方……母上は分別が私とは

心にえこそまかせざりけれ」

まめなる君にて、いとほしと思へり。いと心惑ふばかりは思ひ入らざりしかど、口惜しうは覺えけり。かの少將の君はしも、まめやかに如何にせましと、過ちもしつべく、靜める方なくなむ覺えける。聞え給ひし人々、中の君をと移らふもありけり。少將の君をば、母北の方の御怨により、さもやと思してほのめかし聞え給ひけれど、絶えて音づれず なりたり。院には、かの君達も親しくもとより侍ひ給へど、この參り給ひて後はをさ〳〵參らず、まれ〳〵殿上の方にさし覗きても、あぢきなう逃げてなむまかり出でける。内裏には、故大臣の志しおき給へる樣殊なりしを、かく引き違へたる御宮仕を、いかなるにかと思して、中將を召してなむ宣はせける。「御氣色よろしからず、さればこそ世の人の心のうちも、傾きぬべき事なりと、かねて申しゝ事を、思し取る方異にて、かう思し立ちにしかば、ともかくも聞え難くて侍るに、かゝる仰言の侍るは、某らの身の爲も、あぢきなくなむ侍る」と、いと物

しと思ひて、かんの君をまうし給ふ。「王いさや、只今かう俄にしも思ひ立たざりしを、あながちにいとほしう宣はせしかば、後見なき交らひの、内裏わたりははしたなげなゝめるを、今は心やすき御有様なゝめるに任せ聞えてむと思ひ寄りしなり。誰も誰も便なからむ事は、ありのまゝにも諫め給はで、今ひき返し、右の大臣も僻々しきやうにおもむけて宣ふなれば、苦しうなむ。これもさるべきにこそは」と、なだらかに宣ひて、心も騒がい給はず。「中將その昔の御宿世は、目に見えぬものなれば、かう思し宣はするを、『これは契異なる』とも、いかゞは奏し直すべきことならむ。中宮を憚り聞え給ふとて、院の女御をばいかゞし奉り給はむとする。後見や何やと、かねて思しかはすとも、さしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむ。よう思へば、内裏は中宮おはしますとて、他人は交らひ給はずや。君に仕うまつることは、それが心安きこそ普より興ある事にはしけれ。女御は、いさゝかなる事の違目ありて、よろしからず思ひきこえ給はむに、僻みたるやうになむ、世の聞耳も侍

て信頼し合つて居られても、実地に臨んだらさうはいきますまい。よう思へば……熟々考へて見ると主上には殊寵ある明石姫がいらつしやるとしても他にもお妾があるではありませんか、君に御寒公といふ事は同輩間が圓滑で氣苦労のないのが。

女御は……處が弘徽殿には何か少しの行違ひでもあつて面白からぬ感情でも挿むやうになつたら、甚だ不都合なやうに世間からも取られませう。

二所―中將と弟の辨と二人。

限なき御思―玉鬘の姫君に對する冷泉院の御寵愛。

げに人の……成程若い人々がうるさくいひ寄るのも尤だ、何でこんな美しい人を好い加減に見遁し聞遁しにして置かうかいと思はれる。

御遊を―冷泉院が音樂のお催を。

源侍從―薫。

御琴の音などは……薫が姫君の御琴などは聞く機會がある。

かの梅が枝に……本卷の本文（一五二五頁）參照。

その年返りて……年が明けて男踏歌が催された。男踏歌は隔年正月十四日の夜の行事で殿上地下の四位以下の人々禁中を始め貴顯の邸を

催馬樂など歌つて終夜舞ひ歩く。
物の上手―歌舞音曲の名手。
この四位の侍從…薫。
歌頭―音頭を取る役。
御前より出でて―蹈歌の一行が禁中を出て。
女御もこの御息所も……弘徽殿女御も玉鬘の姫君も、御自分のお部屋でなく冷泉院の御座所近くにお席を設けて。
右の大殿……夕霧と致仕大臣（元の頭中將）の一門を除いては。
この院をば……冷泉院を誠に極り悪く心遣ひの入る處と格別に思つて。
見給ふらむかしと……御息所が見ていらつしやるだらうと想像して氣が落著かない。
綿花―蹈歌の人々の冠に挿す造花。
見わかれて―別物のやうに見え。
過ぎにし夜の……去年正月下旬の夜梅の花盛に薫が玉鬘邸を訪うた時をいふ。（一五二五頁本文參照。）
僻事も……思詰めた揚句とんでもない失態をもしでかしさうで。
后の宮―秋好。
上も―冷泉院も。
はしたなう……餘り明るくて何でも露骨に見える程なのをいふ。
いかに見給ふらむ……少將は御息所がどんな心持で見て居られるかそらむ」など、二所して申し給へば、かんの君、いと苦しと思したり。さるは限なき御思のみ、月日に添へてまさる。七月より孕み給ひにけり。うち惱み給へるさまげに人の樣々に聞えわづらはすも道理ぞかし、いかでかはかゝらむ人を、なのめに見聞き過してはやまむとぞ覺ゆる。旦暮御遊をせさせ給ひつゝ、源侍從も氣近う召し入るれば、御琴の音などは聞き給ふ。かの梅が枝に合はせたりし中將のおもとの和琴も、常に召し出でて彈かせ給へば、聞き合はするにも、たゞには覺えざりけり。

その年返りて、男蹈歌せられけり。殿上の若人どもの中に、物の上手多かる頃ほひなり。その中にも勝れたるを選らせ給ひて、この四位の侍從、右の歌頭なり。かの藏人の少將、樂人の數の中にありけり。十四日の月の花やかに曇なきに、御前より出でて、冷泉院にまゐる。女御も、この御息所も、上に御局して見給ふ。上達部、親王達ひき連れて參り給ふ。右の大殿、致仕の大殿の御族を離れて、きら〳〵しう清げな

れのみ氣にかゝるので、足元も怪しい位によろ〳〵として。
盃にもきして……饗應の盃にも目ざして自分一人だけが見當つけられるのは。これは少將の疑心暗鬼。
源侍從を院より―薫を冷泉院から。
御前の事ども―昨夜の内裏での蹈歌の模樣などを。
うち過したる人の……相當年配の人が從來は勤めるものだのに、貴方がそれに選ばれたのは名譽です。
うつくしと―可愛いものと。
萬春樂―蹈歌の人が座を起つて唱へる八句の詩、これを漢音に誦つて句の終毎に萬春樂と唱へる。
物見に―蹈歌を拜見に。
里人―御所以外の人々の意で、こゝは女御更衣又は宮仕の女房達の身寄の人々をいふ。
一夜の月影は……蹈歌の夜は餘り月光が冴えて極り悪い事でしたよ。
藏人の少將の……藏人少將がこの院で月の光にまぶしがつてゐた樣子も實は御息所に恥かしがつてゐたのであつて、月影をまぶしがつたのではなかつたらしい、その證據には禁中では恥かしさうな樣子も見えませんでした。輝きは恥ぢて照れる意。
闇はあやなきを……闇夜でも薫君の

る人は無き世なりとぞ見ゆ。內裏の御前よりも、この院をばいと恥かしう殊に思ひ聞えて、皆人の用意を加ふる中にも、藏人の少將は、見給ふらむかしと思ひやりて、靜心なし。匂もなく見苦しき綿花も、かざす人柄に見わかれて、樣も聲もいとをかしくぞありける。竹河謠ひて御階のもとに踏みよる程、過ぎにし夜のはかなかりし遊も思ひ出でられければ、僻事もしつべくて涙ぐまれけり。后の宮の御方に參れば、上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜深うなるまゝに、晝よりもはしたなう澄み昇りて、いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、踏む空もなう漂ひありきて、盃にもさして一人をのみ各めらるゝは、面目なくなむ。夜一夜處々に搔きありきて、いと惱ましう苦しくて臥したるに、源侍從を院より召したれば「あな苦し、しばし休むべきに」と、むつかりながら參り給へり。御前の事どもなど問はせ給ふ。「歌頭は、うち過したる人の、前々するを、選ばれたるほど心にくかりけり」とて、つくしと思したゝめり。萬春樂を御口すさびにし給ひつゝ、御息所の

特有のお香は隠しきれぬが、月に映えたお姿は今一層立派でいらつしやるとお噂致しました。古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ」の意。

内より―籠の中から。

竹河の……曾て玉鬘邸で竹河を謡つて遊んだ時の事はお思出しになりますか、大して追憶の種になるやうな事もありはしませんでしたけれど。

げにいと淺くは……ほんに玉鬘の姫君を矢張深く心に思つてゐるのだわいと。

流れての……曾ては一縷の望も繋いでゐたが、年月を經て今は期待も無駄となつた姫君ゆゑに、この世は愛いものと痛感しました。世に節(ヨ)を懸けて竹の緣語とした。

おり立ちて……薫は特に熱中して他の人のやうに懸ひ焦れもなさらなかつたが、人柄が流石に同情を寄くのである。

うち出で過す……長座をしたら餘計な事までいつてしまふかも知れません。

故六條院―源氏。

女方にて……初音の卷の終參照。

右の大臣―夕霧。

かのわたりの……源氏の後繼者となるべき人。

物の上手なる……源氏の邸には音樂の上手な婦人方まで集つて。

侍從にたまふ―薫にお命じになる。

この殿―催馬樂。この殿はうべも富みけり、さき草のアハレ、さき草の三つば四つばに殿作りせりヤ、殿作りせりヤ」。

御息所の……以下「心とまる」まで薫の心。

樂物―雅樂の方の曲の稱。

氣遠からず―薫は御息所とあまり疎遠でなく。

恨みかけねど―薫が御息所に怨をいひ懸けはせぬが時折密かな戀心の遂げられなかつた悲を仄めかすのも、御息所は何と思召したやら、記者は知らない。

女宮生まれ給ひぬ―姫君が御息所のお腹にお生れになつた。

珠にけざやかなる……男宮でないから特別目に立つ程の光彩もないやうだけれど。

院の御氣色に……冷泉院の御心持を酌んで夕霧を始として。

かんの君……玉鬘は姫君をしつかり抱いて愛していらつしやると。

疾う參り給ふべきよし―冷泉院から御息所へ早々參殿なさるやうとの御詞。出產は里でなされた故。

御方に渡らせ給へれば、(薫ニ)御供に參り給ふ。物見に參りたる里人多くて例よりも花やかに、けはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て、聲聞き知りたる人々に、物など宣ふ。(薫)「一夜の月影は、はしたなかりし業かな。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も、桂の影に恥づるには あらずやありけむ。雲の上近くては、さしも見えざりき」など語り給へば、人々あはれと聞くもありけり。(女房達)「闇はあやなきを、月ばえは、今少し心殊なりと、定め聞えし」などすかして、内より、

(女房)「竹河のその夜のことは思ひいづや
　忍ぶばかりの節はなけれど」

といふ、はかなき事なれど、涙ぐまるゝも、げにいと淺くは覺えぬこととなりけりと、自ら思ひ知らる。

(薫)「流れてのたのみむなしき竹河に
　よはうきものと思ひ知りにき」

物あはれなる氣色を、人々をかしがる。さるは、おり立ちて人のやうにも佗び給はざりしかど、人樣の流石に心苦しう見ゆるなり。(薫)「うち出で過すこともこそ侍れ。あなかしこ」とて立つほどに、(冷泉)「こなたに」とて召し出づれば、(薫ハ)はしたなき心地すれど參り給ふ。(冷泉)「故六條院の蹈歌のあしたに、女方にて遊せられける、いと面白かりき」と、右の大臣の語られし。何事もかのわたりのさしつぎなるべき人、難くなりにたる世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集まりて、いかにはかなき事もをかしかりけむ」など思し遣りて、御琴ども調べさせ給ひて、箏は御息所、琵琶は侍從にたまふ。(院ハ)和琴を彈かせ給ひて、この殿など遊び給ふ。御息所の御琴の音、まだ片なりなる所ありしを、(院ガ)いとよく教へなし奉り給ひてけり。今めかしう爪音よくて、歌、樂物など、上手にいとよく彈き給ふ。何事も心もとなく後れたる事は物し給はぬ人なゝめり。容貌などはたいとをかしかるべしと、(薫ハ)なほ心とまる。かやうなる折多かれば、自ら氣遠からず見なれ給ふ。うたて狎れ〳〵しうなどは恨みかけねど、折々につけて、思ふ心の違へる歎かしさをかすむるも、

五十日―嬰兒生れて五十日目の祝。
女宮一所……冷泉院には從來弘徽殿の御腹に姫宮お一人いらつしやるのに、今度の姫宮が誠に珍しくお美しいので。
此方に―御息所の方。
女御方の……弘徽殿附の侍女達は、まあお子樣なんぞお生れなさらなくてもよささうなものだと。
正身―御本人達、弘徽殿と御息所。
背き給ふには……不和になるといふ譯ではないけれど。
くせ〴〵しき事―意地惡い仕打。
かの中將の君―玉鬘腹の長男。
さいへど……流石に兄は兄で、嘗て母君に反對してお諫めした事が的中してゆく。
無下にかく……無暗にこんな風に雙方の侍女達がいひ合つてゐて揚句の果にはどうなるだらう、世間の物笑になる程面白からぬ待遇を姫君が受けはすまいか。
上の御心ばへ―冷泉院の御愛情。
年經てさぶらひ給ふ……永年お仕へ申して居られる中宮や女御などが姫君を不都合だと見限られたら。
內裏には……帝は玉鬘の姫君の事を眞實ひどいと思召して度々それを仰しやる、と人が玉鬘にお話し申すので。

いかゞ思しけむ、知らずかし。
卯月に女宮生まれ給ひぬ。殊にけざやかなる物の映もなきやうなれど、院の御氣色に隨ひて、右の大殿よりはじめて、御產養し給ふ處々多かり。かんの君、つと抱きもちてうつくしみ給ふに、疾う參り給ふべきよしのみあれば、五十日のほどに參り給ひぬ。女宮一所おはしますに、いと珍しう美しうておはすれば、(院ハ)いといみじう思したり。いとど只此方にのみおはします。女御方の人々「いとかゝらでありぬべき世かな」と、たゞならずいひ思へり。正身の御心どもには、殊に輕々しく背き給ふにはあらねど、侍ふ人々の中に、くせ〴〵しき事も出で來などしつゝ、かの中將の君の、さいへど人の兄にて、宣ひし事かなひゆく。かんの君も、無下にかくいひ〳〵の果いかならむ、人笑へに、はしたなうもやもてなされむ、上の御心ばへは淺からねど、年經てさぶらひ給ふ御方々、よろしからず思ひ放ち給はゞ、苦しくもあるべきかなと思ほすに、內裏には、まことに物しと思しつゝ、度々御けしきありと、

中の姫君を……妹姫を御妾としてゞなく女官として禁中に御奉公させようと思ひ、尙侍の職を妹姫にお讓りなされた。
朝廷いと……尙侍は朝廷でも大變重んじていらつしやる職掌だから。
年頃から……年來玉鬘が辭職しようと考へてゐたけれど。
故大臣の……帝が髭黑の忠勤を御斟酌なされて。
昔の例―親が娘に尙侍を讓つた先例。
その事叶ひ給ひぬ―御聽許になつた。
この君の御宿世……この妹姫が尙侍となるべき運命ゆゑに、年來玉鬘の辭職願は許されなかつたのだと思はれた。
かくて心安く……妹姫が氣樂に御奉公出來るやうと玉鬘は思召すにつけても藏人少將へは氣の毒で、少將の事を母君雲居雁が特別にお頼みになつたものを、その時妹姫をやつてもよいやうな口ぶりを漏して先方に當にさせたに、今となつては雲居雁が何と思召さうかと、思案に餘つて居られる。
辨の君―玉鬘腹の二男。
心美しきやうに……惡意のないといふ事を夕霧に申された。
かゝる仰言―妹姫を尙侍にせよとの勅諚。

人の告げ聞ゆれば、煩はしくて、中の姫君を、おほやけ樣にて交らはせ奉らむことを思して、尙侍を讓りきこえ給ふ。朝廷いと難うし給ふことなりければ、年頃かう思しおきてしかど、え辭し給はざりしを、故大臣の御心を思して、久しうなりにける昔の例など引き出でて、その事叶ひ給ひぬ。この君の御宿世にて、年頃申し給ひしは難きなりけりと見えたり。かくて心安くて內裏住もし給へかしと思すにも、いとほしう、少將の事を母北の方のわざと宣ひしものを、賴め聞えしやうにほのめかし聞えしも、いかに思ひ給ふらむと思し扱ふ。辨の君して、心美しきやうに、大臣に聞え給ふ。「內裏よりかゝる仰言のあれば、樣々にあながちなる交らひの好と、世の聞耳もいかゞと思ひ給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば、「內裏の御氣色は、思し咎むるも道理になむ承はる。公事につけても、宮仕し給はぬは、さるまじき業になむ。はや思し立つべきになむ」と聞え給へり。又この度は、中宮の御氣色取りてぞ參り給ふ。大臣おはせましかば、后と聞ゆともおし消ち給は

ざらましなど、あはれなる事どもをなむ。姉君は容貌など、名高うをかしげなりと聞し召しておきたりけるを、引き違へ給へるを、なま心ゆかぬやうなれど、これもいとらう〳〵じく、心にくゝもてなして侍ひ給ふ。

前のかんの君、容を變へてむと思し立つを、「方々に扱ひ聞え給ふほどに、行も心あわたゞしうこそ思されめ。今少し何方も心のどかに見奉りなし給ひて、もどかしき所なく、ひたみちに勤め給へ」と、君達の申し給へば、思しとゞこほりて、内裏には時々忍びて參り給ふ折もあり。院には煩はしき御心ばへの猶絶えねば、さるべき折も更に參り給はず。古へを思ひ出でしが、流石に辱なう覺えし畏まりに、人の皆許さぬ事に思へりしをも、知らず顔に思ひて參らせ奉りて、自らさへ、戲にても若々しき事の世に聞えたらむこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれと思せど、さる忌によりとは、御息所にも顯はし聞え給はねば、われを昔より、故大臣は取りわきて思しかしづき、かんの君は若君を、櫻の雫はかなき折にも、心よせ給ひし名殘に、思し貶しけるよと、怨めしう思ひ聞え給へり。院の上はた、ましていみじうつらしと思し宣はせける。「古めかしきあたりにさし放ちて、思ひ貶さるゝも道理なり」とうち語らひ給ひつ。そこら侍ひたまふ御方にかゝる事なくて、また男御子うみ給ひて、年頃になりにけるを、疎ならざりける御宿世かなと、世の人驚く。帝ましして限なう珍しと、この今宮をば思ひ聞え給へり。おりゐ給はぬ世ならましかば、いかにかひあらまし、今は何事も榮なき世を、いと口惜しとなむ思しける。女一の宮を限なきものに思ひ聞え給ひしを、かく樣々に美しうて數添ひ給へれば、珍かなる方にて、いと心殊にもてなし思いたるをなむ、女御もあまりかうまでは物しからむと、御心ぞ動きける。事に觸れて安からず、くね〳〵しき事いで來などして、自らも御中も隔たるべかめり、世の事として數ならぬ人の中らひにも、もとより道理えたる方にこそ、あいなき大凡の人も心を寄する業な

何といつても勿體なく感じたそのお詫として、姉姫を院に上げる事は正當の筋合でないと世人が思つてゐたのを知らぬ顏で差上げ。自らさへ……玉鬘自身まで假初にでも、冷泉院との間に脅名を流したら。

さる忌により……かく〳〵の遠慮から院の御前へは參上せぬとは姉姫へも判然と仰しやらぬので。

故大臣は—父君髭黒は。

かんの君は若君を—玉鬘は妹姫を。

心よせ給ひし……最眞になされた名殘で、私を妹より輕く見ていらつしやるのだと、見舞に參上せぬので怨めしく思つて居られた。

院の上はた—冷泉院も亦玉鬘を。

古めかしき……母君は貰女をこんな老人の處に置き放して、一向構はず見縊られるのも尤です。

そこら侍ひ給ふ……數多仕へていらつしやる中宮や女御達に皇子御誕生がなくてもう久しくなるのに。

帝—院の帝の意で冷泉院のこと。

今宮—今度御誕生の皇子。

今は何事も……今は御隱居後で萬事に光彩もない御身なので。

女一の宮—弘徽殿女御のお腹。

數添ひ給へれば—若宮樣がお殖えになつたので。

いと心殊に……冷泉院が格別に御寵愛なのを弘徽殿も、かくまでの御寵愛は餘りにひどからうと胸穩からず思召した。

御中—弘徽殿と玉鬘の姫君との中。

世の事として……世間の習として、平人の間同士でも、最初から根據を占めてゐる方に、深い事情も知らぬ世間の人も贔屓をする譯のものだから。

いとやむごとなくて……地位がお高くて永年いらつしやる弘徽殿の方にのみ理窟をつけて。

この御方樣を—御息所の方を。

されば よ……案の定だ、私は惡い事は申さなかつたでせう。

かゝらで……私ほどこんなに苦勞をせず暢氣に體裁よく世を送る人も多いやうだ、餘程幸運な人でなくては宮仕などは思ひつくものではないなあと玉鬘は歎息なさる。大上は玉鬘のこと。

聞え給ひし人々の……姫君にいひ寄つた人々で相當に立身して、婿にしても惡くない位に具足したものが澤山ある。

源侍從—薫。

ひはづ—幼稚。

匂ふや 薫るや……匂宮だ、薫君だ、とあんまりな位に大騒をされるのは。

めれば、院のうちの上下の人々、いとやむごとなくて久しくなり給へる御方にのみことわりて、はかなき事にも、この御方樣を善からず取り成しなどするを、御兄人の君達も「されば よ、惡しうやは聞えおきける」と、いとゞ申し給ふ。(玉鬘八)「心安からず聞き苦しきまゝに、玉鬘 かゝらで、のどやかに目安くて、世を過す人も多かゝめりかし。限なき幸なくて、宮仕の筋は思ひ寄るまじき業なりけり」と、大上は歎き給ふ。

聞え給ひし人々の、目安くなり上りつゝ、さても おはせましに、片はしは宰相の中將にて、「匂ふや」「薫るや」と、いと聞きにくくめで騒がるなる、げにいと人柄重りかに心にくきを、やむごとなき親王達、大臣の、御女を志ありて宣ふなるなども聞き入れず などあるにつけて、「そのかみは若う心もとなきやうなりしかど、目安くねび勝りぬべかゝめり」など いひおはさうず。少將なりしも、三位の中將とかいひて覺あり。「容貌さへ あらまほしかりきや」など、なま心わろき仕うまつり人は、うち忍びつゝ、「うるさげなる 御宮仕よりは」などいふもありて、いとほしうぞ見えし。この中將は、猶思ひそめてし心絶えず、憂くもつらくも思ひつゝ、左大臣の御女を得たれど、をさ〳〵心もとめず。「道のはてなる常陸帶の」と、手習にも言種にもするは、いかに思ふやうのあるにかありけむ。御息所、安げなき世のむつかしさに、里勝になり給ひにけり。かんの君、思ひしやうにはあらぬ 御有樣を、口惜しと思す。內裏の君は、なか〳〵今めかしう 心安げにもてなして、世にもゆるあり、心にくき覺にて侍ひ給ふ。

その頃左大臣うせ給ひて、右は左に、藤大納言、左大將かけ給へる、右大臣になり給ふ。次々の人々なりあがりて、この薫中將は中納言に、三位の君は宰相になりて、よろこび し給へる人々を思ひ廻らすに、この二三の御族より外に、人なき頃ほひになむありける。中納言の御よろこびに、前の尚侍の君に參り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面し給ひて、「かくいと草深くなりゆく葎の門を、よき給

やむごとなき親王達……高貴の宮樣や大臣方が姫君をやりたいと望んで仰しやるのをも、薫が承諾せずにゐたりなどするにつけて。

そのかみは—薫が娘に懸想した頃は。

少將なりしも—當時藏人少將であつた夕霧の子息も今では。

容貌さへ……藏人少將は御容姿まで理想通りであつたわいなどと、多少浮氣つぽい玉鬘方の女房達は。

うるさげなる……氣ぶせいなお宮仕よりは藏人少將に嫁せられた方がよかつたらう。

この中將—卽ち藏人少將。

猶思ひそめてし……矢張最初思ひ込んだ玉鬘の姫君を忘れかね。

左大臣—竹河左大臣と呼ぶ。氏族は明かでない。

道のはてなる……一寸でも逢ひたいの意。新古今、讀人不知「東路の道の果なる常陸帶のかごとばかりも逢はむとぞ思ふ」。

手習にも言種にも—無駄書きにも口癖にも。

安げなき世の……不安な境遇の面倒さに宿下り勝になつてしまつた。

かんの君……玉鬘は姉姫君が期待程にうまくゆかぬ御境涯を。

內裏の君は……妹姫の方は却て。

世にもゆるあり……非常に風情があ

り結構な御寵愛を得て仕へていらつしやる。

右は左に―右大臣夕霧は左大臣に。藤大納言―紅梅。三位の君―元の藏人少將。よろこび給へる人々―官位昇進の拜賀をした人々は。

中納言の……薫は中納言に昇任のお禮に玉鬘の邸に參上された。

よき給はぬ―業通りなさらぬ。

昔の御事―源氏の御事。

舊り難くも……玉鬘はいつまでもお若いなあ、だから冷泉院は玉鬘の無情をお恨みなさる御心が絶えないのだ、今にとう〳〵事件をお起しなさるだらうと薫は思ふ。

よろこびなどは……昇進などは心中格別に嬉しいとも存じませんが。

疎なる罪に……私の疎遠の罪をお咎めになるのでせうか。

今日は……今日は貴方のおめでたい日に、年寄の繰言などお耳に入れるべき場合でもないと。

對面なくて……御面會の折でなくては矢張話せないくだ〳〵しい事で御座いましてねえ。

院に侍はるゝが―冷泉院にお仕へして居られる姉姫（御息所）が。

中空なるやうに……どちら附かずの有樣でふらついてゐるのを。

はぬ御心ばへにも、まづ昔の御事思ひ出でられてなむ」など聞え給ふ。御聲はあてに愛敬づき、聞かまほしう今めきたり。舊り難くもおはするかな、かゝれば院の上は、恨み給ふ御心絶えぬぞかし、今遂に事ひき出で給ひてむと思ふ。「よろこびなどは、心には いとしも思ひ給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。『よきぬ』など宣はするは、ぎにたる身の上など、聞ゆべき序にもあらずとつゝみ侍れど、わざと立ち寄り給はむことは難きを、對面なくてはた、流石にくだ〳〵しき事になむ。院に侍はるゝが、いといたう世の中を思ひ亂れ、中空なるやうに漂ふを、女御を頼み聞え、又后の宮の御方にも、さりとも思し許されなむと、思ひ給へ過すに、何方にも、なめげに許さぬものに思されたゞめれば、いとかたはら痛くて、宮達はさて侍ひ給ふ。このいと交らひにくげなる自らは、『かくて心安くだに詠め過い給へ』とて、まかでさせたるを、それにつけても聞きにくゝなむ。上にもよろしからず思し宣はすなる。序あらば、ほのめかし奏し給へ。と樣かう樣に頼もしく思ひ給へて、出だし立て侍りし程は、いづ方をも心安くうち解け頼み聞えしかど、今はかゝる事あやまりに、幼うおほけなかりける自らの心を、もどかしくなむ」とうち歎い給ふ氣色なり。「更にかうまで思すまじき事になむ。かゝる御交らひの安からぬことは、昔よりさる事となり侍りにけることになむ。（說ハ）位を去りて靜におはしまし、何事もけざやかならぬ御有樣となりにたるに、誰もうち解け給へるやうなれど、おの〳〵内々には、いかゞ挑ましくも思すこともなからむ。人は何の咎と見ぬことも、わが御身に取りては恨めしくなむ、あいなきことに心を動かし給ふこと、女御后の常の御癖なるべし。さばかりの紛もあらじものとてやは思し立ちけむ。只なだらかにもてなして、御覽じ過すべきことに侍るなり。男の方にて奏すべき事にも侍らぬ事になむ」とすく〳〵しう申し給へば、「對面のついでに愁へ聞えむと、待ちつけ奉りたるかひもなく、あはの御道理や」とうち笑ひ

女御を……弘徽殿をお力にし、又秋好中宮の御方でも面白くないながらも御勤辨下されようと自分勝手に考へたのに、秋好からも弘徽殿からも、ぶしつけで厭し難い者と思はれてゐる樣子ですから。

宮達はさて……お子樣方はその儘冷泉院に殘つていらつしやいます。

いと交らひにくげなる自ら―御奉公のつらさうな姫君自身。

詠め過い給へ―靜養なさい。

まかでさせたるを―宿下りを願つておさせ申しましたに。

聞きにくゝなむ……聞きづらい程冷泉院に於てもよからぬやうに仰しやるのです。上はこゝでは院。

ほのめかし奏し給へ―院へ然るべくお取成し下さい。

と樣かう樣に……とにもかくにも皆樣方を力に思つて姫を宮仕に上げた頃は。

今はかゝる……今はかうした事の行違ひに、思慮が足らず身の程を考へなかつた自分の心を。

更にかうまで……決してそれ程まで御心配なさる事でもありません。

何事も……萬事御在位當時ほど花やかでない御生活となつたので、中宮や女御方も皆氣樂に暢びゝゝしていらつしやるやうだけれど、各

内心には何で競争心も無いことがありませう。

人は何の咎と……他人の目からは何の缺陥不都合とも見えない事でも、御本人にとつては恨めしく思つてつまらぬ事に喜憂なさる事は。さばかりの……それ位の面倒すら無いものだと考へて、貴女は姫君を院にお上げになつたのでせうか。男の方にて……男の口からそんな事を院に申上げるべき筋合でも御座いません。

愁へ聞えむと—愁訴致さうと。

あはの御道理や—あつさり片附けた御判斷ですこと。あはは淡しの意。

はか〳〵しがり……てきぱき切廻して居られる割合には。

宇治の姫君—次なる橋姫の巻の冒頭に出る宇治の八宮の姉姫君の事。

心とまりて覺ゆるも—薫が氣に入つてゐるのも。

尚侍も……玉鬘の妹姫もこの頃宿下りをしていらつしやる。

紛るゝことなき御有樣—ごた〳〵した事の無い御生活。

簾のうち心恥かしう……簾内には女達が澤山ゐるので氣がひけるので。

いとゞもて靜め……猶更控へ目に樣子よく見えるのを、玉鬘は親しい爲にしたらなあと思召した。

大臣殿—紅梅右大臣邸。

大饗の垣下の君達—任大臣の披露の宴の相伴の貴公子達。

兵部卿の宮—匂宮。

左の大殿—夕霧。

還りだち—賭弓終つて後の饗宴。

相撲の饗—相撲の催が濟んで後の饗宴。

おはしましゝを……匂宮が列席されたのを紅梅は思召して。

今日の光……今日の大饗の光彩をそへるお客として御招待申上げたが。

心にくゝ……紅梅は奥ゆかしく大切に育てゝ居られる姫君を、それは非常に熱心に何とかして匂宮に緣付けたいと思つて居られるやうだけれど。

源中納言—薫。

大臣も北の方も—紅梅も眞木柱も。

隣—玉鬘邸から紅梅邸をさす。

前追ふ聲々—出入の高官達の前驅の先拂の聲々。

昔の事—源氏や夫髭黒在世當時の花やかであつた有樣。

故宮……蜜兵部卿宮の歿後間もなく紅梅が眞木柱の許に通はれた事を輕忽な振舞として世間では非難したが、中途で愛情が冷めもせず。あはつけいは淡つけきの音便。

くのゝしりて、行きちがふ車の音、前追ふ聲々も、昔の事思ひ出でられて、この殿には物あはれに詠め給ふ。故宮うせ給ひて程もなく、この大臣の通ひしことを、いとあはつけいやうに、世の人はもどくなりしかど、思ひも消えず、かくて物し給ふも、流石さる方に目安かりけり。「玉鬘定めなの世や。何れに寄るべき」など宣ふ。左の大殿の宰相の中將、大饗のまたの日、夕つけてこゝに參り給へり。御息所里におはすと思ふに、いとゞ心懸想そひて、「中將おほやけの數まへ給ふよろこびなどは、何とも覺え侍らず。私の思ふ事かなはぬ歎のみ、年月に添へて、思ひの程の、いと盛に匂ひ多く、花やかなる容貌し給へり。「玉かくのみ見苦しの君達の、世の中を心のまゝに傲りて、官位をば何とも思はず、過さび事にぞ心は亂らまし」とうち歎き給ふ。右兵衞の督、右大辨にて、皆非參議なるを愁はしと思したり。侍從と聞ゆめりしぞ、この頃頭中

何れに寄るべき……どちらを取つたものかなあと、玉鬘は仰しやる。
繼子の眞木柱は幸福に、實子の御息所は不遇なのでかういつた。
左の大殿の宰相中將—夕霧の子息、元の藏人少將。
こゝに—玉鬘の邸に。
おほやけの……主上の御信任を得て昇進した嬉しさなどは。
私の思ふ事—密かに抱いてゐた姉姫君への戀が遂げられなかつた歎。
見苦しの……見にくいあの貴公子が、世を我儘に增長して振舞ひ官位をも何とも思はず浮れ歩いていらつしやるわい、夫髭黑御存命なら私の子供達も出世の事は忘れて矢張かうした女の事に氣を揉み暮す事だらうに。
右兵衞の督……子供達は兄は右兵衞督、次は右大辨で皆まだ參議にもなれないのを、玉鬘は歎いて居られる。
侍從—前侍從、玉鬘腹の三男。
頭中將—藏人頭近衞中將。
年齡のほど……年に比較しては昇進が遲いといふ譯ではないけれど。
歎き給へりとぞ……この下靑表紙本には「宰相はとかくつき〴〵しく」とある。不完の句で解しにくい。

將と聞ゆる。年齡のほどは片はならねど、人に後ると思ひ歎き給へりとぞ。

世に數まへられ給はぬ—世間からもてはやされなさらぬ。
古宮—年取つた宮樣。これは桐壺帝の第八皇子で源氏の異母弟、宇治の八の宮と呼ぶ。
筋殊なるべき……春宮にもなされさうな聲望がおありなされたのに。
はしたなめられ……工合の惡い立端に落されておしまひなされた拍子に、大して聲望があつただけに却てその名殘もなく衰微なされ。
御後見なども……御世話役の人々なども各自將來の望を失つたやうな心持で、それ〳〵の緣故に從つて出家などしつゝ、八宮は公にも私にも賴り所が無く見離されたやうな情態である。
親達の……あはよくば未來は皇后にもと思つて八宮に差上げた親達の考を北方がお思出しなさると、譬へやうもなく悲しい事が多いが。

橋姫（一名、優婆塞）

この卷は薫二十歳から二十二歳の冬までの事。源氏の異母弟八ノ宮は失意の境にあつて、念誦三昧でゐたが、亡き北ノ方の形見の二人の姫君があるので、流石に出家も出來なかつた。火事に遇つて宇治の山莊に移住して以來は、猶更訪客も無く、只宇治の山寺なる阿闍梨のみが、折々の話相手であつた。厭世的な薫は、尊敬と同情とから、阿闍梨を介して宮と親しくなり、時々訪問した。或時姉姫は琴を、妹姫は琵琶を彈いてゐたのを、會〻來訪した薫は曉の霧に濡れて隙見して、姉姫の落着いて重々しく、妹姫の花やかに美しいのに心を動かした。薫は大姫君を我が妻に、妹君を匂宮にと思ひ、それを匂宮に話すと、宮も見ぬ戀に憬れた。姫君達の侍女で辨といふのは柏木の乳母の娘で、薫はこの辨から實父柏木の臨終の事情を聞き、又形見として柏木と女三ノ宮との間の手紙など渡されたので、始めて確に自分の身の上を知つて驚いた。
卷の名は薫の歌、「橋姫の心をくみて高瀨さす棹の雫に袖ぞ濡れぬる」に由つた。

その頃、世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり。母方などもやむごとなく物し給ひて、筋殊なるべき覺などおはしけるを、時移りて、世の中にはしたなめられ給ひける紛に、なか〳〵いと名殘なく、御後見な

深き御契の……夫婦の御緣の特別に和合してゐるだけを。
かたみに―八宮夫妻が互に。
いかでをかしからむ……どうかして可愛い子供でも出來ればよいと。
女君―大君（おほいきみ）。假に總角の君と呼ぶ。
氣色ばみ給ひて―姫娘の御樣子で。
男にてもなど―男の子でゝもあればよいなどと。
おなじ樣にて―最初と同樣姫君で。
これを中の君と呼ぶ。
平かには……お產は無事ではあつたものゝ、產後に大變なお煩ひなされて北方は亡くなられた。
あり經るに……こんな有樣で世を過すのにつけても。以下八宮の心。
あはれなる人の御有樣……いとしい北方の御樣子やお氣立に。
かけとゞめらるゝ絆―世を捨てかねる邪魔。
一人とゞまりて……自分だけ取殘されて今後は一層荒涼たる生活になるうわ、頑是ない姫達をも自分一人で養育する間には、何しろ身分が身分ゆゑ、行屆かないでは甚だ氣がきかず不體裁な事と。
本意―出家の希望。
見譲る人……世話を託すべき人もないのに、姫君達を跡に殘して置くども物怨めしき心々にて、方々つけて世を背き去りつゝ、公私により所なくさし放たれ給へるやうなり。北の方も昔の大臣の御女なりける。あはれに心細く、親達の思し掟てたりし樣など思ひ出で給ふに、たとしへなき事多かれど、深き御契の二つなきばかりを憂き世の慰めにて、かたみに又なく賴みかはし給へり。年頃經るに、御子も物し給はで心もとなかりければ、「さう〳〵しく徒然なる慰めに、いかでをかしからむ兒もがな」と、宮ぞ時々 思し宣ひけるに、珍しく女君のいと美しげなる生まれ給へり。これを限なくあはれと思ひかしづき聞え給ふに、又さし續き氣色ばみ給ひて、この度は男にてもなど思したるに、おなじ樣にて平かにはし給ひながら、いといたく煩ひて失せ給ひぬ。宮淺ましくて思し惑ふ。あり經るにつけても、いとはしたなく堪へ難き事多かる世なれど、見捨てがたく、あはれなる人の御有樣、心樣に、かけとゞめらるゝ絆にてこそ過し來つれ、一人とゞまりて、いとゞ凄まじくもあるべきかな、いはけなき人々をも、一人はぐくみ立

事を可愛さうに思ひ躊躇されて。
いでや折節……さてもまあ、時も時困つた時分にお生れになつたものなどと呟いて、よく氣を附けておかぎりの樣にて……北方が臨終の御重態で意識も明瞭でなかつた程にも拘はらず、この中の君を大變お可愛さうに思召して。
この君をば―中の君を。
前の世の……八宮はこの子ゆゑ北方が亡くなられた事を思へば前世の約束もつらく思召す場合ではあるが、これもかくなる因緣であつたらう、北方が臨終と見えた間際までも中の君を大變可愛く思つて心配さうに仰しやつたものをと。
この君をしも……八宮は中の君を非常にお愛しなさる。
姫君は―大君は。
痛はしく……いた〳〵しく氣品ある點はこの大君が立勝つて。
いづれをも―八宮が姉妹何れをも。
叶はぬ事―不如意の事。
侍ひし人々も……寒公してゐた人々も便りない氣がするので辛抱しきれず。
次ぎ〳〵に……それからそれと段々に暇を願つて散り〳〵になり。
若君の御乳母……中の君の乳母も北

てむ程、限ある身にて、いと嗚咽がましう人わろかるべき事と思し立ちて、本意も遂げまほしうし給ひけれど、見譲る人もなくて殘しとゞめむを、いみじく思したゆたひつゝ、年月も經れば、おの〳〵およずけまさり給ふ。樣容 の しうあらまほしきを、旦暮の御慰めにて、自らぞ過し給ふ。のちに生まれ給ひし君をば、侍ふ人々も、「いでや、折節こゝろ憂く」などうち吃きて、心に入れても扱ひ聞えざりけれど、かぎりの樣にて、何事も思し分かざりし程ながら、これをいと心苦しと思ひて、北方この君をば形見に見給ひて、あはれと思せ」とばかり、只一言なむ宮に聞え置き給ひければ、前の世の契もつらき折節なりしかど、さるべきにこそありけめ、今はと見えしまで、いとあはれと思ひて、後めたげに宣ひしをと思し出でつゝ、この君をしもいとかなしうし奉り給ふ。容貌なむまことにいと美しう、ゆゝしきまで物し給ひける。姫君は心ばせ靜によしある方にて、見る目もてなしも、氣高く心にくき樣ぞし給へる。痛はしくやむごとなき筋は勝りて、いづれを

方御逝去の混雑中、しかとした人を撰んで賜ふ事も出來なかつた故、雇人相當の淺い思案で中の君の頭是ない時分を見捨てゝ去つたので。

家司―家扶、執事などをいふ。

むね〳〵しき―しかとした。

取り繕ふこと……邸内の修理をすることも構はず。

軒の葱―今の釣葱でなく、八ッ目蘭のこと。

おなじ心に……亡き北方と睦じく御賞翫なされたればこそ。

わざとせさせ給ひて―特別入念にお造らせになり。

行ひ給ふ―佛前の勤行をなさる。

かゝる絆ども……こんな子供の愛に牽かれて出家も出來ずにゐるのすら不本意に殘念で、自分で自分の思ふ儘にもならぬ約束事と諦めてゐるのに、まして何で世間並の人間同樣に今更後妻などを持たうぞとばかり。

故君―亡き北方。

例の人の樣……世間並の人と同じやうな考。女を求める心をいふ。

などかさしも―何のまあ、それ程までにお悲みなさらずとももの事。

別るゝ程―死別の當座。

あり經れば……時日が立てばさうばかりもありますまい。

も思ひかしづき聞え給へど、叶はぬ事多く、年月にそへて、宮のうち物寂しくのみなりまさる。侍ひし人々もたづきなき心地するに、え忍びあへず、次ぎ〳〵に隨ひてまかでで散りつゝ、若君の御乳母も、さる騒に、はか〴〵しき人をしも、選りあへ給はざりければ、程につけたる心淺さにて、幼きほどを見捨て奉りにければ、只宮ぞはぐくみ給ふ。さすがに廣くおもしろき宮の、池山などの氣色ばかり昔に變らで、いといたう荒れまさるを、徒然と詠め給ふ。家司など、むね〳〵しき人も無かりければ、取り繕ふこともしらず、草青やかに茂り、軒の葱ぞ所え顔に青みわたれる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも、おなじ心に見はやし給ひしにこそ、慰むことも多かりしか。いとゞしく寂しく、寄りつかむ方なきまゝに、持佛の御飾ばかりを、わざとせさせ給ひて、且暮行ひ給ふ。かゝる絆どもにかゝづらふだに、思の外に口惜しう、わが心ながらも協はざりける契と覺ゆるを、まいて何にか世の人めいては今更にとのみ、年月にそへて、世の中を思し放ちつゝ、心ばかりは聖になり果て給ひて、故君のうせ給ひにしこなたは、例の人の樣なる心ばへなど、戯にても思し出で給はざりけり。「などかさしも。別るゝ程の悲びは、また世に類なきやうにのみこそは覺ゆべかめれど、あり經ればさのみやは。なほ世の人に準ふ御心づかひをし給ひて、いとかく見苦しくたづきなき宮の内も、自らもてなさるゝ業もや」と、人はもどき聞えて、何くれとつき〴〵しく聞えごつことも、類に觸れて多かれど、聞し召し入れざりけり。御念誦の隙々には、この君達をもてあそび給ふ。やう〳〵およずけ給へば、琴習はし、碁打ち、扁つぎなどはかなき遊業につけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君はらう〳〵じく、深くおもりかに見え給ふ。若君は、おほどかにらうたげなる樣して、物づつみしたるけはひに、いと美しう樣々におはす。春のうらゝかなる日影に、池の水鳥どもの羽うちかはしつゝ、おのがじし囀る聲などを、常はかなき事と見給ひしかども、つがひ離れぬを羨ましくなが め給ひて、君達に御琴ども教へ聞え給ふ。いとをかし

なほ世の人に……矢張世間通例の人並のお氣になつて後添の北方をお迎へになり。

自らもてなさるゝ……さうしたら自然取締のつく事も御座いませう。

もどき聞えて―八宮の御獨身を御非難申上げて。

つき〳〵しく……似合らしい緣談も持込んでお話する事もそれ〳〵の關係を辿つて隨分多いけれど。

この君達を……八宮はこの姫君達を相手にしていらつしやる。

扁つぎ―文字の旁(つくり)を示し人々に順次種々の偏をつけさせる遊戯。

心ばへ―姫君達の心情へ。

姫君は……大君はすべて巧者に。

若君は……中の君は大樣に可憐な姿をして内氣に振舞つた樣子が。

常はかなき……平素は八宮が何でもない情景と見て居られたけれど、獨身となつた今は女夫の水鳥の仲のよいのをうらやましく御覽になつて。

うちすてゝ……私を打捨てゝ連添ふ妻は去つてしまつたこの假の世に何をあてに私一人生き殘つた事ぞとの意。假に雁を懸け、水鳥のを雁の序詞とした。

心盡しなりや―傷心の事であるよ。

さてしもあてに……痩せ細つて尙更

上品に優雅になられて。
君達をかしづき……姫君達を大事に養育なさる御心づかひに忙しく、直衣も大分くたゝ〳〵になつたものをお召になつて。
しどけなき御様……少し崩した御容儀が却つて優雅で、相對する人の方が極りわるい位である。
手習のやうに……落書きのやうに硯にお書き散しなさるのを。
いかでかく……どうして誰にはぐくまれて來た身ぞと思ふにつけても、母君に離れた不幸な私の運命がしみ〴〵と思はれるとの意。水鳥はみづから鳴へた。
よからねど……よい歌ではないが。
手は生ひさき見えて—筆蹟は有望な將來が想像されて。
今少し……大君よりも少し幼稚な筆つきで、長いことかゝつてお書き上げなされた。
泣く〳〵も……悲歎にくれつゝも育てゝ下さる父宮がいらつしやらなかつたら、私達は成人することも出來なかつたでせうとの意。巢もりは孵化せぬ卵をいふ。
御衣ども—姫君達の御召物など。
様々いと……姫君達が可憐な様をしていらつしやるのを、八宮は可愛さうとも氣の毒とも何で思召さぬ事があらうぞ。
唱歌—謠物をうたふこと。
箏の御琴を—この下に「教へ聞ゆ」などの語を略いた省略法。
父帝にも……八宮は御父桐壺帝にも御母女御にも早く死別なされて。取り立てたる……しかとした人も居られなかつたので。
才—こゝは學問の意。
世の中に……まして處世の心得などは何で御存じがあらう。
たかき人と……この八宮は貴人の中でも殊に極端に上品で大様な、女のやうでいらつしやるから。
おほぢ大臣の御處分—御母女御の父君なる大臣からの分配の御遺産。
聞きすまじかりけれど—容易に盡きぬ位澤山あつたけれど。
はかなく失せはてゝ—誰がどうしたか、曖昧の中に無くなつて。
わざとうるはしくて—際立つてきちんと立派で。
雅樂寮—治部省の被管で朝廷の式樂を掌る役所。
物の師—專門の樂人舞人をいふ。
その方はいと……八宮は音樂の方の伎倆は大變巧者に優れていらつしやる。
源氏の大臣の……この宮は源氏の異母弟で八の宮と仰しやつたが。

げに、小さき御程々に、とり〴〵かき鳴らし給ふ物の音ども、あはれにをかしく聞ゆれば、涙をうけ給ひて、

八宮「うちすてゝつがひさりにし水鳥の
かりのこの世にたちおくれけむ

心盡しなりや」と、目押し拭ひ給ふ。容貌いと清げにおはします宮なり。年頃の御行に痩せ細り給ひにたれど、さてしもあてになまめきて、君達をかしづき聞え給ふ御心ばへに、直衣の萎えばめるを著給ひて、しどけなき御様いと恥かしげなり。姫君御硯をやをら引き寄せて、手習のやうに書きよせ給ふを、「これに書き給へ。硯には書きつけざなり」とて、紙奉り給へば、恥らひて書き給ふ。

大君「いかでかく巢だちけるぞと思ふにも
うき水鳥のちぎりをぞしる」

よからねど、その折はいとあはれなりけり。手は生ひさき見えて、まだよくも續け給はぬ程なり。「若君も書き給へ」と宣へば、今少し幼げ

朱雀院の大后―朱雀院の御母、即ち弘徽殿太皇后。

横ざまに……弘徽殿が逆謀を構へて東宮の冷泉院を廃してこの八宮を皇太子に立てようと、御自分の御威勢のいゝ時、大事に祭り上げなされた儘で、八宮は生憎源氏方の御交際には除け者にされてしまつたので。

いよ〳〵かの御次ぎ……今では益々源氏の系統の人のみ權勢を得てゐる時分の事とて。

いとゞしき世に……さうでなくてすら憂い世の中に、こんな災難にまで遇つてひどく落膽なされて。

よしある山里―趣味のある別荘。

今はと……もうこれ限と京をお見捨てなさる事を感慨深く思召す。

網代―川瀬に杭を打ち木竹を編みつけて網に代用し魚を捕るもの、宇治川のは氷魚を取るので名高い。以下宇治の山荘の情景。

静なる思に……静に落着いて師經でもしようといふ希望には相應せぬ點もあるが、何としようぞ、それ位は仕方が無い。

心をやる便に―心を慰める便として。

絶え籠りぬる―世に迹を絶つて引籠つた。

昔の人ものし給はましかばと―北方に久しく書き出で給へり。

中君「泣く〳〵もはねうち著する君なくは

我ぞ巢もりになるべかりける」

御衣ども……衾など萎えばみて、御前にまた人もなく、いと寂しくつれ〴〵げなるに、樣々いとらうたげにて物し給ふを、あはれに心苦しう、いかゞは思さゞらむ。經を片手に持給ひて、かつ讀みつゝ唱歌をもし給ふ。姫君に琵琶、若君に箏の御琴を。まだ幼けれど常に合はせつゝ習ひ給へば、聞きにくゝもあらで、いとをかしく聞ゆ。父帝にも母女御にも疾くおくれ奉り給ひて、はか〴〵しき御後見の取り立てたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひ給はず、まいて世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知り給はむ。たかき人と聞ゆる中にも、あさましう、あてにおほどかなる女のやうにおはすれば、古き世の御寶物、おほぢ大臣の御處分、何やかやと盡きすまじかりけれど、行方もなくはかなく失せはてゝ、御調度などばかりなむ、わざとうるはしく

が生きて居られたらと。

見し人も……連添うた妻も住んだ家も共に一片の煙と化してしまつたものを、どうして我が身だけがかうして殘つてゐる事か。

峰の朝霧……古今「雁の來る峯の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ」による。

聖だちたる―聖僧めいた。聖は僧官などの榮達をも欲せず、隱遁して一意佛道修行するものをいふ。

阿闍梨―軌範となつて衆僧の行爲を矯正する德僧、又天台眞言宗で行解勝れた者の學位の如きもの。

オいと賢くて―學問優れて。

この宮―八宮。

たふとき業―佛道修業。

法文―經文。

尊がり……この阿闍梨が八宮を尊敬して常に山莊に參上する。

年頃學び知り……年來八宮が學んで居られる佛法の教理の更に深遠な趣を阿闍梨が說いてお聞かせ申し。

心ばかりは……心の中だけでは極樂淨土の蓮華の上に座を占め、七寶池の中にも住めさうに思ひますのに。極樂に七寶池あり、八功德水といふ清澄の水を滿へて、その中に大さ車輪のやうな五色の蓮華が咲き、善根ある人はこの花の上に

て多かりける。參り訪らひ聞え、心寄せ奉る人もなし。徒然なるまゝに、雅樂寮の物の師などやうの、すぐれたるを召し寄せつゝ、はかなき御遊に心を入れて、おひ出で給へれば、その方はいとをかしく優れ給へり。源氏の大臣の御弟八の宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮におはしましゝ時、朱雀院の大后の横ざまに思し構へて、この宮を世の中に立ちつぎ給ふべく、わが御時もてかしづき奉り給ひける騷に、あいなく、あなた樣の御中らひには、さし放たれ給ひにければ、いよ〳〵かの御次ぎ〳〵になり果てぬる世にて、えまじらひ給はず。又この年頃はかゝる聖になりはてゝ、今は限とよろづを思し捨てたり。

かゝる程に住み給ふ宮燒けにけり。いとゞしき世に、淺ましうあへなくて、移ろひ住み給ふべき所のよろしきも無かりければ、宇治といふ所に、よしある山里持給へりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども、今はと住み離れなむをあはれに思さる。網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、靜なる思に叶はぬ方もあれど、いかゞ

生れると、阿彌陀經に說いてある。え直道にも……えう一圓に出家も出來ません。

京に出でたる……阿闍梨が出京した序に冷泉院に參上して、例の如く然るべき經文など冷泉院が御覽になり阿闍梨に御質問なさる事などがあつた機會に。

内教の御才—佛教の御學問。

さるべきにて—八宮は出家なさるべき必然の御宿緣があつて。

掟—心構へ。態度。

いまだ形は……まだ御出家はなさらぬか。

俗聖—俗體の聖僧。

この若き人々の……此處らにゐる若い者共が譯名をつけてゐるのが。

宰相の中將—薫。

いとすさまじく……甚だ樂しからぬものに痛感しながら。

俗ながら……在俗の儘で聖と評判される程の八宮のお心構は一體どんなものか知らんと。

はかなきに……つまらぬ愚愛の爲に引懸り。

この姫君達—八宮の姫君達。

河浪にきほひて—宇治川の浪音に競うて。

警策になむ—殊勝です。

極樂思ひやられ……極樂では八功德池水が微妙の聲を立てるといふ。

古代にめづれば—古風に賞める故。

さる聖の……そんな世捨人の側で育つて現世的の事には疎からうと察せられるのに、琴が上手とは面白い事ですな、八宮は姫君達を氣がかりに見捨てかねて持て餘して居られる事だらうに、若し私の方が少しでも生き殘つてゐるやうならその間だけでも姫君達をお預け下さるまいか。

この院の帝は……この冷泉院は桐壺帝の第十皇子でいらつしやる。

故六條院—源氏。

入道の宮—女三宮。

かの君達をがな—宇治の姫君達を得たいものだなあ。

中將の君は……薫は姫君達には心を奉かれず、却て八宮の俗念を斷つて行ひ澄して居られる御心持を。

必ず參りて……きつと私が參上して色々お教を受けたく、まづそれとなく八宮へも御内意を伺つて置いて下さい。

あはれなる御住居を……風情深い八宮の御生活の有樣を、餘所ながら伺ふことよ。

世をいとふ……私もこの世を厭ふ心持は貴方のお山へも入りたく存じますが、戀重にも立つ雲がその間

はせむ。花紅葉、水の流にも、心をやる便に寄せて、いとゞしく詠め給ふより外の事なし。かく絶え籠りぬる野山の末にも、昔の人ものし給はましかばと、思ひ出で聞え給はぬ折なかりけり。

八宮「見し人も宿もけぶりとなりにしを

などてわが身の消えのこりけむ」

生けるかひなくぞ思し焦がるゝや。いとゞ山重なれる御住處に、尋ね參る人もなし。あやしき下衆など、田舍びたる山賤どものみ、稀に馴れ給へる事どもの、深き心を解き聞かせ奉り、いよ〳〵この世のかりそめに、あぢきなき事を申し知らすれば、八宮「心ばかりは蓮のうへに思ひのぼり、濁なき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を見捨てむ後めたさばかりになむ、え直道にも形をかへぬ」など、隔なく物語し給ふ。

この阿闍梨は冷泉院にも親しく侍ひて、御經など教へ聞ゆる人なりけり。京に出でたるついでに參りて、例のさるべき文など御覽じて、問はせ給ふことどもあるついでに、八の宮のいと賢く、内教の御才さとり深くものし給ひけるを、阿闍梨「さるべきにて生まれ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひ澄まし給へる、まこと聖の掟になむ見え給ふ」と聞ゆ。冷泉「いまだ形はかへ給はずや、俗聖とかこの若き人々のつけたゝなる。哀なる事なり」など宣はす。宰相の中將も御前に侍ひ給ひて、我こそ世の中をいとすさまじく思ひ知りながら、行など人の目とゞめらるゝばかりは勤めず、口惜しくて過しけれと、人知れず思ひつゝ、俗ながら聖になり給ふらむ心の掟やいかにと、耳とゞめて聞き給ふ。阿闍梨「出家の志はもとより物し給へるを、八宮「はかなきに思ひとゞこほり、今となりては心苦しき女御子どもの御うへを、え思ひ捨てぬ』となむ歎き

を隔てゝゐるのは、貴方が私に隔心なさる故でせうか。

この御使を……この勤使に隨つて八宮の山莊に參られた。

なのめなる際の……普通の身分の、然るべき人の使などすらめつたに往來しない片田舍だのに。

いと珍しくと……勤使などは誠に珍しい事と八宮は御歡迎申上げ、場處柄相應の御肴など調へて適當に御もてなしなされた。

跡たえて……この世から姿を隱してしまつて行ひ澄してゐるといふ譯ではありませんが、只世を愛いものと親じてこの宇治山に假の宿を求めてゐるのみで御座いますとの意。世を愛に宇治山をかけた。

聖の方をば—佛道修行の方面を。

なほ世に……まだ八宮が現世に執着があるのだと帝は氣の毒に思召す。

法文などの……私（薫）は經文などの奥旨を知りたい心が幼少から深くありながら、餘儀なくかうして世を過してゆく中に。

わざと閉ぢ籠りて……その爲に態々籠居して經文を習ひ、一體がつまらぬこの身でありながら超然世捨人のやうな顏するのも誰に遠慮がある譯ではないけれど、自然に延び〳〵になり取紛れ勝で過して來ましたが、八宮の世に稀な御樣子を傳聞して以來、熱心に八宮を佛法の師と敬慕して居ります。

厭はしき心の……世を厭ふ心の生じて來るのも、わが身に不滿のある時、世の中全體怨めしいと痛感する動機があつてこそ佛道に志す心もおこる譯だのに。

何事も……萬事何不足もあるまいと思はれる薫の御身分で、そんなに又來世の事まで心に懸けていらつしやるのが稀な御殊勝さです。

こゝには……私などはかうなる運命なのか、只この世を厭離せよと特に佛樣方がお勸めなさるやうな身の成行で、自然にまあ靜な道心にも都合よい譯ですが。

殘少なき……もう餘命幾何もない氣がするのに、しかとした悟にも達せずに終りさうなので、後も先も全く眞暗な氣がしますのに、薫は私から導くどころか却て私が恥かしい位な道友でせう。

自らもまうで給ふ—薫自身でも八宮を御訪問なさる。

住ひ給へる樣より……八宮の御生活の有樣を始め、假の住居と覩じてさる方にて……山里は山里として寂しいなりに興味も率かれ、氣分の給ふ」と奏す。さすがに物の音めづる阿闍梨にて、

達の、琴彈きあはせて遊び給へる、河浪にきほひて聞え侍るは、いと面白く警策になむ。極樂思ひやられ侍るや」と、いと古代にめづれば、帝ほゝ笑み給ひて、「さる聖のあたりに生ひ出でて、この世の方樣には、たど〳〵しからむと推し量らるゝを、をかしの事や。うしろめたく思ひ捨て難く、もて煩ひ給ふらむを、もし暫しもおくれぬ程は、譲りやはし給はぬ」などぞ宣はする。この院の帝は十の御子にぞおはしましける。朱雀院の、故六條院にあづけ聞え給ひし入道の宮の御ためしを思し出でて、かの君達をがな、つれ〴〵なる遊敵にもなど、うち思しけり。中將の君は、なか〳〵親王の思ひ澄まし給へらむ御心ばへを、對面して見奉らばや、と思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の歸り入るにも、薫「必ず參りて物習ひ聞ゆべく、まづうち〳〵にも、氣色たまはり給へ」など語らひ給ふ。帝は御言づけし給ふ。冷泉「あはれなる御住居を、人傳に聞くこと」など聞え給うて、

冷泉「世をいとふ心は山にかよへども
やへたつ雲を君やへだつる」

阿闍梨、この御使を先にたてゝ、かの宮に參りぬ。なのめなる際の、さるべき人の使だに稀なる山陰に、いと珍しくと待ち喜び給ひて、所につけたる肴などして、さる方にもてはやし給ふ。御返し、

八宮「跡たえて心すむとはなけれども
世をうち山に宿をこそかれ」

聖の方をば卑下して、聞えなし給へれば、なほ世に怨殘りけりと、いとほしく御覽ず。阿闍梨、中將の君の道心深げに物し給ふことなど、語り聞えて、阿闍梨「法文などの心得まほしき志なむ、薫（ハ）いはけなかりし齡より深く思ひながら、え去らず世にあり經るほど、公私にいとま無く明け暮し、わざと閉ぢ籠りて習ひ讀み、大方のはか〴〵しくもあらぬ身にしも、世の中を背き顏ならむも、憚るべきにあらねど、自らうちたゆみ、紛はしくてなむ過しくるを、いとあり難き御有樣を承はり傳へ

おつとりしたものもあるのに、この山莊は荒々しい川瀬の音にすつかり氣を奪はれ。

聖だちたる……聖僧めいた八宮にとつてはこんな處が猶更この世に執着を留めぬ道心の助ともならうが、姫君達はどんなに寂しい心地がなさるだらう、こんな處に住んでは、世間普通の女らしく優雅な點などは失せてゐるかも知れぬと想像される程の御生活情態である。

佛の御方には……姫君達は父君の居られる佛間とは襖一重を隔てゝ住んでいらつしやるらしい。

人の御心ばへ—薫も流石に姫君達の氣立。

流石にいかゞと—薫も流石に姫君達はどんな樣子をしてゐるかと。

されどさる方を……然し元々薫はそんな戀愛などの氣持から離れたい希望でこんな山深く尋れて來たのに、その本意も忘れて好色らしい無駄口を利いて浮氣つぽい振舞をするのも、初の心持に背かうかなど思ひ直し。

優婆塞ながら……俗體ながら山籠りをして修行する佛道の深い旨や經文の事などを。優婆塞は俗體の儘佛門に入つた男のこと。

すざと賢しげには……特別知つたり振ではなしに。

しより、深く心にかけてなむ頼み聞えさする』など、懇に申し給ひし」など語り聞ゆ。宮、「世の中をかりそめの事と思ひ取り、厭はしき心のつきそむる事も、わが身に愁ある時、なべての世怨めしう思ひ知るはじめありてなむ。道心もおこる業なゝめるを、年若く世の中思ふに叶ひ、何事も飽かぬ事はあらじと覺ゆる身の程に、さはた後の世をさへたどり知り給ふらむがあり難さよ。こゝにはさゝべきにや、たゞ厭ひ離れよと、殊更に佛などの勸めおもむけ給ふやうなる有樣にて、おのづからこそ靜なる思に叶ひゆけど、殘少なき心地するに、はか〴〵しくもあらで過ぎぬべかめるを、來し方行く末、更にえたどる所なく思ひ知らるゝを、却りては心恥かしげなる法の友にこそは物し給ふなれ」など宣ひて、かたみに御消息かよひ、自らもまうで給ふ。

げに聞きしよりもあはれに、住ひ給へる樣より始めて、いと假なる草の庵に、思ひなし事そぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべく、のどやかなるもあるを、いと荒ましき水の音、波の響に、

氣遠げなる—えらくて親みにくい。

宿德—學德を積んだ意。

世に暇なく……非常に繁忙でそつけなく。

又その程ならぬ……又そんな地位學問などの無い僧で戒律堅固などいふだけの意いのはあつても。

たみて—卑しく訛つて。

骨なげに……無骨で臆面ないのが誠に不愉快で。

いと流石に……そんな風はしい僧を近づけるのは矢張不愉快な感がしてゐたのに、八宮は誠に高尚で馴れ近づくのもお氣の毒な位の御樣子をして。

いとこよなく深き……佛道の御造詣は特に深遠といふ程ではないけれど。

よき人は……高貴の方は事の理解をなさる點が又平人とは格別であられるので。

暇なくなどして……公務多忙などで久しく八宮に御面會出來ぬ時は。

この君のかく—薫が八宮をこれ程。

年ごろ音にも……數年來殆ど世間に憚さへ絶えておしまひなされて。

訪らひ聞え給ふこと……冷泉院から八宮へお便りをなさる事も折目正しく。

この君も—薫も。

物忘れうちし、夜などもく吹き拂ひたり。聖だちたる御爲には、かゝるしもこそ心とまらぬ催しならめ、女君達、何ごこちして過し給ふらむ、世の常の女しくなよびたる方は遠くやと、推し量らるゝ御有樣なり。佛の御方には、障子ばかりを隔てゝそおはすべかめる。すき心あらむ人は、氣色ばみ寄りて、人の御心ばへを見まほしう、流石にいかゞと、ゆかしうもある御けはひなり。されどさる方を思ひ離るゝ願に、山深く尋ね聞えたる本意なく、すき〴〵しき言をうち出で、あざればまむも、事に違ひてやなど思ひ返して、宮の御有樣のいとあはれなるを、懇に訪らひ聞え給ふ。度々參り給ひつゝ、思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など、わざと賢しげにはあらで、いとよく宣ひ知らす。聖だつ人、才ある法師などは、世に多かれど、餘りこはゞしう、氣遠げなる宿德の僧都、僧正のきはは、世に暇なく生直にて、物の心を問ひ顯さむも、事々しく覺え給ふ。又その程ならぬ佛の御弟子の、忌むこと

をかしきやうにも……情趣的方面の事にも生活上の御補助にも。四季にあてゝ……八宮が毎年四季に一度づゝ行はれる御法要を。この河面は一宇治川の河岸なる御自分の山荘は。

網代の浪も……宇治に網代をかけて氷魚を取ることは九月から始めるから喧しい。九月は陰暦で季秋。中將の君……薫は久しく宇治に御無沙汰してゐるなあ、と思ひ出されたまゝに。

人なども無く一重立つた人も無く。窪れて……微行で宇治へ御出かけになつた。

河の此方なれば一八宮の山荘は宇治川のこちら岸(京の方)ゆゑ。

船なども煩はで一船の用意などと手數を盡す必要もなく。

入りもて行くまゝに一次第に山路に御はひりなさるにつれて。

人遣りならず一他人のせゐでなく、我が心がらで。

かゝるありき……こんな御微行なども餘り仕馴れぬ心持からは。

山おろしに……山おろしの風に堪へきれずこぼれる木の葉の上の露よりも、一層龍く哀に打たれてこぼれる私の涙であるよ。

山賤の……そこらの賤しい住民共の

を保つばかりの尊きはあれど、けはひ卑しく言葉たみて、骨なげに物馴れたる、いと物しくて、晝はおほやけ事に暇なくなどしつゝ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに召し入れ、語らひ給ふにも、いと流石に物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しき樣して、この君もまづさるべき事につけつゝ、をかしきやうにも、まめやかなる樣にも、心寄せ 仕うまつり 給ふこと、三年ばかりになりぬ。

秋の末つ方、四季にあてゝし給ふ御念佛を、この河面は、網代の浪も、

不審がるのも面倒と、護衛兵の先拂の聲などもおとめになつた。

そこはかとなき水の流一流れるとも分らぬ細い川。

隱れなき御匂ぞ……隱しても隱しきれぬ薫特有の匂が追風につれて漂うて來て。

主知らぬ香……どうした香だらう、高貴の方のお通りとも見えないが、と、朝起の家々では不思議に思ふものがあつた。古今「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」。

その事とも……はつきり何の樂器とも聞き分けかねる音樂の響が、常にかく……薫は八宮親子がいつもかうして音樂の遊をなさると聞いてゐるのに。

親王一八宮。

入り給へば一薫が山荘へ御はひりになると。

黃鐘調一音樂の調子の名。

世の常の……普通ありふれた平凡な合奏ではあるが場所柄ゆゑか物珍しい感じがして。

撥きかへす撥の音一撥の裏で下から輕く拔ひ上げる音。

箏の琴あはれに……箏の音に合せて面白く彈めいた聲で姫君の歌ふのが、途ぎれ〳〵に聞える。

この頃はいとゞ耳かしがましく靜ならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひ給ひて、七日のほど行ひ給ふ。姫君達はいと心細く徒然まさりて詠め給ひける頃、中將の君、久しく參らぬかなと、思ひ出で聞え給ひけるまゝに、有明の月のまだ夜深くさし出づる程に出で立ちて、いと忍びて、御供に人なども無く、窶れておはしけり。河の此方なれば、船なども煩はで、御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに、霧りふたがりて、道も見えぬ繁木の中をわけ給ふに、いと荒ましき風のきほひに、ほろ〳〵と落ち亂るゝ木の葉の露の、散りかゝるもいと冷かに、人遣りならずいたく濡れ給ひぬ。かゝるありきなども、をさ〳〵ならひ給はぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

薫「山おろしにたへぬ木の葉の露よりも
あやなくもろきわが涙かな」

山賤の驚くもうるさしとて、御隨身の音もせさせ給はず。柴の籬をわけつゝ、そこはかとなき水の流どもを、踏みしだく駒の足音も、猶忍

びてと用意し給へるに、隠れなき御匂ぞ、追風にしたがひて、主知らぬ香とおどろく寝覚の家々ぞありける。近くなる程に、その事とも聞き分かれぬ物の音ども、いとすごげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くを、ついでなくて、親王の御琴の音の名高きも、え聞かぬぞかし、よき折なるべしと、思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲のひゞきなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所がらにや耳馴れぬ心地して、掻きかへす撥の音も、もの清げに面しろし。箏の琴、あはれになまめいたる聲して、絶え〴〵聞ゆ。暫し聞かまほしきに、忍び給へど、御けはひしるく聞きつけて、宿直人めく男、なま頑しき出で來たり。しか〳〵なむ籠りおはします、御消息をこそ聞えさせめと申す。「何かは、しか限ある御行のほどを、紛はし聞えさせむにあいなし。かく濡れ濡れ參りきて、徒に歸らむ愁を、姫君の御方に聞えて、あはれと宣はせばなむ慰むべき」と宣へば、見にくき顔うち笑みて、「申させ侍らむ」とて立つを、「しばしや」と召し寄せて、「年ごろ人傳にのみ聞きて、忍び給へどもれ出でにけるにや、いとあはれなり。

忍び給へど—薫は物蔭に身を忍ばせていらつしやるが。
なま頑しき—何だか無骨らしいのが。
しか〳〵なむ……かく〳〵の譯で八宮樣は阿闍梨の寺に籠つていらつしやいます、御用なら參つてさう申しませう。
しか限ある……そんなに日數を限つたお勤の中をお妨げ申すのは不都合です。
徒に歸らむ……無駄足踏んで歸京する悔しさの愁訴を。
あはれと宣はせば……姫君達から氣の毒だと一言仰しやつて下されたら私は滿足です。
申させ侍らむ—侍女にさう申上げさせませう
御琴の音どもを—「聞くべき物の限云々」にかゝる。
つきなく……突然でしやばつて私が近寄る中に、姫君達がすつかり彈奏を御やめになつたら。
さる直々しき……そんな宿直人のやうなつまらぬ者の感じにも。
かくなむ遊ばせども—かうして音樂をなされますが。
下人にても……賤しい下部でも京から來てこの山莊に逗留してゐる者がありますが。
大方かくて……一體八宮樣はかうして姫君達のおありになる事をお隱しになります。
しか忍び給ふなれど……さうしてお隱しなさるけれど世間の人は皆姫君達を世に稀な美人として評判するだらうのに。
かくておはしますらむ……かうして寂しい生活をしていらつしやる姫君達の御樣子が不思議に心を牽いて、全く世間普通の女達と同樣には考へられないのです。
心なきやうに……手引した事が發覺致しましたら、さも無分別なやうに後で私がお咎めを受けませう。
あなたの御前—姫君達のお居間に面する處。
竹の透垣—竹の透かしの垣根。
みな隔殊なるを—一隔が嚴重にしてあるのを。
この宿直人あへしらふ—この宿直人が應對をしてゐる。
あなたに—姫君のお居間の方へ。
萎えばめる—着物のくた〳〵になつた。
大人など—大人女房など。
一人は—これが大君。
扇ならで……扇を以て月を招いた故事は未詳。宣長は古註の一說に隨つて「まねき」を「まねび」の誤と見廉阿止親に「月隱三重山一兮、擧」扇

ゆかしく思ふ御琴の音どもを、嬉しき折かな、暫し少し立ち隱れて聞くべき物の限ありや。つきなくさし過ぎて參り寄らむほど、皆ことや給ひては、いと本意なからむ と宣ふ。御けはひ、顔、容貌の、さる直直しき心地にも、いとめでたく覗なく覺ゆれば、人聞かぬ時は、且暮かくなむ遊ばせども、下人にても、都の方より參り立ちまじる人待ちぬべての人に知らせ奉らじと、思し宣はするなり」と申させ給ふ。なべてば、うち笑ひて、「あぢきなき御物隱しや。しか忍び給ふなれど、皆人あり難き世のためしに、聞え出づべかめるを」と宣ひて、猶しるべせよ。我はすき〳〵しき心など無き人ぞ。かくておはしますらむ御有樣のあやしく、げになべてには覺え給はぬなり」とこまやかに宣へば、「あなかしこ。心なきやうに後の聞えや侍らむ」とて、あなたの御前は、竹の透垣しこめて、みな隔殊なるを教へ奉れり。御供の人は、西の廊に呼びすゑて、この宿直人あへしらふ。

宿直人

9549

喩レ之」に據つたかといふ。
添ひ臥したる人―うつぶせに身體をかゞめてゐた人、即ち中の君。
入る日を返す……落日を招き返す撥の事は聞いた事もありますが、撥で月を招くとは風變りに思ひつかれた御工夫ですね。蘭陵王の舞（一名沒日還午樂）に日搔返（ヒカヘス）といふ手振があるのをいふか。
及ばずとも……成程落日を招く趣には及ばなくとも然し撥も月に緣が無いでもありますまいよ。琵琶の撥を挿し收むる所を隱月といふ。
更によそに……全く餘所ながら普通の女らしくあるまいと想像してゐたのとは違つて。
必ずかやうの事……きつとこんな風な、意外な場處に意外な美人が隱れ住んでゐる事などと書いてあるが、實際にはそんな事も無かつたらうと作者の構想が憎く思はれるのに、成程さうした面白い事も何處ぞの隅には潜んでゐる世の中だわいと、薫は一層姫君達に心が牽かれるらしい。
又月さし出でなむと―再び月が雲間から出てくれゝばよいと。
人かくおはすと……誰かかうして立聞して居られますと姫君達に申上げた人でもあつたのか。

あなたに通ふべかゝめる透垣の戸を、少し押しあけて見給へば、月をかしき程に霧り渡れるをながめて、簾をすこし短く卷きあげて、人々ゐたり。簀子にいと寒げに、身ほそく萎えばめる童一人、おなじ樣なる大人など居たり。内なる人、一人は柱に少し居隱れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隱れたりつる月の、俄にいとあかくさし出でたれば「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげに匂ひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上に傾きかゝりて、「入る日を返す撥こそありけれ。樣異にも思ひおよび給ふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、今すこし重りかによしづきたり。「及ばずとも、これも月に離るゝものかは」など、はかなき事をうち解け宣ひかはしたる御けはひども、更によそに思ひ遣りしには似ず、いとあはれに懷かしうをかし。昔物語などに語り傳へたる、若き女房などの讀むをも聞くに、必ずかやうの事をいひたる、さしもあらざりけむと憎く推し量らるゝを、げ

驚き顔には……姫君達の引込む態度が慌てず、物靜に振舞うて。
やをら立ち出でて―薫は籬の際から靜に離れて。
ありつる侍―先程の宿直の男。
折あしく……八宮のお留守ゆゑ。
なか〳〵嬉しく―姫君達の音樂が聽けて却て嬉しく。
かく侍ふよし……かうして私が參つてゐる旨を姫君に傳へて下さい、ひどく露に濡れた不平も申上げようと思ふ。
かく見えやしぬらむ……姫君達はこんな風に薫に姿を見られたらうとは思ひも寄らないで。
うち解けたりつる事―好い加減の不用意な彈奏。
思ひかけぬ程……思ひもよらぬ薫の御來訪ゆゑ氣がつかなかつたが、それにしても迂濶さよと。
御消息など……薫と姫君との間にお取次をする女房も、こんな事には不馴な者らしいのを。
折柄にこそ……何事も時と場合で適當に振舞ふものだのに、かうした場合に引込んでゐるはよくないと薫は思召して。
ありつる御簾の前―先程姫君達の居られた御簾の前の簀子。
この御簾の前に……内へお入れ下さ

にあはれなる物の隈もありぬべき世なりけりと、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。又月さし出でなむと思すほどに、奥の方より、人かくおはすと告げ聞ゆる人やあらむ、簾おろして皆入りぬ。驚き顔にはあらず、なごやかにもてなして、やをら隱れぬるけはひども、衣の音もせず、いとなよゝかに心苦しうて、いみじうあてにみやびかなるを、あはれと思ひ給ふ。やをら立ち出でて、京に、御車率て參るべく、人走らせ給ひつ。ありつる侍に、「折あしく參り侍りにけれど、なか〳〵嬉しく、思ふこと少し慰めてなむ。かく侍ふよし聞えよ。いたう濡れにたるかごとも聞えさせむかし」と宣へば、參りて聞ゆ。かく見えやしぬらむとは思しも寄らで、うち解けたりつる事どもを聞きやし給ひつらむと、いといみじく恥かし。怪しく芳ばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひかけぬ程なれば、驚かざりける心おぞさよと、心も惑ひて恥ぢおはさうず。御消息など傳ふる人も、いとうひうひしき人なゝめるを、折柄にこそよろづの事も思いて、まだ霧のまぎれ

い、この縁側にゐるのは感服致しません、一寸した氣まぐれ位ではこんなにして尋ねて來る事は出來さうもない雜澁な山の險道だと存じますものを、それにしては餘りに變つたお扱と存じます。

さりとも……如何な事にも私の心持を御了解下さるだらうと。

なだらかに……すら〳〵と御應對の出來るものもなく、穴にも入りたい位恥かしがつてゐるのも。

女房の奥深きを……物馴れた女房の奥の方にゐるのを。

わざとめいたるも—勿體らしいのも。

何事も……何が何やら一向分らぬやうな私共の分際で。

かつ知りながら……一方では十分知つてゐながら、憂い事を知らぬ顏するのも世の習とは存じて居りますが、貴女(大君)までがまあ餘り知らぬ顏なさるのが。

あり難うよろづを……世に類少く總てを悟り澄した父宮の御許に御一緒に暮して居られる姫君達の御心の中は、萬事さつぱりしていらつしやる事と推量致されますので。

忍びあまり侍る……怀へきれぬ私の心の、深いか淺いかをもお汲み取り下されてこそ、折角お悟りになつた甲斐もありませう。

なれば、ありつる御簾の前に歩み出でてつい居給ふ。山里びたる若人どもは、さし答へむ言の葉もおぼえで、御褥さし出づる樣もたど〳〵しげなり。「この御簾の前にははしたなく侍りけり。うちつけに淺き心ばかりにては、かくも尋ね參るまじき山のかけ路を、思ひ給ふる樣異にてこそ。かく露けき旅を重ねては、さりとも御覽じ知るらむとなむ、頼もしう侍る」と、いとまめやかに宣ふ。若き人々の、なだらかに物聞ゆべきもなく、消えかへり耀かしげなるも、かたはら痛ければ、女房の奥深きを起し出づるほど久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、うちは、何事も涼しく推し量られ侍れば、猶かく忍びあまり侍る深さ

世の常の……私の心持は世間並の浮氣心とは引離して考へて戴きたいもので御座います。

さやうの方は……そんな浮氣沙汰は、强ひて勸める人があつてもさうなりさうもない氣剛な性でしてね。

自から聞し召し……さういふ噂は自然お聞及びも御座いませう。

徒然とのみ……榮達を欲するでなく閑寂な氣分でのみ暮してゐる私の日常生活の話相手として貴女方をお頼み申上げ、又貴女方はかうして人里離れた處でしんみり暮していらつしやるお氣晴らしの一助にも、そちらから御文通下さる位にお馴染み申しましたら。

老人—老侍女、名は辨の君。

さし過して—その老人は出過ぎて。

あな辱なや……まあ勿體ない、お氣の毒な御座席で御座いますこと、御簾の内へお入れ申せばよいに。

物の程知らぬ……人相應の扱ひ方を知らぬやうです。

さだ過ぎたるも—年寄くさいのも。

君達—姫君達。

世の中に住ひ給ふ……八宮樣はこの世に生活していらつしやる人數にも入らない逼塞した御樣子で、當然音信してよい筈の人々すら訪れてお顏を立てる者も段々稀になつ

淺さの程も、分かせ給はむこそかひは侍らめ。世の常のすき〳〵しき筋には思し召し放つべくや。さやうの方は、わざと勸むる人侍りとも、難くべうもあらぬ心强さになむ。自ら聞し召し合はするやうも侍りなむ。徒然とのみ過し侍る世の物語も、聞えさせ所に頼み聞えさせ、又かく世離れて詠めさせ給ふらむ御心の紛はしにも、さしも驚かさせ給ふばかり聞え馴れ侍らば、いかに思ふ樣に侍らむ」など、多く宣へば、つゝましく答へにくくとて、起しつる老人の出で來たるにぞ讓り給ふ。たとしへなくさし過して、「あな辱なや。いとかたはら痛き御座の樣にも侍るかな。御簾の内にこそ。あやしく若き人々は物の程知らぬやうにこそ」など、したゝかにいふ聲のさだ過ぎたるも、かたはら痛く君達は思す。「いとも怪しく、世の中に住ひ給ふ人の數にもあらぬ御有樣にて、さもありぬべき人々だに、訪らひ數まへ聞え給ふも、見え聞えずのみなりまさり侍るめるに、あり難き御志のほどは、數にも侍らぬ心にも、淺ましきまで思ひ給へ聞えさせ、侍るを、若き御心

て參りますのに、珍しい貴方の御芳志は、物の數ならぬ私共の心にもひどく感激致して居りますが。
けはひいたう―辨の樣子が大變に物物しく。
いとたづきも知らぬ……どうも取附く島も無い氣持がしてゐたのに嬉しい貴女のお取成しです、ほんに萬事呑込んで居られる貴女を力にする故今後は誠に好都合ですよ。
寄り居給へる……簾際に。
几帳のそば―几帳の端。
うたてこの世のほか……餘り甚しくて極樂世界の異香でもあらうかと。
さし過ぎたる……こんな事を申上げたら出過者とのお咎めもあらうかと我慢して居りますが。
あはれなる昔の御物語―薫の身の上に就いての古い話。柏木と女三宮との間の祕密をいふ。
いかならむ序に……どうした機會に切出してお話し申上げ、事情の一端をも仄めかしてお知らせ致さうかと、年來佛を拜む折にもこの事を祈願の中に加へて思ひ續けて居りました驗ででも御座いませうか。
まだきに……まだ語り出しもせぬ中から溢れる涙に目もくれて。おぼほれは溺れの意。
さだ過ぎたる人―老人。

地にも思し知りながら、聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」と、いとつゝみなく物馴れたるも、なま憎きものから、けはひいたう人めきて、よしある聲の流石にしたれば、「いとたづきも知らぬ心地しつるに、嬉しき御けはひにこそ。何事もげに思ひ知り給ふらむ頼こよなかりけり」とて寄り居給へるを、几帳のそばより見れば、曙の空のやう〳〵物の色分かるゝに、げに窶し給へると見ゆる狩衣姿の、いと濡れしめり萎えばみたる程、うたてこの世のほかの匂にやと、怪しきまで薫り滿ちたり。この老人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もやと、思ひ給へ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむ序にうち出で聞えさせ、片端をもほのめかし知し召させむと、年頃念誦の序にも、うちまぜ思う給へ渡るしるしにや、嬉しき折に侍るを、まだきにおぼほれ侍る涙にくれて、えこそ聞えさせ侍らね」と、うちわなゝく氣色、まことにいみじく物悲しと思へり。大方さだ過ぎたる人は、涙もろなるものとは見聞き給へど、いとかうしも思へるも怪しうなり給ひて、「こゝにか

かくあはれ知り給へる……その許のやうに物の分つた人が無いので、露だらけの道中で只一人ぐしよ濡れになつてゐました。
言な殘い給ひそかし―何もかも殘なく話して下さいよ。
かゝる序しも……こんな好機會はありますまい、假令再びあつても今夜の中も受合へない私の命は當にも出來ませんものを。
古者―老いぼれ。辨自身をいふ。
知し召され……御記憶に殘して置いて戴きたう御座います。
三條の宮に侍ひし小侍從―女三宮の侍女。柏木に手引をした女。
そのかみ睦ましう……その頃親しくしてゐました同年輩の人は。
遙なる世界……私は一時往つてゐました遠い國から又流れて參りまして。筑紫に行つてゐたのが再び上京したのをいふ。
これにかく……八宮のお屋敷にかうして仕へて居ります。
藤大納言―紅梅。
御兄―柏木をさす。
物の序など……何かの機會に柏木樣の事だといつてお聞及びになつた事も御座いませう。
かく大人しく……こんなに貴方が御成人なされた御年を考へても。

く參ることは度重なりぬるを、かくあはれ知り給へる人もなくてこそ、露けき道のほどに、一人のみそぼちつれ。嬉しき序なゝめるを、言な殘い給ひそかし」と宣へば、「かゝる序しも侍らじかし。又侍りとも、夜のまの程知らぬ命の、頼むべきにも侍らぬを、さらば只かゝる古者世に侍りけりとばかり、知し召され侍らなむ。三條の宮に侍ひし小侍從は、はかなくなり侍りにけると、ほのかに聞き侍りし。そのかみ睦ましう思ひ給へしおなじ程の人、多く失せ侍りにける世の末に、遙なる世界より傳はりまうで來て、この五年六年の程なむ、これにかくさぶらひ侍る。え知し召さじかし、この頃藤大納言と申すなる御兄の、衞門の督にてかくれ給ひにしは。物の序などにや、かの御上とて聞し召し傳ふることも侍らむ。（柏木ノ）過ぎ給ひて、いくばくも隔たらぬ心地のみし侍る。その折の悲しさも、まだ袖のかわく折侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍れば、かく大人しくならせ給ひにける御齢の程も、夢のやうになむ。かの故權大納言の御乳母に侍りしは、辨が母になむ

故權大納言―柏木。
辨―この老女の呼名。
朝夕に……朝夕私も柏木樣のお側にお仕へ申して居りましたところ。
人に知らせず……柏木樣が他人には話せないし御自分の思案にも餘つた事を、時々それとなく私に仰せられましたが。
召し寄せて―私をお呼びになつて。
聞し召さすべき……貴方のお耳に入れて置くべき事が一つありますが、これだけ申上げたのに殘を皆お聞きになりたい御心が御座いましたら、何れゆつくり皆お耳に入れてしまひませう。
若き人々も……此處にゐる若い女房達も私を苦々しく出過ぎた者と後指さしますのも。
流石に……流石に周圍を憚つて大事な話はせずにしまつた。
夢がたり―夢判斷する者。
巫女―梓巫(いちこ)のやうな者。
あはれに覺束なく……薫が豫て何となく不審を抱いてゐる事柄について辨が語るのは。
きしぐみに―だしぬけに。
こちく―しかるべければ―無作法で趣が無いやうだから。
そこはかと……何が何やらそれだけのお話では判斷もつかぬもの。

侍りし。朝夕に仕うまつり馴れ聞えしに、人數にも侍らぬ身なれど、人に知らせず、御心よりはた餘りける事を、折々にうちかすめ宣ひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方に、召し寄せて、いさゝか宣ひ置くことなむ侍りしを、聞し召さすべき故なむ一こと侍れど、かばかり聞え出で侍るに、殘をと思し召す御心侍らば、のどかになむ聞し召し果てさすべき。若き人々も、かたはら痛くさし過ぎたりと、突きじろひ侍るめるも道理になむ」とて、流石にうち出でずなりぬ。(薫ハ)あやしく、夢がたり、巫女やうの者の問はず語りすらむやうに、珍かに思さるれど、あはれに覺束なく思しわたる事の筋をかけ聞ゆるは、いと奥ゆかしけれど、げに人目もしげし、さしぐみに古物語にかゝづらひて夜を明し果てむも、こちく―しかるべければ、「(薫)そこはかと思ひ分く事は無きものから、古への事、けしきばかりを聞き侍るも、物あはれになむ。さらば必ずこの殘聞かせ給へ」とて、霧晴れゆかばはしたなかるべき簀を、あまり面なくと、御覽じ咎められぬべき樣なれば、「(薫)思ひ給

霧晴れゆかば……今に霧が晴れたら見つともない私の窶れ姿を、恥かしくも姫君達に見咎められてしまひさうな仕儀ゆゑ、心で思ふよりは殘念ながら長居も出來ませぬ。
かのおはします寺―八宮の籠つていらつしやる阿闍梨の寺。
峯の八重雲……後撰「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらむ峯の白雲」。
何事を……姫君達はどんな心配を仕殘して居られようぞ、恐らく物思の有りつたけを仕盡して居られるだらう、こんなに拵へ目に奥深く引込んでいらつしやるのも尤たなと薫は思召す。
朝ぼらけ……姫君達を尋ねて遙々越えて來た檜の尾山は、この朝のほのぼのと霧が立罩めて、私のにゆく家路もよくは見えぬとの意。
やすらひ給へる樣を―躊躇していらつしやる薫のお姿を。
都の人の……都の人で高貴の人を見馴れた者ですら矢張薫の容姿は格別と思つてゐるものを、まして此處の侍女達は。
御返り……侍女達が恥かしがつて姫君の御返事を取次ぎかねてゐる故、例のいとつゝましげにて……大君のさま。

ふる心の程よりは、口惜しうなむ」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲かすかに聞えて、霧いと深く立ち渡れり。峯の八重雲思ひやる隔多くあはれなるに、猶この姫君達の御心のうちども心苦しう、何事を思し殘すらむ、かくいとつゝましく奥まり給へるも、道理ぞかしなど覺ゆ。

(薫)「朝ぼらけ家路も見えずたづねこし
槇の尾山はきりこめてけり

心細くも侍るかな」と、立ち返りやすらひ給へる樣を、都の人の目馴れたるだに、猶いと殊に思ひ聞えたるを、まいていかゞは珍しう見ざらむ。御返り聞え傳へにくげに思ひたれば、例のいとつゝましげにて、

(大君)「雲のゐる峯のかけぢをあき霧の
いとゞへだつる頃にもあるかな」

少しうち歎き給へる氣色、淺からずあはれなり。何ばかりをかしき節は見えぬあたりなめれど、げに心苦しき事多かるにも、明うなり行け

雲のゐる……雲の懸つてゐる山の崖路を更に又秋露まで立罩めて、お歸りの路を一層覺束なくして居りますよ、お氣の毒な。

何ばかり……これといふ風情もないこの山莊ではあるが。

流石にひた面なる……如何にこんな場所でも直接顏見られるのが恥かしい氣がして。

なか〳〵なる程……生中言葉をかはさぬがましな位にまだ深山お心持を承りさした殘の部分は、何れ今少しお馴染になつてから、不足も申上げて承りませう。

世の人めいて……通り一遍のやうに私をお扱ひ下さるので、案外物がお分りにならぬ事よと。

宿直人の……宿直の侍が部屋に褥へた西面の廂の間に居て。

おの〳〵何となき……各自樣々の生計の爲に。

誰も思へば……誰でも考へて見ればこの水の上の舟と同樣な無常さだなあ、自分だけはそんな浮き漂うた身でなく金殿玉樓に落着いてゐる身だなどと安心し居られる世の中かいと、薫は思續けられる。

あなたに……姫君達に、

はし姫の……高瀨に棹さしてゆく舟を眺めても姫君達の心持を推察して、丁度棹の雫に舟人の袖の濡れるやうに私の袖は涙に濡れる事ですとの意。宇治の橋姫は古い傳說だが、もと愛(ハシ)姫の義である。

こゝは姫君達に譬へていふ。

いらゝぎたる……鳥肌だつた。

紙の香など……紙に炷きしめる香など好い加減では極りが惡いけれどこんな場合は早いが何よりと。

さしかへる……棹さし歸る宇治の渡守は、朝夕の棹の雫がその袖を朽ちさせてしまふでせうか、私もそれと同樣日夜涙に袖を朽ちさせて居ります。

身さへ浮きて……「さす棹の雫にぬるる袖故に身さへ浮きても思ほゆるかな」(細流)

まほに目やすく……ちやあんと雜もなくお書きになつたものだと。

歸り渡らせ給はむ……八宮樣が山寺からお歸りの頃又きつと御訪問致しませう。

皆この人に……皆この宿直人に脫いでお與へになつて。

奉り換へつ……お召換なされた。歸京した事は省筆してある。

老人の物語……薫は耕の話が。

おほどかに……大樣に可愛であつた姫君達の御姿が面影にちらついて、こんな美しい人を見ては矢張出家

ば、流石にひた面なる心地して、「薫なか〳〵なる程に、承はりさしつる事多かる殘は、今少し面馴れてこそは怨も聞えさすべかめれ。さるはかく世の人めいてもてなし給へば、思はずに物思し分かざりけりと、怨めしうなむ」とて、宿直人のしつらひたる西面におはして、詠め給ふ。「網代は人騷がしげなり。されど氷魚も寄らぬにやあらむ、すさまじげなる氣色なり」と、御供の人々見知りていふ。あやしき小舟どもに柴刈り積みて、おの〳〵何となき世の營みどもに行きかふ樣どもの、はかなき水の上に浮びたる、誰も思へば同じことなる世の常無さなり。我は浮かばず、玉の臺に靜き身と思ふべき世かは、など思ひ續けらる。硯召してあなたに聞え給ふ。

薫「はし姫のこゝろをくみて高瀨さす
　棹のしづくに袖ぞ濡れぬる

詠め給ふらむかし」とて、宿直人に持たせ給へり。寒げにいらゝぎたる顏してもて參る。御返り、紙の香など、おぼろげならむは恥かしげなるを、疾きをこそはかゝる折はとて、

大君「さしかへる宇治の川をさ朝夕の
　しづくや袖をくたしはつらむ

身さへ浮きて」と、いとをかしげに書き給へり。まほに目やすく物し給ひけりと、心とまりぬれど、「御車ゐて參りぬ」と、人々騷がし聞ゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「歸り渡らせ給はむ程に、必ず參るべし」など宣ふ。濡れたる御衣どもは、皆この人に脫ぎかけ給ひて、取りに遣はしつる御直衣に奉り換へつ。

老人の物語、心にかゝりつる御けはひども、面影に添ひて、なほ思ひ離れ難き世なりけりと、心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。懸想だてもあらず、白き色紙の厚肥えたるに、筆はひき繕ひ選りて、墨つき見所ありて書き給ふ。「うちつけなる樣にやと、あいなくとゞめ侍りて、殘多かるも苦しき業になむ。片はし聞えさせ置きつるやうに、今

もしにくい世の中だわいと。
御文奉り給ふ―薫は又々宇治の姫君へお手紙をお遣りになる。
ひき繕ひ選りて―注意して選択して。
うちつけなる……餘り無作法だらうかと不本意ながら遠慮致しまして、まだ申上げたい事が澤山殘つてゐるのも苦痛で御座います。
片はし……前にも一寸は申上げ置きました通り、只今からは御居間の御簾の前にも氣輕なく近寄る事を許して下されてもよい筈です。
御山籠―八宮の御參籠。
いぶせかりし……過日深い霧を分けてお尋ねしたのに、御不在で本意なかつた思をも晴しませう。
いとすくよかに―頗る達筆に。
左近の將監―左近衞府の三等官。六位相當。
かの老人―老女の辨。
檜破子―檜物造りの辨當箱。
數多せさせ給ふ―澤山拵へて持たせておやりになつた。
かの御寺にも……阿闍梨の山寺にも使をお遣はしになる。
さておはします程の……八宮が籠つていらつしやる間のお布施を附達にお遣しなさるだらうと薫は氣をきかして。
御行はてゝ……そのお使が行つたのよりは御簾の前も心やすく思し許すべくなむ。御山籠はて侍らむ日數も承はり置きて、いぶせかりし霧のまよひも晴け侍らむ」などぞ、いとすくよかに書き給へる。左近の將監なる人御使にて、「かの老人たづねて、文も取らせよ」と宣ふ。宿直人が寒げにてきまよひしなど、あはれに思しやりて、大きなる檜破子やうの物、數多せさせ給ふ。又の日かの御寺にも奉り給ふ。山籠の僧ども、この頃の嵐には、いと心細く苦しからむを、さておはします程の布施賜ふべからむと思しやりて、絹綿など多かりけり。御行はてゝ出で給ふ旦なりければ、行人どもに綿、絹など、袈裟、衣、すべて一領の程づつ、ある限の大德だちに賜ふ。宿直人、かの御ぬぎ捨ての艶にいみじき狩の御衣、えならぬ白き綾の、なよ〳〵といひ知らず匂へるを移し著て、身をはた、え換へぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人毎に咎められめでらるゝなむ、なか〳〵所狹かりける。心に任せて身を安くも振舞はず、いとむくつけきまで人の驚く匂を、失ひてばやと思へど、所狹き人の御移り香に

は、丁度八宮のお勤が濟んで御下山の朝だつたので。
行人どもに……修行者達には絹綿など下される。
大德―法師の敬稱。
かの御ぬぎ捨ての―先日薫が脫ぎ捨てゝ下された。
身をはた……身體だけはどうも取換へる事の出來ぬもので元のまゝだから、身分不似合な袖の香を誰からも怪まれ褒められるのが却て窮屈で困つた。
心に任せて……よい香の爲にその男は勝手氣儘な振舞も出來ず、誠に氣味惡いほど人の驚く香を何とかして無くなしてしまひたいと思ふけれど、甚しい薫の移り香で洗ひ落す事も出來ぬのが餘りの事だ。
君は―薫は。
宮にも……八宮へも、かく〳〵で薫から姫君へお文がありましたなどと侍女達が申上げ、それをお目にかけると。
無想だちて……色戀めいた御返事をするのも却て變なものでせう、薫は通例の若者とは違つた御氣立ゆゑ、私の死後もお見捨て下さらぬやうと、一言それとなくお願して置いたから。
御自らも……八宮御自身も、樣々の

て、えもすゝぎ捨てぬぞ餘りなるや。君は姫君の御返事、いと目やすく見めかしきを、をかしく見給ふ。宮にも「かく御消息ありき」など、人々聞えさせ御覽せさすれば、八宮なにかは。懸想だちてもてない給はぬも、なか〳〵うたてあらむ。例の若き人に似ぬ御心ばへなめるを、亡からむ後もなど、一言うちほのめかしてしかば、さやうにてぞ心とゞめたらむなど宣ひけり。御自らも、樣々の御訪らひの、山の岩屋に餘りしことなど宣へるに、詣でむと思して、三の宮の「かやうに奥まりたらむあたりの、見勝りせむこそをかしかるべけれ」と、あらまし言にだに宣ふものを、聞え勵まして、御心騷がし奉らむと思して、のどかなる夕暮に參り給へり。
例の樣々なる御物語、聞えかはし給ふついでに、宇治の宮の御こと語り出でて、見し曉の有樣など、委しく聞え給ふに、宮いと切にをかしとおぼいたり。さればよと御氣色を見て、いとゞ御心動きぬべくいひ續け給ふ。さてそのありけむ返事は、などか見せ給はざりし。まろな

薫からの贈物が山寺に置場も無い位だつた事などお禮狀を出されたので、薫は又々宇治を訪問しようと思召して。

三の宮―匂宮。

かやうに奥まり……こんな引込んだ處にゐる女で、近づいて見ると案外よいといふやうなのが面白い。

あらまし言―豫言、こゝは當もない希望の意。

聞え勵まして……大いに宇治の尊をして匂宮に氣を揉ませて上げようと思召して。

見し曉の有樣―姫君達の奏樂を薫が隙見したあの曉の情景。

さればよと……案の定お心を動かされたわいと匂宮の御樣子を見て。

さてそのありけむ……それではその大君の返事はどうして私にお見せ下さらなかつたのですか、私なら貴方にお見せ申すのに。

さかし……さうでせうとも(反語)、隨分色々集まる女の手紙をちよつぴりでもお見せ下さらない。

かのわたりは……宇治の姫君はこんな日蔭者見たやうな私などの身が一人で内證にして置くべき有樣でもありません故、きつと貴方にお見せしたいと思ひますが、宇治くんだりまでどうして貴方がお出にならましかば」と怨み給ふ。薫「さかし。いと樣々御覽ずべかめる端をだにぞ、見せさせ給はぬ。かのわたりは、かくいと無心に埋もれたる身に、ひき籠めて止むべきけはひにも侍らねば、必ず御覽せさせばやと思ひ給へれど、いかでか尋ね寄らせ給ふべき。かやすき程こそ、好かましくはいとよく好きぬべき世に侍りけれ。うち隱ろへつゝ多かめるかな。さる方に見所ありぬべき女の物思はしき、うち忍びたる住處も、山里めいたる限などに、自ら侍るべかめり。この聞えさするわたりは、いと世づかぬ聖ざまにて、こちく〳〵しうぞ あらむと、年頃は思ひ侮り侍りて、耳をだにこそとゞめ侍らざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずば、まほならむはや。けはひ有樣はた、さばかりならむをぞ、あらまほしき程と覺え侍るべき」など聞え給ふ。はて〳〵はまめだちていと妬く、おぼろげの人に心移るまじき人の、かく深く思へるを、疎ならじとゆかしう思すこと、限なくなり給ひぬ。「なほ又々よく氣色見給へ」と、人をすゝめ給ひて、限ある御身の程のよだけさを

ならせう、手輕な身分の者こそ浮氣したければ勝手に出來もします世の中だけれど。

うち隱ろへつゝ……何處かの隅に引込んでゐるいゝ女が澤山おありのやうですよ。

さる方に……相應に見所ある女の何か物案じ顏なのが人目を避けて住んでゐる家も。

この聞えさする……私のお話致します宇治の姫君は誠に世間離れのした坊さん臭い環境で、殺風景だらうと。

ほのかなりし……先夜月の光で仄かに見た姫君の姿が實見ても見劣せぬものとしたら申し分の無い器量ですよ、取成し振舞も亦あれ位なのを理想的の女と見てよいでせう。

まめだちていと……匂宮は本氣になつて妬ましく、竝大抵の女に心を動かさうともしない薫がこれ程深く思つてゐるものを、好い加減の女ではあるまいと。

人をすゝめ……薫を唆かして、匂宮自身は氣儘な振舞も出來ぬ御身分のえらさを厭になる位、宇治の姫君を見られぬのが氣懸りだと。

よしなく……それも入らぬ事でせうよ、片時も現世に執着を殘すまいと思ふ仔細ある身として、私は厭はしきまで、心もとなしと思したれば、(第八)をかしくて、(第九)「いでや、よしなくぞ侍る。暫し世の中に心とゞめじと、思ひ給ふるやうある身にて、なほざり事もつゝましう侍るを、もし心ながら叶はぬ心つきそめなば、おほきに思ふに違ふべき事なむ侍るべき」と聞え給へば、「いで、あなさか〳〵し。例のおどろ〳〵しき聖詞、見果てゝしがな」とて笑ひ給ふ。心のうちには、かの舊人のほのめかしゝ筋などの、いとゞうちそへて、驚かされて、物あはれなるに、をかしと見る事も、目やすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。

十月になりて、五六日の程に、宇治へまうで給ふ。「網代をこそこの頃は御覽せめ」と、聞ゆる人々あれど、「何かは、その蜉蝣にあらそふ身にて、網代にも寄らむ」と、そぎ捨て給ひて、例の忍びて出で立ち給ふ。輕らかに網代車にて、縑の直衣指貫さし縫はせて、殊更び著給へり。宮待ち喜び給ひて、所につけたる御饗應など、をかしうしなし給ふ。暮れぬれば、大殿油近くて、前々見さし給へる文どもの深きなど、阿

一寸したすさび事すら遠慮されますのに、もし我ながら抑へかねるやうな戀心でも萌し初めたら。

例のおどろ〳〵しき……いつもの仰山らしいお說法も、結局どんな事になりますか拜見したいものですねえ。

かの舊人の……あの辨が一寸話した柏木の祕密の事など、元々疑を抱いてゐた處に一層心を動かされてをかしと見る……女に關した事などは、風情ある樣だと見ても惡くない女だとこそ……網代は秋の末から冬の物ゆゑにいふ。

何かは……何のまあ、蜉蝣にも劣らぬ果敢ない身で氷魚を取る網代見物でもなからう。

そぎ捨て給ひて——よしになされて。

緣——堅織の義、薄く堅く織つた絹。

殊更び——わざと麥を褒して。

宮——八宮。

前々……先般來讀みかけていらつしやる色々の經文などの深い意味などを、阿闍梨をも山からお招き申して義理など質問なさる。

ありしのゝめ……薰は先日の曉方に姫君を隙見した時の事が思出されて、琴の音といふ話の緣を作つて。

闇梨も請じ おろして、義などいはせ給ふ。うちもまどろまず、河風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音、水の響など、あはれも過ぎて物怖ろしく心ぼそき所の樣なり。明け方近くなりぬらむと思ふ程に、ありしのゝめ思ひ出でられて、琴の音のあはれなる言のついで作り出でて、「さきの度、霧に惑はされ侍りし曙に、いと珍しき物の音、ひと聲承はりし殘なむ、なか〳〵にいとゞかしう、飽かず思ひ給へらるる」など聞え給ふ。「色をも香をも思ひ捨てゝし後、昔聞きし事も皆忘れてなむ」と宣へど、人召して琴取りよせて、「いとつきなくなりにたりや。しるべする物の音につけてなむ、思ひ出でらるべかりける」とて、客人にそゝのかし給ふ。取りて調べ給ふ。「更にほのかに聞き侍りしおなじ物とも、思ひ給へられざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ひ給へしか」とて、心解けても掻き立て給はず。「いで、あなさがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、いかでか此處までは傳はりこむ。あるまじき御事なり」とて、琴かき鳴らし給へる、いとあ

いと珍しき物の音——誠にお上手な姫君の琵琶の音を。

なか〳〵にいと……生中少しばかり聞いたので猶更氣がかりで物足らぬ感が致します。

色をも香をも——世の中の樂も情趣も。

昔聞きし事——昔聞きかじつた琴の彈き方。

いとつきなく……琴などを彈く事も不似合な身になつてしまひましたよ、合奏して下さる樂器に附いて彈いたら思ひ出せませう。

客人に……薰に合奏をお勸めになる。

更にほのかに……先夜姫君達の彈かれた時のと同じ琵琶とも思はれぬ位私が彈くと音が出ません、實は琵琶がよいから姫君のはよく聞えるのだと思つて居りましたが矢張お手がよかつたのですな。琴はこは琵琶をさす。

いであな……まあお口の過ぎる、そんなにお耳にとまる程の彈き方は何で私共の處までは傳はりませう、とんでもない事です。

片へは……八宮の琴の冴えるのは半分は峯の松風が手傳つてさう面白く聞かせるのだらう。

いとたど〳〵しげ……八宮はひどく覺束ない不確かな風をされて。

心ばへある手——趣のある彈方。

はれに心すごし。片へは、峰の松風のもてはやすなるべし。いとたどしげにおぼめき給ひて、心ばへある手一つばかりにて止め給ひつ。「このわたりに、覺なくて折々ほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにやと聞く折侍れど、心とゞめてなどもあらで、久しうなりにけりや。心にまかせて、おの〳〵掻き鳴らすべかめるは、河浪ばかりやうち合はすらむ。論なう、物の用にすばかりの拍子なども、とまらじとなむ覺え侍る」とて、「いで掻き鳴らし給へ」と、彼方に聞え給へど、「思ひたどしげにおぼめき給ひて、心ばへある手一つばかりにて止め給ひつ。「このわたりに、覺なくて折々ほのめく箏の琴の音こそ、心得たるにやと聞く折侍れど、心とゞめてなどもあらで、久しうなりにけりや。心にまかせて、おの〳〵掻き鳴らすべかめるは、河浪ばかりやうち合はすらむ。論なう、物の用にすばかりの拍子なども、とまらじとなむ覺え侍る」とて、「いで掻き鳴らし給へ」と、彼方に聞え給へど、「思ひ寄らざりし獨ごとを、聞き給ひけむだにあるものを、いと片はならむ」と引き入りつゝ、皆聽き給はず。度々そゝのかし聞え給へど、とかく聞えすまひて止み給ひぬめれば、いと口惜しう覺ゆ。その序にも、かく怪しう世づかぬ思ひやりにて過す有樣どもの、思の外なることなど、恥かしう思いたり。「人にだにいかで知らせじと、はぐくみ過せど、今日明日とも知らぬ身の殘少なさに、さすがに行末とほき人は落ちあふれてさすらへむことゝ、これのみこそ、げに世を離れむ際の絆な

このわたりに……この山荘で思はぬ時に折々仄かに弾く娘達の琴は相當修練が積んだかと思ふ時もありますが、大して氣にも留めないで久しく過して居りますよ。

河浪ばかりや……宇治川の浪の音が調子を合せてくれるばかりで他に相手してくれる者も無いやうです、勿論物の役に立つ程のしらべなども出來てはゐまいと存じます。

彼方に―姫君達に。

思ひ寄らざりし……獨り慰みに弾いてゐた琴を思ひもよらず薫がお聞になつたのさへ随分恥かしいのに、こゝで又弾くのは誠に工合わるい事でせうと引込んで。

聞えすまひて―御辭退して。

その序にも……さうした機會につけても、八宮はこんなに姫君達を愛な風に世間離れした山家育ちのやうに人に思はせて暮す有樣が不本意な事だなどと極り悪く思召す。

人にだに……誰にも娘達の事をどうか知らせまいと思つて。

さすがに行末……まだ生先の長い娘達は或は零落してさまよひ歩きさうな事で、これのみが實に臨終の際の障りで御座います。

わざとの御後見だち……私は姫君達の爲に特別の世話役めいた關係（即ち夫）といふ風には出來ずとも、親しいものに思つて戴きたいと存じます。

一言も……一言たりともこの通り口に出して申上げた事を。

かの老人―薫はあの辨を。

姫君の……辨についての作者の説明。

故權大納言の君―柏木。

世と共に―當佳不顧に。

げによその人の……ほんに他人の身の上の事件として聞いてすら。

年頃覺束なく……年來氣に懸つてそのいかなりけむ事の……どうした事件の由來かしらと。

覺えぬ序に―思はぬ機會に。

さてもかく……それにしても貴女のやうなその當時の事情（柏木と女三宮との祕密）を知つてゐる人もまだ生き殘つて居られるので、私は意外にも恥かしくも感ずる事柄だが、まだ貴女の外にもこの事を知つて尊ぶる者があるでせうか。

小侍從―女三宮の侍女、柏木との間に手引した女。

はなちて―除いて。

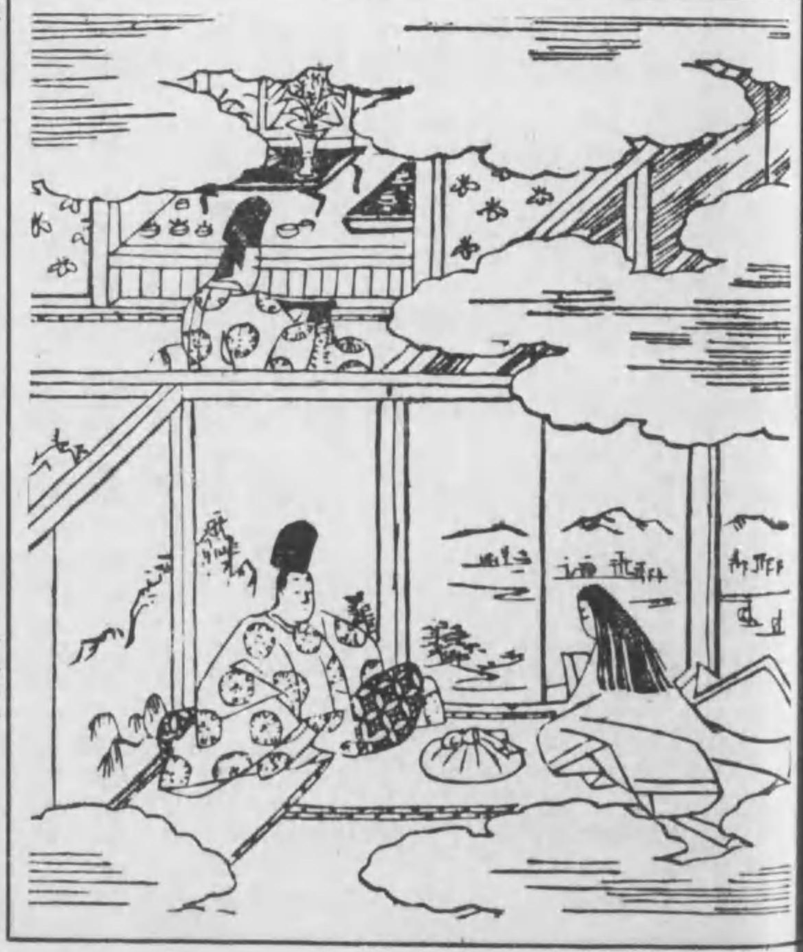
異人に……他人には話しません。

かの御薗に……柏木樣のお側にお仕へ申して居りましたので。

物の氣色―事の樣子。即ち女三宮と

りけれ」と、うち語らひ給へば、心苦しう見奉り給ふ。「薫わざとの御後見だち、はか〳〵しき筋には侍らずとも、疎々しからず思し召されむとなむ思う給ふる。暫しも永らへ侍らむ命の程は、一言もかくうち出で聞えさせてむ樣を、違へ侍るまじくなむ」など申し給へば、「八宮いと嬉しきこと、思し宣ふ。

さて曉方、宮の御行し給ふほどに、かの老人召し出でて會ひ給へり。姫君の御後見にて侍はせ給ふ、辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬ程なれど、みやびかに故あるけはひして、物など聞ゆ。故權大納言の君の、世と共に物を思ひつゝ、病づきはかなくなり給ひにし有樣を聞え出でて、「泣くこと限なし。」げによその人の上と聞かむだになりけむ事のはじめにかと、佛にもこの事を定かに知らせ給へ、との み念じつる驗にや、かく夢のやうにあはれなる昔語りを、覺えぬ序に聞きつけつらむと思すに、涙とゞめ難かりけり。「薫さてもかくその世



柏木との秘密をいふ。

御心より餘りて……柏木樣が御思案に餘つて心痛なされた折々、只私と小侍從と二人の手でたまの御手紙の往復も御座いました。かたはら痛ければ—その邊の立入つた事まで申上げるのは苦々しいゆゑ。

今はのとぢめに……柏木樣が御臨終の時になられて私に少しばかり御遺言がありましたのを、こんな賤しい身では勿體なくて始終氣に懸り、どうして貴方のお耳に入れたものだらうかと。

はか〳〵しからぬ……疊東ない念佛や誦經の序にも佛樣にお願ひしましたのを。

佛は世に……今目的が達せられたのでこれも佛樣のお蔭だ、矢張佛樣は世にいらつしやるものだと。

御覽ぜさすべき……お目にかけねばならぬ物も御座います。

今は何かは……今となつてはどうしようぞ、柏木樣から託された品は燒いて捨てよう、こんなに朝夕の命すら定かでない身で跡に殘して死にでもしたら、方々に散らばつて人目につく事にもならうかと。

この宮わたり……然し又貴方がこの山莊へも時々入らつしやるのをお見かけ申すやうになりましたので少し當が出來て、或はこんな直接御面談の機會もあらうかと辛抱する張合が出まして今まで保管して居りました、全くこれは前世からの因緣事で御座いませう。

空しう……柏木樣の亡くなられた曉に私の母はすぐ病氣になつて。

藤衣も……喪服も御主人の分と母の分と二重に着て。

年頃よからぬ……年來感服しない男で私に懸想してゐたのが、私をだまして九州の果まで連れて參りましたので。

京の事さへ……都の消息さへ打絶えて。

その人も—その男も。

あらぬ世の……私は全く違つた世界のやうな氣がしつゝも上京しましたところ。

この宮は……八宮は父方の親戚になつてゐて。辨の父左中辨は八宮の北方の母方の叔父に當る。

今はかう……今ではこの通り人中に出て寒公などすべき年でも御座いませんが。

冷泉院の女御殿—弘徽殿女御。柏木の妹。

昔聞き馴れ……何かと以前お噂も聞馴れて居りましたので、そちらへの心知りたる人も殘り給へりけるを、珍かにも恥かしうも覺ゆる事の筋に、獨かくいひ傳ふる類や又もあらむ。年頃かけても聞き及ばざりけるを」と宣へば、小侍從と辨とをはなちて、また知る人侍らじ。一言にてもまた異人にうちまねび侍らず。かく物はかなく數ならぬ身の程に侍れど、夜晝かの御蔭につき奉りて侍りしかば、自ら物の氣色をも見奉りそめしに、御心より餘りて思しける時々、只二人の中になむ、たまさかにも御消息の通ひも侍りし。かたはら痛ければ、委しくいと後めたく思ひ給ふれど、この宮わたりにも、時々ほのめかせ給ふを、待ち出で奉りてしかば、少し賴もしく、かゝる折もやと念じ侍りつる力出でまうで來てなむ。更にこれはこの世の事にも侍らじ」と、泣く〳〵いとこまかに、生まれ給ひける程のことも、よく覺えつゝ聞ゆ。「空しうなり給ひし騷に、母に侍りし人はやがて病づきて、程も經ずかくれ侍りにしかば、いとゞ思ひ給へ沈み、藤衣もたち重ね、悲しき事どもを思ひ給へし程に、年頃よからぬ人の心をつけたりけるが、人を謀りごちて、西の海の果まで取りもてまかりにしかば、京の事さへ跡絶えて、その人も彼處にてうせ侍りにし後、十年餘りにてなむ、あらぬ世の心地してまかり上りたりしを、この宮は父方につけて、重より參りかよふ故侍りしかば、今はかういとゞ世にまじらふべき樣にも侍らぬを、冷泉院の女御殿の御方などこそは、昔聞き馴れ奉りしわたりにて、參り寄るべく侍りしかど、はしたなく覺え侍りて、えさし出で侍らで、み山隱れの朽木になりて侍るなり。小侍從はいつかうせ侍りにけむ。そのかみの若盛見侍りし人は、數少なくなり侍りにけ

便つて行くべきで御座いましたが。
えさし出で侍らで―よう御奉公にも
出かねて。
み山隠れの……かうして宇治の山里
に老い朽ちる身となりました。
そのかみの若盛……昔の若盛を知つ
てをりました人はいくらも生き残
つてをらぬ老年時代に。
流石にめぐらひ侍れ―矢張碌々とし
て生きて居ります。
五つ六つばかり……私が五六歳にな
つた時分の事だつたらうか。
かゝる對面……かうして貴女に面會
しなかつたら實の父をも知らずに
罪障深い身で終る處でしたわい。
反故―文袋。
御前にて失はせ給へ―貴女のお手で
處分して無くなして下さいまし。
賜はせたりしかば―柏木様が私にお
渡し下されましたので。
定かに……確に手渡ししようと存じ
ましたにその儘遂に永の別となつ
てしまつたのも、私情からばかり
でなく、御主人の付託を遂げぬ事
を悲しく存じます。
つれなくて……薫は何氣なくその文
袋をお取隠しなされた。
かやうの舊人……辨のやうな老人は
無駄話にでも、珍しい事件の例と
して女三宮と柏木との祕密をしや
べりはせぬかと。
散らさぬよしを……他言しなかつた
旨を誓つたので、或はさうかと。
昨日は……昨日は公務も暇でしたが
今日は……禁中のお物忌も濟んだでせ
うから出仕せねばなりません。
院の女一の宮……冷泉院の第一皇女
樣の御病氣お見舞にも。
山の蔭も……この侘しい山莊も明る
くなつたやうな氣が致します。
唐の浮線綾―舶來である織紋の綠を
細き組して―細い組紐を以て。
かの御名の……柏木のお名前で封緘
がしてある。
返事―女三宮からの返事。
かの御手にて―柏木の筆跡で。
病は重く……私の病は重態で愈最期
となりました故、二度ともう一言
でも文通はむづかしくなりました
ので懸しさは猶更募りました、お
妻も尼法師と變つていらつしやる
のが思へば色々に悲しい、といふ
やうな趣を。以下手紙の内容。
つぶ〳〵と……ぽつ〳〵と筆跡も變
な鳥の足跡のやうに亂れて。
目の前に……眼前にすぐこの世を捨
てる貴女よりも、あの世へ去つて
全く貴女とお別れする私の魂が悲
しい事です。

る末の世に、多くの人におくる、命を悲しく思う給へてこそ、流石に
めぐらひ侍れ」など聞ゆる程に、例の明けはてぬ。「薫」よし、さらばこの昔
物語は盡きすべうなむあらぬ。また人聞かぬ心安き所にて聞えむ。小
侍從といひし人、ほのかに覺ゆるは、五つ六つばかりになりし程にや、
俄に胸を病みて失せにきとなむ聞く。かゝる對面なくば、罪重き身に
て過ぎぬべかりけること」など宣ふ。さゝやかにおし巻き合はせたる
反故どもの黴臭きを、袋に縫ひ入れたる、取り出でて奉る。「御前」にて
失はせ給へ。「柏木」われ猶生くべくもあらずなりにたり』と宣はせて、この
御文を取り集めて賜はせたりしかば、小侍從にまた逢ひ見侍らむ序
に、定かに傳へ參らせむと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも、私
事にはあらず、悲しうなむ思ひ給ふる」と聞ゆ。つれなくて、これは隱
い給ひつ。かやうの舊人は問はず語りにや、あやしき事の例にいひ出
づらむと、苦しく思せど、返す〳〵も散らさぬよしを誓ひつるを、さ
もやと又思ひ亂れ給ふ。御粥、强飯など「薫」參り給ふ。昨日は暇の日なり
しを、今日は内裏の御物忌もあきぬらむ、院の女一の宮惱み給ふ御訪
らひにも、必ず參るべければ、かた〴〵暇なく侍るを、又この頃過し
て、山の紅葉散らぬさきに參るべきよし、聞え給ふ。「八宮」かくしば〳〵立
ち寄らせ給ふ光に、山の蔭もすこし物あきらむる心地してなむ」など
喜び聞え給ふ。
「薫」歸り給ひて、まづこの袋を見給へば、唐の浮線綾を縫ひて、「上」といふ
文字をうへに書きたり。細き組して口の方をゆひたるに、かの御名の
封付きたり。あくるも怖ろしう覺え給ふ。色々の紙にて、たまさかに
通ひける御文の返事、五つ六つぞある。さてはかの御手にて、病は重く
限になりたるに、又ほのかにも聞えむこと難くなりぬるを、ゆかしう
思ふことは添ひにたり、御形も變りておはしますらむが、樣々悲しき
こと、陸奥紙五六枚に、つぶ〳〵と怪しき鳥の跡のやうに書きて、
「柏木」目の前にこの世をそむく君よりも
よそにわかる、魂ぞ悲しき」

珍しく聞き侍る……珍しくも生まれたと聞く子供（薫）の身の上も、表面源氏のお子として養育される事ゆゑ氣遣ひな點はありませんが。

命あらば……人知れず女三宮との間に儲けた薫を、私の命があつたら餘處ながらでも我が子と見て慰まうものをとの意。こぼれ種の岩根の松を薫に譬へた。生ひすゑは生ひ先。

蟲の住處になりて—ひどく蝕ばんでしまつて。

跡は—筆跡は。

げに落ち散り……ほんにこれが世間へ散らばつたら大變だつたらうと兩親の爲に不安にも氣の毒な次第である。

心一つに……自分の心の内だけでひどく氣苦勞がふえて。

宮の御前—女三宮の御前。

恥らひて—薫を見て女三宮が極りわるがつて。

何かは知りにけりとも……何の、兩親の祕密を自分が知つたと母君女三宮に感づかれようぞ、どこまでも知らぬ振をして居らうなどと薫は自分の心一つに疊み込んで、樣樣に思案して居られた。

また端に、（柏木）「珍しく聞き侍る一葉の程も、後めたう思う給ふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人知れず
いはねにとめし松の生ひすゑ」

書きさしたるやうに、いと亂りがはしくて、「侍從の君に」と、上には書きつけたり。紙魚（しみ）といふ蟲の住處になりて、古めきたる黴臭さながら跡は消えず、只今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの、こま〴〵と定かなるを見給ふに、げに落ち散りたらましかばと、後めたういとほしき事どもなり。かゝる事世に又あらむやと、心一つにいとゞ物思はしさ添ひて、内裏へ參らむと思しつるも、え出で立たれず。宮の御前に參り給へれば、いと何心もなく、若やかなる樣し給ひて經讀み給ふを、恥らひてもて隱し給へり。何かは、知りにけりとも知られ奉らむ、などゞ心に籠めて、よろづに思ひ居給へり。

兵部卿の宮—匂宮。

ふるき御願……久しい前からの御願であつたけれど、その願ほどきを思立ちもなさらないで。

宇治のわたり……今度の御參詣は途中宇治の邊での御一泊が樂みで主として思立たれたものであらう。

怨めしと……「世をうぢ山」と詠んで怨めしい處といひなした喜撰法師の如き人もあるのに、その宇治といふ名が一概に懷しく匂宮に感ぜられるのも。

仕うまつり給ふ—匂宮御參詣の御供に隨行なされた。

世に殘る人少なく—あとに殘る人は少い位に。

六條院より……源氏から讓られて夕霧の領して居られる地所は宇治河の向岸に。

御設—匂宮一行を款待する支度。

大臣も……夕霧も匂宮の御歸途のお出迎の爲にこの宇治の所領まで行

椎本

この卷は薫二十三歳の二月から二十四歳の夏までの事。匂宮は二月の末初瀬に詣でた。歸途宇治なる夕霧の山莊に立寄る目的で、薫も同行した。宇治では音樂など催したが、八ノ宮の山莊は川一つ向なのでよく聞えた。翌朝薫は八ノ宮を訪うた。匂宮は秋の末紅葉見に託して八ノ宮に近づかせる。その後も匂宮から屢消息があつたが、大姫は浮いた心は無く、返事はいつも妹姫にさせた。大姫は二十五、妹姫は二十三、父宮は一人でも早く緣付けて安心したいと思つてゐる。匂宮は秋の末紅葉見に託して八ノ宮に近づかうと思つた。八ノ宮はめつきり弱つて心細さを感じ、姫君達に亡き後の心得など話したが、阿闍梨の寺に入つて遂に亡くなつた。薫は萬事の世話に力を盡してゐる中、大姫に對する心が次第に切ないものになつてゆく。

卷の名は薫の歌、「立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本空しき床になりにけるかな」に由る。

二月の二十日のほどに、兵部卿の宮、初瀬にまうで給ふ。ふるき御願なりけれど、思しも立たで年頃になりにけるを、宇治のわたりの御中宿のゆかしさに、多くは催され給へるなるべし。怨めしといふ人もあ

くお考であつたけれど。
俄なる御物忌―不時の觸穢などの出來て急に物忌する事がある。
申したれば―陰陽師が申上げた故。
え參らぬよしの……參上出來ませぬとのお詫を申越された。
なますさまじと―夕霧の不參を何となく不滿に。
宰相の中將―薫。
なか〳〵心安くて―夕霧に來られるよりも却て氣樂で。
かのわたりの……八宮の姫君達の御樣子も薫が聞かせてくれるだらうと、匂宮は滿足に思召された。
大臣をば―匂宮は夕霧を。
事々しきものに―煙たいものに。
御子の君達―夕霧の子息達。
帝后も……匂宮は御父陛下も御母明石中宮も格別御寵愛の方だから、世間一般の信望も非常に厚く、まして源氏の一門では夕霧始めその他の人も、皆内々の主君のやうに思つて奉仕して居られる。
處につけたる……場處柄相應の御馳走の支度など面白く調へて。
彈碁―中高の盤の兩端に碁石を置いて、指ではじいて相手の石に當て勝負を爭ふ遊戯。
此處にやすらはむの御心―この別莊でゆつくりしようとのお積り。

りける里の名の、なべて睦ましう思さるゝ故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人など更にもいはず、世に殘る人少なく仕うまつれり。六條院より傳はりて、右の大殿領り給ふ處は、河よりをちに、いと廣く面白くてあるに、御設せさせ給へり。大臣も、かへさの御迎に參り給ふべく思したるを、俄なる御物忌の、おもく愼み給ふべく申したれば、え參らぬよしの畏まり申し給へり。宮なますさまじと思したるに、宰相の中將、今日の御迎に參りあひ給へるに、なかなか心安くて、かのわたりの氣色も傳へ寄らむと、御心ゆきぬ。大臣をば、うち解けて見えにくく、事々しきものに思ひ聞え給へり。御子の君達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭の少將、藏人の兵衞佐など、皆さぶらひ給ふ。帝、后も、心殊に思ひ聞え給へる宮なれば、大方の御覺もいと限なく、まいて六條院の御方樣は、つぎ〳〵の人も、みな私の君に心よせ仕うまつり給ふ。處につけたる御しつらひなど、をかしうしなして、碁、雙六、彈碁の盤どもなど取り出でて、心々にすさび暮し給ひ

水の音も……河の音も音樂の邪魔とはならず却てそれを引立てゝ、一層音色が澄むやうな氣がして。
かの聖の宮……八宮の山莊でも、此處からは舟ですぐ渡られる位の距離であるから。
響を―匂宮の方の音樂の響を。
吹き徹し―音を十分に出す意。
六條院―源氏。
事々しき氣の……態と物々しい樣子のまじつてゐるのは。
致仕の大臣―元の頭中將。これは薫の笛の音であらう、薫は實は致仕大臣の孫に當る。
あるにもあらで……侘しい生活で生き甲斐もなく暮して來たこの年月の、それにしてもまあ隨分積つたのが仕方もない事だなあ。
あたらしく―惜しく。
ひき籠めては……埋れさせてしまひたくはないものだと。
宰相の君の……どうせ緣付けるなら薫を婿にして見たいが薫はさうも思つてゐないらしい、まして當世風の輕薄才子を何で婿にされようかいなど、と思ひ煩つて茫然としていらつしやる八宮の方では。
春の夜も―面白い春の夜でさへも。
心やり給へる……音樂などに氣晴しをしていらつしやる旅寢の匂宮の

つ。宮はならひ給はぬ御ありきに、惱ましく思されて、此處にやすらはむの御心も深ければ、うち休み給ひて、夕つ方ぞ御琴など召して遊び給ふ。例のかう世離れたる所は、水の音ももてはやし、物の音澄みまさる心地して、かの聖の宮にも、只さし渡る程なれば、追風に吹きくる響を聞き給ふに、昔の事思し出でられて、「八宮笛をいとをかしくも吹き徹したなるかな。誰ならむ。昔の六條院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに、愛敬づきたる音にこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて事事しき氣の添ひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たゝなれ」など、獨言ちおはす。「八宮あはれに久しうなりにけりや、かやうの遊などもせで。あるにもあらで過し來にける年月の、流石に多く數へらるゝこそかひなけれ」など宣ふついでにも、姫君達の御有樣あたらしく、かかる山懷にひき籠めては止まずもがなと思し續けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひ寄るまじかゝめり。まいて今樣の心淺からむ人をば、いかでかはなど思し亂れて、

方では。
飽かず歸らむことを—不本意ながら
御歸京なさらうことを。
水影—水に映ずる影。
疎ならずをかしきを—一方ならず風情があるのを。
見ならひ給はぬ人—見慣れぬ匂宮。
宰相は……薫はこんなよい機會を逸せず八宮の山莊を音づれようと思召すが。
人目をよきて—人目を避けて。
輕らかにやと……餘り輕率だらうか知らんと躊躇して居られる間に。
かれより—八宮から。
山風に……山風に送られつゝ霞の間を洩れて貴方の笛の音は聞えて來ますが、宇治川の白浪が間を隔ててゐるやうに私に隔を置いて、お便も下さらぬのがお恨です。
草にいとをかしう—略假字でひどく面白く。
宮思すあたりと……匂宮は豫て思を懸けてゐる八宮の方からのお文と見て取られたので。
我—匂宮。
をちこちの……表面の意は明白、裏面は、現在貴方と私とは隔てゝ居ても矢張これからは他意なく親んで戴きたいものですとの意。
中將は……薫は八宮を訪問なさる。

徒然となが め給ふ所は、春の夜もいと明し難きを、心やり給へる旅寢の宿は、酔のまぎれにいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らむことを、宮は思す。はる〴〵と霞み渡れる空に、散る櫻あれば今ひらけ初むるなど、いろ〳〵見渡さるゝに、河そひ柳のおきふし靡く水影など、疎ならずをかしきを、見ならひ給はぬ人は、いと珍しく見捨て難しと思さる。宰相は、かゝるたよりを過さず、かの宮に詣でばやと思せど、數多の人目をよきて、一人漕ぎ出で給はむ船わたりの程も、輕らかにやと思ひやすらひ給ふ程に、かれより御文あり。

「山風にかすみ吹きとく聲はあれど
へだてゝ見ゆるをちの白波」

草にいとをかしう書き給へり。宮、思すあたりと見給へば、いとをかしう思いて、「この御返りは我せむ」とて、

「をちこちのみぎはに波はへだつとも
なほ吹きかよへ宇治の河風」

さしやり給ふ程—舟に棹さして漕ぎやる間。
酣酔樂—樂曲の名、今は傳はらぬ。
水に臨みたる……八宮の山莊は河に臨んだ廊があつて、廊から河に降りるやうに造つた橋の樣子など、さうした方面には誠に面白く風情あるお屋敷であるから。
こゝはまた樣異に—この山莊はまた夕霧の別莊とは樣子が違つて。
網代屏風—檜板又は竹などを網代に組んで枠に取付けた屏風。
事そぎて—簡略にして。
さる心して……薫等を迎へるといふ用意をして掃除をし。
古への……音色など誠に類も無い古代からの樂器を。彈物はすべて絃による樂器をいふ。
壹越調—十二律の一にして宮音。
櫻人—催馬樂の曲名。櫻人、その船ちゞめ、島つ田を十町作れる、見て歸り來むや、そよや、明日歸り來むや、そよや。
あるじの宮—八宮。
心にも入れず—無造作に。
耳馴れぬ氣にや—聞き馴れぬ爲か。
處につけたる—田舍相應な。
よそに思ひやりし……豫て外部から想像してゐたよりは。
なま孫王めく——詰らぬ宮樣のお血

中將はまうで給ふ。遊に心入れたる君達さそひて、さしやり給ふ程、酣酔樂あそびて、水に臨みたる方にいとをかしう、故ある宮なれば、人々心して船よりおり給ふ。こゝはまた樣異に、山里びたる網代屏風などの、殊更に事そぎて、見所ある御しつらひを、さる心してかき拂ひ、いといたうしなし給へり。古への音などいと二なき彈物どもを、わざと設けたるやうにはあらで、つぎ〳〵彈き出で給ひて、壹越調のこゝろに、「櫻人」あそび給ふ。ある人々思ひ給へれど、箏の琴をぞ、心にもじの宮の御琴をかゝる序にと、入れず折々かき合はせ給ふ。耳馴れぬ氣にやあらむ、いと物深く面白しと、若き人々思ひしみたり。處につけたる饗應、いとをかしうし給ひて、よそに思ひやりし程よりは、なま孫王めく賤かしらぬ人あまた、王四位の古めきたるなど、かく人目見るべき折と、かねていとほしがり聞えけるにや、さるべき限參りあひて、瓶子執る人もきたなげならず、さる方に古めきて、よし〳〵しうもてなし給へり。客人たちは、御

筋みたいな。

王四位の……王族で四位の老人など。

かく人目見るべき……こんな風に八宮邸にお客でも見えたらと、平素からこの人々が人手の無いのをお氣の毒に思つてゐたものか。

瓶子執る―お酌をする。

さる方に……如何にもさうした身分の人々らしく古風で。

かの宮は……匂宮はまして手輕でない御身分を窮屈がつていらつしやるのに、せめてこんな氣樂な旅先ででもと、もう怀へきれずに。

をかしきして……可愛らしいのを使として、八宮へお上げになつた。

山櫻……櫻の花の咲き匂ふやうな美しい人の處に尋ねて來て、おなじ櫻の花を挿頭に手折りました。

野を睦ましみ―萬葉「春の野に竜つまむと來し我ぞ野を懐しみ一夜寝にける」の意。

御返りは……御返事は恥かしくてどうして上げられようぞなどと。

かゝる折の事―こんな風にお文を戴いた場合。

程の經るも……御返事の遲れるのも却て面白くない事と世間ではして居ります。

舊人―年老いた侍女達。

かざし折る……只挿頭の花を折る爲のみに貴方はこの山住の私の宿を素通りなさらないのでせう、餘り深い御志とも存ぜられませんとの意。

野をわきてしも―引歌未詳、河海抄に擧げたのは當らぬ。野を分けて特に私の宿をお尋ね下された譯でもありますまいとの意か。

うら〳〵じく―巧者に。

げに河風も……ほんに河風も匂宮の方と八宮の方と隔をせぬ如くに。

藤大納言仰言にて―紅梅が勅命で。

物騒がしくて―せはしなくて。

宮は又……匂宮は又然るべき機を見て再び來ようと思召す。

唐のも大和のも歌ども―唐歌即ち詩も和歌も。

思ふまゝにも……十分に意中を八宮へ通ずる事が出來ずにしまつた事を匂宮は物足らず思召して、薫の手引がなくてもその後は直接に手紙は始終おやりになる。

宮も―八宮も姫君達に仰しやる。

なほ聞え給へ……矢張返事をお上げなさい、然し特に色戀めいた詞は避けませう、生中氣苦勞の種にもなりませうからね、匂宮は浮氣なお方だから、かく〳〵の娘がゐるとお聞きになると只では置けぬお心で、お文を下さるのでせう。

姫君―姉姫、即ち大君。

女達の住ひ給ふらむ御有樣思ひやりつゝ、心盡す人もあるべし。かの宮は、まいてか安き程ならぬ御身をさへ、處せく思さるゝを、かゝる折にだにと忍びかね給ひて、面白き花の枝を折らせ給ひて、御供に侍ふ上童のをかしきして奉り給ふ。

「匂」山櫻にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな

「八宮」かざし折る花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬはるのたび人

野をわきてしも」と、いとをかしげに、らう〳〵じく書き給へり。げに河風も心分かぬ樣に、吹きかよふ物の音ども、面しろく遊び給ふ。御迎に藤大納言、仰言にて參り給へり。人々あまた參り集ひ、物騒がしくてきほひ歸り給ふ。若き人々、飽かず願みのみなむせられける。宮は、又さるべき序してと思す。

花盛にて、四方の霞もながめやる程の見所あるに、唐のも大和のも、歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。物騒がしくて、思ふまゝにもいひ遣らずなりにしを、飽かず宮は思して、しるべなくて御文は常にありけり。宮も「なほ聞え給へ。わざと懸想だちてももてなさじ。なか〳〵心ときめきにもなりぬべし。いと好き給へる御子なればゝかゝる人なむと聞き給ふが、なほもあらぬすさびなめり」と、そゝのかし給ふ時々、中の君ぞ聞え給ふ。姫君は、かやうの事、戯にももて離れ給へる御心深さなり。いつとなく心ぼそき御有樣に、春の徒然は、いとゞ暮し難くながめ給ふ。ねびまさり給ふ御樣容貌ども、いよ〳〵勝り、あらまほしくをかしきも、なか〳〵心苦しう、片ほにもおはせましかば、あたらしく惜しき方の思は、薄くやあらましなど、日暮思し

みだる。姉君は二十五、中の君二十二にぞなり給ひける。宮は重くつゝしみ給ふべき年なりけり。物心ぼそく思して、御行常よりもたゆみなくし給ふ。世に心とゞめ給はねば、出で立ち急ぎをのみ思せば、涼しき道にも赴き給ひぬべきを、只この御事どものいといとほしく、限なき御心強さなれど、必ず今はと見捨て給はむ御心は亂れなむと、見奉る人も推しはかり聞ゆるを、思す樣にはあらずとも、なのめにさてもえむなど、思ひ寄り聞ゆるあらば、知らず顏にて許してむ。一所世に住みつき給ふよすがあらば、それを見讓る方に慰め置くべきを、さまで深き心にたづね聞ゆる人もなし。稀々ははかなき便に、すき事聞えなどする人は、まだ若々しき人の心のすさびに、物詣の中宿、往來の程のなほざりごとに、氣色ばみかけて、流石にかく詠め給ふ有樣など推しはかり、悔らはしげにもてなすは、目醒ましうて、なげの答をだにせさせ給はず。三の宮ぞ、なほ見では止まじと思す御心深かりける。

いつとなく—いつといふ事もなく始終同じやうな。

なか〳〵心苦しう……却て苦痛の種で、いつそ不器量ででもあつたら埋木にしては惜しいといふやうな心配も薄からうものをなどと。

宮は重く……八宮は厄年であつた。

御行—佛前のお勤。

世に心……現世に執着をお持にならないから後生安樂の準備ばかりお考へになつてゐるので極樂淨土にも安心して往生出來さうだが、只姫君達の事が甚だ可愛さうで。

限なき御心强さ—非常な志の强さ。

必ず今はと……愈姫君達を殘して臨終となつたら、必ず平素のお悟も亂れようと。

思す樣には……理想通りではなくとも曲りなりにでも婿にして外聞悪くなく、あれならと我慢出來る程度の人で、眞實連添つて世話しようなどいふ者があつたら、不滿足ながらも見ぬ振で曳れてやらう。

以下八宮の心。

一所世に……姉妹何れか一人緣付かれる處があつたら殘る一人の世話を任せて安心しても死なうが。

さまで深き心に—それ程熱心に。

すき事聞えなど……懸想めいた事などいひ越す人は、まだ若い者の樣み半分で、物詣の途中の宿として泊る時や通り懸りのふざけ事にいひ寄つて。

流石にかく……八宮親子がかく物寂しく暮して居られる有樣を思つて安く見積るのは流石に八宮も癪にさはつて、姫君達に形式だけの返事すらおさせにならない。

三の宮ぞ……匂宮は矢張姫君を見ずには置かぬと思ふお心が强かつた、これもさうした前世の約束でででもおありになつた事か知らん。

宰相の中將—薫。

いとゞ匂まさり……從來より一層立派になられた御生活につけても。

いかなる事と……自分の素性について不審に思ひ續けてゐたこれまでよりも事情を知つて後は心苦しくて、實父柏木の亡くなられた當時の事情が推測されるので、柏木の罪障の輕減されるやうに。

かの老人をば—薫は例の辨の君を。

いちじるき樣ならず—人目に立つやうな風でなく。

字治にまうで……字治を訪問してその後大分日數が立つた事と薫は思出して又訪問なされた。

都には……都の内ではまだ秋らしい氣分も見えないのに。

音羽の山—字治にある。

さるべきにやおはしけむ。

宰相の中將、その秋中納言になり給ひぬ。いとゞ匂まさり給ふ世の營みに添へても、思すこと多かり。いかなる事と、いぶせく思ひ渡りし年頃よりも、心苦しうて、過ぎ給ひにけむいにしへ樣の思ひやらるゝに、罪輕くなり給ふばかり、行もせまほしくなむ。かの老人をば、あはれなるものに思ひ置きて、いちじるき樣ならず、とかく紛らはしつゝ、心寄せ訪らひ給ふ。宇治にまうでて久しうなりにけるをと、思ひ出でて參り給へり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入り立たぬ秋の氣色を、音羽の山ちかく風の音もいと冷やかに、槇の山邊もわづかに色づきて、猶たづね來たるに、をかしう珍しう覺ゆるを、宮はまいて、例よりも待ち喜び聞え給ひて、この度は心細げなる物語、いと多く申し給ふ。「なからむ後、この君達を、さるべきものゝ便にも訪らひ、思ひ捨てぬものに數まへ給へ」などおもむけつゝ聞え給へば、一言にても承はり置きてしかば、更に思ひ給へ怠るまじくなむ。世の中に心をとゞ

檜の山邊—宇治附近にある。
なからむ後……私の死後もこの娘達
を然るべき序にでも音づれて、お
見棄てなさらぬ人の中に數へて下
さいまし。
おもむけつゝ—取成して。
一言にても……言ても姫君達の事に
ついては一言でもお賴みのお言葉
を承つて居りましたから。
世の中に……現在の榮達に執着すま
いと引込主義で居る私の事とて、
萬事當てにもならぬ疊束ない未來
だけれど。
さる方にても……引込みなりにも生
きて居ります間は、變らぬ眞情を
姫君達にお目かけようと存じます。
御前の御遊……帝の御前の音樂のお
催に何候しあつた中で、斯道の名
手と見られる人達だけで銘々合奏
した音樂の儀式ばつたのよりも。
由ありと……風情ある方だと評判さ
れる女御更衣のお部屋々々で、それ
も各自内心では張合ひながら表
面の交情は美しくしてゐるやうだ
のに、夜更けて人も靜まつた頃人
の心を曉るやうに琴などを調べて
幽に洩れ聞えるその音など、面白
いのが多かつたものですよ。
女は甄びの……女は戀み事の相手に
ふさはしく、しかとした所のない
ものではあるが。
子の道の闇を……子ゆゑの闇に迷ふ
親心を考へて見ても、男の兒はひ
どくは親に心配させないやうです、
女の兒は運の限があつて、つまら
ぬ所に思切つて緣付けねばならぬ
にしても、矢張親の慾目からは可
愛さうな氣が致しませう。
大方の事につけて……世間話に託し
て八宮が仰しやるのは、成程さう
思召すのも尤と、お氣の毒に同情
せずにゐられぬ御心中である。
すべて誠に……一體私は前申上げま
したやうに裏心から現世の事を斷
念して居りますせゐか、自身では
本當の所深く體得した能も御座い
ませんが。
扉にめづる心こそ……音樂を聽く事
に夢中になる心持だけが、どうも
棄てかねるので御座います。
さかしう聖だつ—大層悟り込んだ。
迦葉—釋尊の第一の弟子。大樹緊那
羅經に、「大樹緊那羅於二佛前一彈二
瑠璃琴一、奏二八萬四千音樂一、迦葉尊
者忘二戒儀一、而起出」とある。
飽かず一部聞きし……管て少しばか
り聞いて像らず思つてゐた大君の
琴の音を。
疎々しからぬ……八宮は姫君達を薫
に馴染ませる手始めにとても思召
めじと、省き侍る身にて、何事も賴もしげなき生先の少なさになむ侍れど、さる方にてもめぐらひ侍らむかぎりは、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ、思ひ給ふる」など聞え給へば、（八宮ハ）いと嬉しとおぼいたり。夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心地するに、念誦いとあはれにし給ひて、昔物語し給ふ。「この頃の世はいかゞなりにたらむ。宮中などにて、かやうなる秋の月に、御前の御遊のをりに侍ひあひたる事々しきよりも、由ありと覺ある女御更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ふうはべの情を交すべかめるを、夜深き程の人の氣しめりぬるに、心やましくかい調べ、ほのかに綻び出でたる物の音など、聞きどころあるが多かりしかな。何事にも、女は甄びのつまにしつべく、物はかなきものから、人の心を動かす種はひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を亂さずやあらむ。女は限ありて、いふかひなき方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦しかるべき」など、大方の事につけて宣へる、いかゞ。さ思さゞらむと、心苦しく思ひやらるゝ御心のうちなり。（薫）「すべて、誠にしか思ひ給へ捨てたるけにや侍らむ、自らの事にては、いかにもいかにも深う思ひ知る方の侍らぬを、げにはかなき事なれど、聲にめづる心こそ背き難きこと侍りけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればにや、立ちて舞ひ侍りけむ」など聞えて、飽かず一聲聞きし御琴の音を、切にゆかしがり給へば、疎々しからぬ始にもとや思すらむ、御自らあなたに入り給ひて、切にそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞ、いとほのかに搔き鳴らして止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて、あはれなる空の氣色、處のさまに、わざとなき御遊の、心に入りてをかしう覺ゆれど、（姫君達ハ）うち解けてもいかでかは彈き合はせ給はむ。「おのづからかばかり馴らしそめつる殘は、世籠れるどちに讓り聞えてむ」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。
「我なくて草のいほりは荒れぬとも

すのか、御自分で姫君達のお居間にお入りなされて。

わざとなき御遊……態とらしからぬ姫君達の彈奏が、薫は心に沁みて面白く感ずるけれど。

おのづから……自然こゝまで雙方を近づけ馴れさせたからには、あとはお若い同士にお任せしませう。

我なくて……私が亡くなつてこの山莊は荒れ果てようとも、娘達の面倒を見て下さるといふ御一言は間違あるまいと信じて居ります。言に琴をかけた。

忍びかねて—こらへきれずに。

頃しき僻言—愚癡な繰言。

いかならむ……この山莊の荒れ果てることは永久にありませぬ、末長くお世話申さうと誓ひましたこの山莊での言葉は、いつの世に違背致しませう。

相撲—古昔朝廷の行事で毎年七月十六七日の間に諸國から召集めた供御人をして相撲はしめ、天子群臣と共に御覽遊ばされた。

公事ども……公務などの取込む時を過してまた參上致しませう。

こなた—姫君達のお居間をさす。

問はず語りの舊人—侍女辨の君。

殘多かる物語……過日まだ澤山語り殘した話などおさせになる。

透影—物に透いて見える影。

君達—姫君達。

世の常の……薫は世間普通の色戀めいた態度ではなく。

さるべき御答など……姫君達も安心して相當の御返答などなさる。

三の宮は……匂宮は大分姫君に執心だがなあ、と薫は心中に思出しつつ、それにしても自分は我ながら人と違つた氣持だわい、あれ程八宮が自ら進んで姫君を許されたにさう急いでどうしようといふ氣にもならない、然し全く無關心に、姫君を娶る事は思ひも寄らぬ事などとは流石に思はない。

かやうにて—こんな風な關係で。

宿世ことにて……姫君が自分に宿緣が無くて他人の妻にでもなられたら流石に殘念に違なく、もう何だか姫君を自分の物にしてゐる感じがした。

殘なげに—餘命幾許もないやうに。

暫がしき程……朝廷の公務の忙しい時期を過して又來ようと思召す。

兵部卿の宮—匂宮。

紅葉見に—宇治へ紅葉見物に。

女はまめやかに……宇治の姫君は匂宮が眞實自分を思つて下さるのだとも思召さぬので、さう面倒ともせず當らず障らずにあしらつて、

このひとことは枯れじとぞ思ふ

かゝる對面も、この度や限ならむと、物心ぼそきに、忍びかねて、頽し

き僻言多くもなりぬるかな」とて、うち泣き給ふ。まらうど、

「いかならむ世にか枯れせむ長きよの

ちぎりむすべる草のいほりは

相撲など、公事どもまぎれ侍る頃過ぎて侍はむ」など聞え給ふ。こなたにて、かの問はず語りの舊人召し出でて、殘多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は限なくさし入りて、透影なまめかしきに、君達も奥まりておはす。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝ、物し給へば、さるべき御答など聞え給ふ。三の宮はいとゆかしう思いたるものをと、心のうちには思ひ出でつゝ、我が心ながら猶人には異なりかし、さばかり御心もてゆるい給ふ事の、さしも急がれぬよ、もて離れてはたあるまじき事とは、流石に覺えず、かやうにて物をも聞えかはし、折節の花紅葉につけて、哀をも情をも通はすに、憎からず物し給ふあたりなれば、宿世ことにて、外樣にもなり給はむは、さすがに口惜しかるべく、領じたる心地しけり。（薫八）まだ夜深きほどに歸り給ひぬ。（八宮ノ）心ぼそく殘なげに思いたりし御氣色を、思ひ出で聞え給ひつゝ、騷がしき程過してまうでむと思す。兵部卿の宮も、この秋の程に紅葉見におはしまさむと、さるべき序を思しめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女は、まめやかに思すらむとも思ひ給はねば、煩はしくもあらで、はかなき樣にもてなしつゝ、折々に聞えかはし給ふ。

秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心ぼそく覺え給ひければ、例の靜なる所にて、念佛をも紛なくせむと思して、君達にもさるべき事ども聞え給ふ。「世の事として、つひの別を遁れぬ業なゝめれど、思ひ慰む方ありてこそ、悲しさをも醒ますものなゝめれ。また見讓る人もなく、心細げなる御有樣どもを、うち捨てゝむがいみじきこと。されども、さばかりの事に妨げられて、長き世の闇にさへ惑はむが益なきを、かつ見奉る程だに思ひ捨つる世を、去りなむうしろの事知るべき事に

時々は御返事をなさる。

宮は―八宮は。

例の静なる所―阿闍梨の寺をいふ。

世の事として……世の掟として人は死別を免れぬ譯ですが、心に安んずる點があつてこそ。

また見譲る人もなく―他に貴女方を託すべき人もなく。

されどもさばかりの……然しそれ位の恩愛に妨げられて來世は佛果を得ずに長く惡趣に迷はうのがつまらないものを。

かつ見奉る……傍に一緒にゐる間ですら思捨てたこの世だのに、死んで後の事まで構ふべきではないけれど、貴女方は自分一身の爲ばかりでなく、亡き母君の不名譽になるやうな輕率な考など出してはいけません。

おぼろげの……しかとした相手でなくては、人の言葉にうかと靡いてこの山里を離れたりなさるな。

契異なる……變つた運命に生れついた身と諦めて此處で生涯を送らうと覺悟をなさい、私も一途に覺悟をきめてゐるので別段何ともなく永年暮して來ましたよ、まして女はさういふ風に辛抱して引籠り、際立つて嫁な世間の非難を受けぬやうにするがよいでせう。

はあらねど、我が身一つにあらず、過ぎ給ひにし御面伏に、輕々しき心ども使ひ給ふな。おぼろげの よすがならで、人の言にうち靡き、この山里をあくがれ給ふな。只かう人に違ひたる契異なる身と思しなして、こゝに世を盡してむと思ひとり給へ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女はさる 方に堪へ籠りて、著くいとほしげなる餘所のもどきを負はざらむなむよかるべき」など宣ふ。ともかくも、身のならむやうまでは、思しも流されず、只いかにしてか、後れ奉りては世に片時もながらふべきと思すに、かく心細きさまの御あらまし言に、いふ方なき御心惑どもになむ。心のうちこそ思ひ捨て給ひつらめど、あけくれ御傍にならはい給ひて、俄に別れ給はむはつらき御心ならねど、げに怨めしかるべき御有樣になむはありける。明日入り給はむとての日は、例ならず此方彼方、たゝずみありき給ひて見給ふ。いと物はかなく、かりそめの宿にて過い給ひける御住居の有樣を、亡からむ後、いかにしてかは若き人の堪へ籠り

ともかくも……姫君達はどうなる事やら我が身の行末までは考へ及ぶ餘裕もなく只どうしてまあ、父宮に死別れては暫くも生きてゐられようと思へば。

御あらまし言に―父宮の豫めのお言葉に。

心のうちにこそ……八宮は心中でこそ姫君達の事も思切つて居られたらうが、朝夕お側に置き慣らして今急に別れようとなさるのは無情なお心からではないが、雙方にとつて誠に怨めしい事情であつた。

明日入り給はむ……明日いよ〳〵山寺へお籠りなさらうといふ日は平素と違つて。

若き人の―若い姫君達が。

大人びたる人々―年とつた召使達。

うしろ安く……私が後顧の憂のないやうに姫君達に仕へておくれ。

何事も……萬事につけ、元々手輕で世間の噂にも上らぬ身分の人は、子孫の衰微も普通の事で目立たぬものである、處が宮家ともいはれる身分になると。

口惜しうて……それが悔しくて零落流離するやうな運命が勿體なく。

例の事なり―よくある例だ。

生まれたる家の地位や家風の通りを守

ては過い給はむと、涙ぐみつゝ念誦し給ふ樣、いと清げなり。大人びたる人々召し出でて、「うしろ安く仕うまつれ。何事も、もとよりか安く、世に聞えあるまじき際の人は、末の衰へも常の事にて、紛れぬべかゝめり。かゝる際になりぬれば、人は何とも思はざらめど、口惜しうて、さすらへむ契辱なく、いとほしき事なむ多かるべき。物寂しく心細したらむなむ、聞き耳にも、我が心地にも、過ちなくは覺ゆべき。賑はしく人數めかむと思ふとも、その心にも叶ふまじき世とならば、ゆめゆめ、輕々しく善からぬ方にもてなし閉ゆな」など宣ふ。まだ曉に出で給ふとても、此方に渡り給ひて「なからむ程、心細くな思しわびそ。心ばかりは遺りて、遊などはし給へ。何事も、思ふにえ叶ふまじき世を、な思し入れそ」など、顧み勝にて出で給ひぬ。二所、いとゞ心細く物思ひ續けられて、起き臥しうち語らひつゝ、一人一人なからましかば、いかでか明し暮さまし。今ゆく末も定めなき世にて、若し別るゝ

つてゐるのが、人の聞く所も我が心持にも疵なくは思はれませう。
阪はしく……富み榮え人並にならうと思つてもどうせ思ふやうに行きさうもない場合となるなら。
此方に—姫君達のお部屋に。
なからむ程—私が亡くなつて後も。
心ばかりは……心だけは愉快にして
音樂などはおやりなさい、何事も思ふ通りにはなりさうもないこの世だものを、氣になさるな。
二所—大君と中の君。
一人々々—私達の中どちらか一人
居なくなつたら。
若し別るゝやうもあらば—どちらか緣にでも付いて別れ〳〵に住むやうにでもなつたらどうしませう。
かの行ひ給ふ三昧—八宮のお勤めなさる念佛三昧。三昧は梵語の音譯で專思寂想の意。
いつしかと—何時お歸になるかと。
惱ましうて……氣分が惡くて歸れません、風邪だらうと思つて色々手當してゐる所です、それにしてもいつもより心細く再び面會もむづかしいやうな氣がします。
胸潰れて—姫君達ははつとして。
おり給はず—山からお下りにならぬ。
人奉り給へど—姫君達から使をおやりになるけれど。

やうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、戯れ事も實事も、同じ心に慰めかはして過し給ふ。

かの行ひ給ふ三昧 今日はてぬらむと、いつしかと待ち聞え給ふ夕暮に、人參りて、今朝より惱ましうてなむ參らぬ。風かとて、とかく繕ふと物する程になむ。さるは、例よりも對面心もとなきをを」と聞え給へり。胸潰れて、いかなるにかと思し歎き、御衣ども綿厚くて、急ぎさせ給ひて奉れなどし給ふ。二三日はおり給はず。いかに〳〵と人奉り給へど、殊におどろ〳〵しくはあらず、そこはかとなく苦しうなむ。少しもよろしうならば、今念じて」など、言葉にて 聞え給ふ。阿闍梨、つと侍ひて仕うまつりけり。「はかなき 御惱と見ゆれど、限の度にもおはしますらむ。君達の御事、何か思し歎くべき。人は皆、御宿世といふもの異々なれば、御心にかゝるべきにもおはしまさず」と、いよ〳〵思し離るべきことを聞え知らせつゝ、「今更に、な出で給ひそ」と諫め申すなりけり。八月二十日のほどなりけり。大方の空の氣色もいとゞ

殊におどろ〳〵しくは……特に重態といふ程ではなく何となしに苦しいのです。
今念じて—今に我慢して歸りませう。
言葉にて—お手紙は無く口上で。
はかなき御惱と……何でもない御病氣のやうですが或は御最期かも知れません。
君達の御事—姫君達のお身の上。
御宿世といふもの……運命といふものは各自別々で御座いますから、お氣に懸けても致方ありません。
思し離るべきことを—この穢土を厭離すべき旨を。
な出で給ひそ—この山寺を出てお歸りなされますな。
大方の空の氣色も……何げない空の樣子も一層物悲しく見える頃。
霧の晴るゝ間もなく……古今「雁のくる峰の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ」。
そなたの郡—父君八宮のいらつしやる山寺の方に面した郡。
明けぬなりと……もう夜が明けたのだなあと聞える時分に。
うち聞き給ふには……愈御逝去の事をお聞きになつては膽も潰れる位前後の分別もつかぬ心地がして、餘りのかうした悲しい事には涙も出ず。

しき頃、君達は朝夕霧の晴るゝ間もなく、思し歎きつゝながめ給ふ。在明の月のいと花やかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの郡あげさせて見出だし給へるに、鏡の聲かすかに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に、人來て、この夜中ばかりになむ、うせ給ひぬる」と泣く〳〵申す。心にかけて、いかに〳〵とは、絶えず思ひ聞え給へれど、うち聞き給ふには、淺ましく物覺えぬ心地して、いとゞか、る事には、涙もいづちか去にけむ、只うつぶし臥し給へり。いみじき事も、見る目の前にて覺束なからぬこそ、常の事なれ。覺束なき添ひて、思し歎くこと道理なり。暫しにても後れ奉りて、世にあるべきものと思しならはぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと、泣きしづみ給へど、限ある道なりければ、何のかひなし。阿闍梨、年ごろ契りおき給ひけるまゝに、後の御事もよろづに仕うまつる。「亡き人になり給へらむ御樣容貌をだに、今ひと度見奉らむ」と思し宣へど、今更に、なでふさる事かは侍るべき。日頃も、また逢ひ見給ふまじきことを聞え

いみじき事も……悲しい死別といつても目の前で十分名殘を惜むのが通例であるが、姫君達はお側にもゐなかつた事ゆゑ本意なさが一倍で、お歎きなさるも尤である。

暫しにても……父宮に死後れて暫くでも生きて居られようとも思はれない姫君達のお心持で、何とかして父宮のお跡を追ひたいと。

契りおき給ひける……八宮と約束して置かれた通り。

亡き人に……せめて父宮の死顔だけでも。

なでふさる事かは……何としてそんな事があつてよいものですか、嬢ですら再び貴女方にお會ひなさらぬやう宮樣に申上げた程ですから、今となつてはまして互に心を殘さぬやうな習慣をおつけなさらねばなりません。

おはしましける御有樣……父宮の寺に籠つていらしつた時の御樣子を色々聞くにつけても。

入道の御本意—八宮の出家のお望。

かう見譲る人なき……かうしてお世話を託すべき人もない姫君達の事が見捨て難いので、八宮は御存命中は朝夕お側離さず姫君達を見てゐる事を寂しい日常生活の慰めともして、流石出家しかねていらつしやつたのに、死出の旅路には先立たれる方も殘つて慕はれる方もどうにも仕方のない事だ。

中納言殿には……薫は八宮御逝去の旨をお聞きになつて。

心のどかにて……ゆる〳〵八宮にお話申上げねばならなかつた事が。

大方の世の有樣……押しなべた世間の無常が痛感されて。

なほ常の御心……矢張薫の平常の御心にも、朝あつて夕はどうなるやら分らぬ現世の無常を人より以上に觀じて居られたので、八宮のお調も別に不思議にも感ぜず、まさか昨日今日本當にお別れしようとは思はなかつたのに。

君達の御訪らひも……姫君達への御弔問も丁寧に。

また音づれ聞ゆる……他には申入れる人すらない寂しい御樣子故、悲歎にくれて何も分らぬ姫君達のお心にも、年來の御親切の深い樣子だつた事なども得心された。

世の常の程の……普通の親子の死別でもその場に當ればその悲は他に類もないやうに誰でも皆歎き惑ふものだのに、姫君達は氣安めのめども無い御身でどんな氣持がなさるだらうと薫は推量しつゝ。

後の御業—追善供養。

知らせつれば、今はまして、かたみに御心とゞめ給ふまじき御心づかひを、ならひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。おはしましける御有樣を聞き給ふにも、阿闍梨の餘りさかしき聖心を、憎くつらしとなむ思しける。入道の御本意は、昔より深くおはせしかど、かう見譲る人なき御事どもの見捨て難きを、生ける限は、旦暮え去らず見奉るを、よに心ぼそき世の慰めにも、思し離れがたくて過い給へるを、限ある道には、先だち給ふも慕ひ給ふ御心も、叶はぬ業なりけり。中納言殿には聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度、心のどかにて聞ゆべかりける事、多う殘りたる心地して、大方の世の有樣思ひ續けられて、いみじう泣い給ふ。「又あひ見むこと難くや」など宣ひしを、なほ常の御心にも、朝夕の隔知らぬ世のはかなさを、人よりけに思ひ給へりしかば、訪らひなど、また音づれ聞ゆる人だになき御有樣なれば、物覺えぬ御耳馴れて、昨日今日と思はざりけるを、返す〳〵飽かず悲しく思さる。阿闍梨のもとにも、君達の御訪らひも、こまやかに聞え給ふ。かゝる御心地どもにも、年頃の御心ばへのあはれなゞめりしなどをも、思ひ知り給ふ。世の常の程の別だに、さしあたりては、また類なきやうにのみ、皆人の思ひ惑ふものなゝめるを、慰む方なげなる御身どもにて、いかやうなる心地どもし給ふらむと思しやりつゝ、後の御業など、あるべき事ども推しはかりて、阿闍梨にも訪らひ給ふ。こゝにも老人どもにわざとこと寄せて、御誦經などの事も思ひやり聞え給ふ。

（姫君達へ）あけぬ夜の心地ながら、九月にもなりぬ。野山の氣色、まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば爭ひ落つる木の葉の音も、水のひゞきも、涙の瀧も、一つ物のやうにくれ惑ひて、かうてはいかでか限あらむ御命も、暫しめぐらひ給はむと、侍ふ人々は心細くいみじく慰め聞えつゝ思ひ惑ふ。こゝにも念佛の僧侍ひて、おはしまし、方は、佛をかたみに見奉りつゝ、時々參り仕うまつりし人々の、御忌に籠りたる限は、あはれに行ひて過す。兵部卿の宮よりも度々訪らひ聞え給ふ。（姫君へ）さやうの御返りなど、聞えむ心地もし給はず、覺束なければ、中納言にはか

うもあらざゝなるを、我をば猶思ひ放ち給へるなゝめりと、怨めしく思す。紅葉の盛に、文など作らせ給はむとて出でたち給ひしを、かくこのわたりの御逍遙便なき頃なれば、思しとまりて口惜しくなむ。御忌もはてぬ。限あれば涙も隙もやと思しやりて、いと多く書きつゞけ給へり。時雨がちなる夕つ方、

「をじかなく秋の山里いかならむ
小萩がつゆのかゝる夕ぐれ

只今の空の氣色を思しも、わけて詠めらるゝ頃になむ」などあり。大君にいと餘り思ひ知らぬ顏ならむも、餘り心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊も、げにいと餘りに人情らぬやうにて度々になりぬるを、猶聞え給へ」など、中の君を例のそゝのかして、書かせ奉り給ふ。今日まで永らへて、硯なれど近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かなと思すに、又かき曇り物見えぬ心地し給へば、おし遣りて、猶えこそ書き侍るまじけれ。やう〳〵かう起き居られなどし侍るが、げにこゝにも……山莊の方へも特に老女達に贈るやうな風にして、僧への御布施などの事も氣をつけておやりになる。

あけぬ夜の……長夜の闇の心持のまゝに。

一つ物のやうに……悉く同じ物のやうに悲を喫つて途方にくれて。

かうてはいかで……こんな風では何として定まつた姫君達の御壽命もそれまでお續きなさらうかいと。

こゝにも—山莊でも。山寺での供養に對していふ。

おはしましゝ方は……八宮の御居間の方は佛像を安置してそれをお形見と思つて拜みつゝ、これまで時時お出入してゐた人でお中陰に籠つてゐる人達は皆、殊勝にお勤をして過してゐる。

兵部卿の宮—匂宮。

覺束なければ……匂宮は姫君から返事も無いのが氣になるので、薫に對してはかうでもあるまいに私を疎外なさるのだわいと。

文など……宇治に遊んで詩でもお作りなさるつもりで。

かくこのわたりの……八宮の御逝去で宇治への御遊覽は工合わるい場合なので。

御忌—四十九日の中陰。

限あれば……物には程があるから昨今は姫君達の悲も少しは薄らいだか知らんと匂宮は想像して、こまごまと手紙をおやりになつた。

をじかなく……萩の露が袖にかゝり涙も袖にかゝるこんな夕暮に、鹿の鳴く音も悲しい宇治では、どうしてお過しで御座いますか。

只今の空の氣色を……この折柄の空の風情を何ともお感じなく御返事も下さらないのは、餘りに殺風景でせうよ。

げにいと餘り……ほんに餘りに人情が分らぬやうで、御返事上げぬ事が度重なりましたに。

今日まで……今まで生きてゐて硯など引寄せて手紙を書かうなどと思つた事かい、いつそ父君の跡を追うてこの命が死にもせずに、心外にも無事で日數が立つた事よと中の君は思召すと。

かき曇り—涙にくれ。

げに限ありけるにこそ……ほんに如何程悲しくても悲みも矢張程があるものかと思ふにつけても。

らうたげなる樣に—可憐な樣子に。

來ける御使—發足した匂宮のお使。

來たる—宇治に到着した。

いかでか歸り參らむ……今からどうして京へ歸られようぞ、今夜は泊

つてお歸りなさい。
我さかしう……大君は自分一人分別顔してしつかりしていらつしやる積りでもないが、中の君が書けぬのを默つて見ても居られず。
涙のみ……霧の立塞つた山莊では籬近く鹿が聲を揃へて啼いて居りまず、私達も涙に目先もぼつとして鹿のやうに二人聲を揃へて泣いて居りますとの意。鹿に然を懸けた。
黒き紙—鈍色の料紙。喪中ゆゑ。
夜の墨つぎも……夜の事で墨繼もよく分らないから格別手をかけた所もなく。
雨もよ—雨催ひ。
むづかしげなる篠の隈—薄氣味惡い笹藪のあたり。古今「篠の隈檜の隈川に駒とめて暫し水かへ影をだに見むと」。もと萬葉の歌の改作。
御前に召しても—匂宮が使の男を御前にお呼出しになつて。
前々御覽ぜしには……これまで時々受取つたのとは變つた筆蹟で。
いづれかいづれならむ—彼と是とどちらが姉君の手か妹君の手かと。
待つとて……御返事を待つといつて今まで起きて居られ今又お讀みになる時間の長いのは、一體どれ程思込んでいらつしやる事だらう。
御前なる人々—女房達。

に限ありけるにこそと覺ゆるも、怨めしう心憂くて」と、らうたげなる樣に泣きしをれておはするも、いと心苦し。夕暮の程より來ける御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。「いかでか歸り參らむ。今宵は旅寢して」といはせ給へど、「立ち返りこそ參りなめ」と急げば、いとほしうて、我さかしう思ひ靜め給ふにはあらねど、見煩ひ給ひて、

大君「涙のみきりふたがれる山里は
まがきに鹿ぞもろ聲になく」

黒き紙に、夜の墨つぎもたど〳〵しければ、ひき繕ふ所もなく、筆に任せておし包みて出だし給ひつ。御使は木幡山のほども、雨もよにいと怖ろしげなれど、さやうの物おぢすまじきを選り出で給ひけむ。むづかしげなる篠の隈を、駒ひきとゞむる程もなくうち早めて、片時に參りつきぬ。御前に召しても、いたく濡れ參りたれば、祿賜ふ。前々御覽せしには……

憎み聞ゆ—岡燒をする。
奉り給ふ—再び宇治へ手紙をおやりになる。
朝霧に……朝霧に友の影を見失うた鹿の聲を、いよ〳〵加減にあはれなと聞きませうかいの意。裏面は父君に後れた貴女方のお歎を好い加減に聞いて居りませうかい、衷心御同情致して居りますとの意。
諸聲は……諸聲に泣くと仰しやるが私の泣く聲も劣りはしまい。あまり情だたむも……餘り情を解したらしい風を見せて返事をしても事面倒である。以下大君の心。
一所の……これまで父君お一人の蔭に隱れてゐるのを力にして。
心より外に……望みもせぬ命を永らへて、思ひもよらぬはずみで輕卒な事が少しでもあつたら、殘してそればかり氣がかりに思つてゐられると見えた亡き父宮の御靈に疵がつかうかと。
聞え給はず—御返事をなさらない。この宮などをば……大君は匂宮のやうな方を輕々しく竝々の人體とも思はず、一寸假初の走り書の筆蹟も文句も面白く趣ある御樣子なのを、澤山さうした男を見知つて居られる譯ではないけれど、この匂宮こそまづは立派な方だと御覽にも大殿籠らねば、「待つとて起きおはしまし、又御覽ずる程の久しきは、いかばかり御心にしむ事ならむ」と、御前なる人々さゝめき聞えて憎み聞ゆ。ねぶたければなつめり。まだ朝霧深きあしたに、いそぎ起きて奉り給ふ。

匂「朝霧に友まどはせる鹿の音を
大方にやはあはれとも聞く

諸聲は劣るまじくこそ」とあれど、あまり情だたむもうるさし、一所の御蔭に隱ろへたるを賴み所にてこそ、何事も心やすくて過しつれ、心より外に永らへて、思はずなる事の紛つゆにてもあらば、後めたげにのみ思しおくめりし亡き御魂にさへ、疵やつけ奉らむと、なべていとつゝましう怖ろしうて、聞え給はず。この宮などをば、輕らかにおしなべての樣にも思ひ聞え給はず、なげの走り書い給へる御筆づかひ言の葉も、をかしき樣になまめき給へる御けはひを、數多は見知り給はねど、これこそはめでたきなめれと見給ひながら、その故々しく情あ

なりながらも。

この故々しく……匂宮の品位も風情もある態度に對して御挨拶申上げようのも不似合な身の上故、何の自分達は生涯只こんな山伏の坊さんめいて暮さうと思召す。

中納言殿の……薫への御返事だけは元々先方からも眞面目な風に申越されるので、こちらからも不愛想ではなく。

東の廂の……東の廂の間(マ)の一段低くなつた處に(喪中ゆゑ)姫君達が喪服に窶れて居られるのに。

舊人—老女、辨。

かやうには……こんなに他人行儀の扱をなさらず、亡き父宮のお心持の通り隔意なくして下されてこそ。

なよび氣色ばみたる……私は色つぽい事などに慣れませんので、お取次で申上げては言葉もうまく出て參りません。

淺ましう—我ながら不思議だと憫れてゐる位。

思ひ醒まさむ……思ひ諦めやうもない事實とも思はれぬ悲に心も混亂して居りまして、自分の氣も進まぬのに、明かな日影を見るのも遠慮されて端近う出ませぬ。

事といへば—餘りといへば。

月日の影は……明かな日月の光は御

る方に、言をませ聞えむも、つきなき身の有樣どもなれば、何か、只かかる山伏だちて過してむと思す。

中納言殿の御返りばかりは、彼よりもまめやかなる樣に聞え給へば、これよりも、いと氣疎げにはあらず聞え通ひ給ふ。御忌はてゝも自らまうで給へり。東の廂の下りたる方に、窶れておはするに、近う立ち寄り給ひて、舊人召し出でたり。闇に惑ひ給へる御あたりに、いと眩く匂ひ滿ちて入りおはしたれば、かたはら痛うて、御答などをだに、えし給はねば、「かやうにはもてない給はで、昔の御心むけに從ひ聞え給はむ樣ならむこそ、聞え承はるかひあるべけれ。なよび氣色ばみたる振舞をならひ侍らねば、人傳に聞え侍るは、言の葉も續き侍らず」とあれば、淺ましう、今まで永らへ侍るやうなれど、思ひ醒まさむ方なき夢に惑はれ侍りてなむ、心より外に空の光見侍らむもつゝましうて、端近うも、え身じろき侍らぬ」と聞え給へれば、「事といへば、限なき御心の深さになむ。月日の影は、御心もて晴々しくもて出でさせ給はばこ

自分の心から浮き〳〵して眺めたら非難もありませうが、父宮を忘れさへなさらなければ日月の光を仰いでも何の差支がありません。

行く方もなく……餘り隔をなさるので私も氣がつまつて鬱としく感じます、又御愁傷の一端をも承つて晴して上げたく存じます。

げにこそいと……ほんに類も無いやうな姫君達の悲歎の御樣子を。

御心ばへ—薫の御親切。

御心地にも……大君のお心でも、すげなくはいつたものゝ。

昔樣にても—假令父宮との舊誼を重んずる心からだとしても。

思すらむ樣……薫は姫君達の御愁傷の樣や又八宮との御誓約などを。

うたて堆々しき……薫はいやにごつごつした樣子などは無い人故、大君は厭はしくて何となく避けたいなどいふ氣は起らぬが。

知らぬ人に……今まで親しくなかつた薫に自分の扉を聞かせ、何だか薫を力にしてゐるやうな事などもあつたこの日頃の事を考へ續けるのも大君は流石に心苦しくて極りが惡いけれど、微に一言二言應答だけはなさる有樣がほんに悲の爲に氣抜けしたやうな風だから。

几帳の透影—几帳の帷子の隙間から

そ、罪も侍らめ。行方もなく いぶせう覺え侍り。又思さるらむ端々をも、明らめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、人々「げにこそいと類なげなめる御有樣を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程」など、人々聞え知らす。御心地にもさこそいへ、やう〳〵心靜まりて、よろづ思ひ知られ給へば、昔樣にても、かうまで遙けき野邊を分け入り給へる志など、いとこまやかに懷かしういひて、うたて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、氣疎くすゞろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく聲を聞かせ奉り、すゞろに賴み顏なる事なども、ありつる日頃を思ひ續くるも、流石に苦しうてつゝましけれど、ほのかに一言など答へ聞え給ふ樣の、げによろづ思ひほれ給へるけはひなれば、いとあはれと聞き奉り給ふ。黑き几帳の透影のいと心苦しげなるに、ましておはすらむ樣、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

「色かはるあさぢを見ても墨染に

ちらりと見える大君の姿。
ほの見し明けぐれ―一寸隙見をした時の事。明けぐれは明方の暗さ。
色かはる……秋も末となり淺茅の色の枯れて變りゆくのを見るにつけても、鈍色の喪服に悄然としていらつしやる貴女を想像致します。
色かはる袖……常と變つた鈍色の袖をば淚の露は宿り所としてゐますが、私の身は全く落着く所もありませんとの意。おき處は露の緣語。
はつるゝ絲は―古今「藤衣はつるゝ絲はわび人の淚の玉の緒とぞなりぬる」。藤衣は喪服のこと。
入り給ひぬなり―奥へ入つてしまはれたらしい。
几帳越の薫の推量。
老人ぞ……老女辨がとんでもない代理に出て來て。
あり難く淺ましき事―世にも稀な驚くべき事、卽ち女三宮と柏木との祕密をいふ。
故院―源氏。
人となりゆく……次第に成人してゆく年齡につれて。
世の中の匂―この世の榮華。
只かう靜やかなる……只こんなに閑靜な御住居が八の宮樣の氣に入つて居られたのに、かくお亡くなりなされたのを見たにつけ。
假初の世……無常な世が悟られる心

と、獨言のやうに宣へば、

大君「色かはる袖をばつゆのやどりにて
我が身ぞさらにおき處なき

はつるゝ絲は」と、末はいひ消ちて、いといみじく忍び難きけはひにて入り給ひぬなり。引きとゞめなどすべき程にもあらねば、飽かずあはれに覺ゆ。老人ぞ、こよなき御かはりに出で來て、昔今をかき集め、悲しき御物語ども聞ゆる。あり難く淺ましき事どもを見たる人なりければ、かう怪しう衰へたる人とも思し捨てられず、いと懷かしう語らひ給ふ。薫「いはけなかりし程に、故院に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと、思ひ知りにしかば、人となりゆく齡にそへて、官位、世の中の匂も、何とも覺えずなむ。只かう靜やかなる御住居などの、心に叶ひ給へりしを、かくはかなく見なし奉りつるに、いよいよいみじく、假初の世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうて

も湧いて來たけれど。
心苦しうて……お氣の毒にも跡にお殘りの姫君達を私の羈絆など申上げては何だか懸想でもしてゐやうだが、永らへて八宮のお願みを違背せず姫君達のお世話を申上げたいが爲に出家もせずにゐます。
覺なき御舊物語―思ひもよらぬ貴女の昔話。柏木と女三宮との祕密。
世の中に……この世に執着して立身し子孫を殘さうとも思はなくなりましたわい。
この人―辨。
御けはひなどの……薫の御樣子が全く柏木かと思はれる位似ていらつしやるので。
古への御事―亡き柏木の事。
聞えやらむ方も……申上げやうもなく淚に溺れてゐる。
この人はかの大納言の……辨は柏木の乳母の子で。
この姫君達―八宮の姫君達。
年ごろ……辨は長年九州に放浪して歸り、姫君達の母君(辨のいとこ)も亡くなられて後、柏木方には疎遠になるし八宮が尋ね出して山莊に置いていらつしやる譯である。
人も―辨は人柄も。
心地なからぬ……物の分らぬ女でもないと八宮も思召して。

ときまり給へる御事どもの、絆など聞えむは、かけ〳〵しきやうなれど、永らへても、かの御言あやまたず、聞え承はらまほしさになむ。さるは覺なき御舊物語り聞きしより、いとゞ世の中に跡とめむとも覺えずなりにたりや」と、うち泣きつゝ宣へば、この人はましていみじく泣きて、えも聞えやらず。御けはひなどの、只それかと覺え給ふに、年ごろうち忘れたりつる古への御事をさへ取りかさねて、聞えやらむ方もなくおぼほれ居たり。この人はかの大納言の御乳母子にて、父はこの姫君達の母北の方の母方の叔父、左中辨にてうせにけるが子なりけり。年ごろ遠き國にあくがれ、母君もうせ給ひて後、かの殿には疎くなり、この宮には尋ね取りてあらせ給ふなりけり。人もいとやむごとなからず、宮仕慣れにたれど、心地なからぬ者に宮も思して、姫君達の御後見だつ人になし給へるなりけり。昔の御事は、(辨へ)年頃かく朝夕に見奉りなれ、心隔つる隈なく思ひ聞ゆる君達にも、一言うち出で聞ゆる序なく、忍び籠めたりけれど、中納言の君は、舊人の間はず語り、皆

昔の御事は―柏木の事に就いては。
君達―姫君達。
中納言の君は……薫の方では、老人の無駄口は皆通例の事ゆゑ、假令辨が思慮無しに祕密をしやべり廻らぬにしても、あの氣恥かしい姫君達のお心には聞いて御存じだらうよと推量されるのが妬ましくも苦々しくも感ぜられるので、その點からだけでも姫君達を又他人の物にしてしまひたくないと思ひ付く動機にもなりさうな事である。
今は旅寢も……八宮亡き今は泊る事も何だか工合惡い氣がして。
これや限の……これ限で或は御面會も出來まいと八宮の仰しやつたのを、何のそんな事があらうと先の事を當にして、とう〳〵本當に再びお目にかゝれなくなつてしまつたは八月、今もまだその引續きの秋ではないか、大した日數も立たぬ間に最早八宮のお行方も分らずあつけない事である。
殊に例の……特に世間普通の人のやうな裝飾もせず。
ひき隔てつゝ……障子や襖を引隔てつゝ僧達が詰めて居り。
佛は皆かの寺に―佛像は皆あの阿闍梨の山寺に。
……かうした坊さん達の人影までなくなつた時分、この山莊に殘つて物思をなさる姫君達の心持を推量なさるにつけても。
秋霧の……秋霧の晴れぬ空を眺めつつ胸も霧に閉されたやうに思ひ結ぼれてゐる折柄、尙一層物悲しく恰もこの世は假の世だと知らせるかの如くに、かり〳〵と雁が鳴いて渡る。
兵部卿の宮―匂宮。
この君達の……宇治の姫君達の事を話題になさる。
今はさりとも……八宮が亡くなられた今は、如何に心强い姫君でも靡け易いだらうと思召して、匂宮は熱心に手紙をおやりになる。
女方は―姫君の方では。
世にいといたう……匂宮は非常に好色だといふ評判が世間に廣がつて好ましく艶つぽい御樣子であらうに、こんな草深い宿から御返事など上げたらその手ぶりも、どんなに世馴れず舊式な事だらうと、姫君達は自ら我が身を見下げて居られる。
かく頼み難かりける……これ程あつけない父宮の御壽命だつたものを、まさか昨日今日死別しようとは思はないで、只世間一般の無常な事のみを朝夕の口癖に父宮に聞かされ例の事なれば、おしなべて淡々しうなどはいひ廣げずとも、いと恥かしげなる御心どもには、聞き置き給へらむかしと推し量らるゝに、妬くもいとほしくも覺ゆるにぞ、又もて離れてはやまじと、思ひ寄らるゝつまにもなりぬべき。今は旅寢もすゞろなる心地して、歸り給ふにもこれや限の」など宣ひしを、などかさしもやはとうち頼みて、又見奉らずなりにけむ、秋やはかはれる、數多の日數も隔てぬ程に、おはしにけむ方も知らず、あへなき業なりや。殊に例の人めいたる御しつらひなく、いと事そぎ給ふめりしかど、いと物清げにかき掃ひ、あたりをかしくもてなし給へりし御住居も、大德達出でいり。此方彼方ひき隔てつゝ、御念誦の具どもなどぞ變らぬ樣なれど、「佛は皆かの寺に移し奉りてむとす」と、聞ゆるを聞き給ふにも、かゝる樣の人影なども、いと胸痛う思しつゞけらる。「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、詠めさして立ち給ふに、雁鳴きて渡る。

「秋霧のはれぬ雲居にいとゞしく
この世をかりといひ知らすらむ」
兵部卿の宮に對面したまふ時は、まづこの君達の御事を扱ひ種にし給ふ。今はさりとも心安きをと思して、宮は懇に聞え給ひけり。はかなき御返りも、聞えにくくつゝましき方に、女方は思いたり。世にいといたう好き給へる御名のひろごりて、好ましく艶に思さるべかめるに、かういと埋づもれたる葎の下より、さし出でたらむ手付も、いかにうひ〳〵しく古めきたらむなど、思ひくたし給へり。「さても淺ましうて、明け暮さるゝは月日なりけり。かく賴み難かりける御世を、昨日今日とは思はで、たゞ大方定めなきはかなさばかりを、旦暮のことに聞き見しかば、我も人も、後れ先だつ程しもやは經むなど、うちも思ひけるよ。來し方を思ひ續くるも、何の賴もしげなる世にもあらざりけれど、只いつとなく長閑になが め過し、物怖ろしくつゝましき事もなくて經つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影もうち連れ聲

れ又實例をも見てゐたので、誰も人は後れる先だつなどいふ程の歳月の相違はよもあるまい、一樣に皆死んでゆくものだなど、あつさり考へてゐた事よ。

何の頼もしげなる……何といつて格別よい事のあるこの世でもなかつたけれど。

いつとなく長閑に……常に物靜に詠めて月日を過し。

例見ぬ人影も……これまで見慣れぬ人々も打連れて何か申入れると。

二所—大君と中の君お二人。

乾す世もなくて—涙を乾かす暇もなくて。

心細く……今の有樣は心細く悲しいことだのに、運の直る春が來てほしいものだなど、氣を落さずにいふものもある。

羅き事かな—運の直るなどはむづかしい事よ。

向の山—阿闍梨の山寺。

人も參り通ひしか—使や何かが往復する事もあつたのである。

いかゞと大方に……どうしていらつしやいますかと一通りの挨拶で稀には姫君達に音信なさるけれど、お話相手もなくなつた今は、何しに自身で時々でも參上しよう。さるべき事と—尤な事と。

づくれば、まづ胸つぶれて、物怖ろしく侘しう覺ゆる事さへ添ひにたるが、いみじう堪へ難きこと」と、二所うち語らひつゝ、乾す世もなく

て過し給ふに、年も暮れにけり。

雪霰ふりしく頃は、いづくもかくこそはある風の音なれど、今始めて思ひ入りたらむ山住の心地し給ふ。女ばらなど、あはれ年はかはりなむとす。心細く悲しきことを、改まるべき春待ち出でてしがなと、心を消たずいふもあり。(姫君達の)難き事かなと聞き給ふ。向の山にも、(八宮が)時々の御念佛に籠り給ひし故こそ、人も參り通ひしか。阿闍梨もいかゞと、大方に稀に音づれ聞ゆれど、今は何しにかはほのめき參らむ。いとゞ人目の絶え果つるも、さるべき事と思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりし山賤も、おはしまさで後、たまさかにさし覗き參るは、珍しく覺え給ふ。この頃の事とて、薪、木實ひろひて參る山人どもあり。阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて、(阿闍梨)年頃に習ひ侍りにける宮仕方に稀に音づれ聞ゆれど、今は何しにかはほのめき參らむ。いとゞ人目の絶え果つるも、さるべき事と思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりし山賤も、おはしまさで後、たまさかにさし覗き參るは、珍しく覺え給ふ。この頃の事とて、薪、木實ひろひて參る山人どもあり。阿闍梨の室より、炭などやうの物奉るとて、(阿闍梨)年頃に習ひ侍りにける宮仕へなどをお贈りになつた事を姫君達が思ひ出して又おやりになる。

法師ばら童など—使に來た坊さんや子供達。

御髪など……父宮が假令御出家なされても、さうして御存命でさへあつたら。

いかにあはれに……親子別居してどんなに寂しく心細くとも全くお目にかゝれぬ事がありませうかい。

君なくて……父君が時々寺にお籠りの頃はあの山の松の雪も懷かしかつたに、父君御逝去後、寺への往復も絶えた今ではあの松の雪をも貴女は何と御覽ですか。

奥山の……奥山の松葉に積る雪は消えても又再び降り積ることもあるが、亡くなられた父宮もせめてその雪のやうに再び歸つていらつしやるものと思つてよいものなら、

嘸嬉しいでせうに。

中納言の君は……薫は新年は多忙ゆゑもちよいと宇治を訪問する事も出

おはしまさで後—八宮御逝去の後。

年頃に……年來習慣として差上げた物を、今では父宮が入らつしやらぬからといつて廢するのが心細いので、例の通りお送り申します。

必ず冬籠る……八宮からは毎年必ず阿闍梨の方へ冬籠りの防寒用に綿入などをお贈りになつた事を姫君達が思ひ出して又おやりになる。

法師ばら童など—使に來た坊さんや子供達。

御髪など……父宮が假令御出家なされても、さうして御存命でさへあつたら。

いかにあはれに……親子別居してどんなに寂しく心細くとも全くお目にかゝれぬ事がありませうかい。

君なくて……父君が時々寺にお籠りの頃はあの山の松の雪も懷かしかつたに、父君御逝去後、寺への往復も絶えた今ではあの松の雪をも貴女は何と御覽ですか。

奥山の……奥山の松葉に積る雪は消えても又再び降り積ることもあるが、亡くなられた父宮もせめてその雪のやうに再び歸つていらつしやるものと思つてよいものなら、

嘸嬉しいでせうに。

中納言の君は……薫は新年は多忙ゆゑもちよいと宇治を訪問する事も出

風防ぎつべき綿衣など遣はしゝを、思し出でて遣り給ふ。法師ばら童べなどの登り行くも、見えみ見えずみ、いと雪深きを、泣く〳〵立ち出でて見送り給ふ。(姫君達)「御髪などおろい給うても、さる方にておはしまさましかば、かやうに通ひ參る人も、自ら繁からまし。いかにあはれに心細くとも、あひ見奉ること、絶えて止まましやは」など語らひ給ふ。

(大君)「君なくて岩のかけ道絶えしより

松の雪をもなにとかは見る」

中の君、

「奥山の松葉につもる雪とだに

消えにし人をおもはましかば」

羨ましくぞ又も降りそふや。

中納言の君は、新しき年はふとしも、え訪らひ聞えざらむと思して、おはしたり。雪もいと所狹きに、よろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひして、輕らかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず

思ひ知られ給へれば、例よりは見入れて、御座などひき繕はせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取り出でて、塵掻き拂ひなどするにつけても、宮の待ち喜び給ひし御氣色などを、人々も聞え出づ。對面し給ふ事をば、つゝましくのみ思いたれど、思ひ限なきやうに人の思ひ給へれば、いかゞはせむとて聞え給ふ。うち解くとはなけれど、前々よりは少し言の葉續けて、物など宣へる樣、いと目安く心恥かしげなり。かやうにてのみは、え過し果つまじと思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな。猶移りぬべき世なりけりと、思ひ居給へり。宮のいとあやしく怨み給ふ事の侍るかな。あはれなりし御一言を承はり置きし樣など、事の序にもや漏らし聞えたりけむ。又いと限なき御心のさがにて、推し量り給ふにやあらむ。こゝになむ、「ともかくも聞えさせなすべきと賴むを、つれなき御氣色なるは、もてそこなひ聞ゆるぞ」と、度々怨じ給へば、心より外なる事と思ひ給へれど、里のしるべいとこよなうも、えあらがひ聞えぬを、何かは、いとさしももてなし聞え給ふらむ。

せうか。

こゝになむ……私に向つて、何とか然るべく自分の爲に姫君へ口添へしてくれる筈と當にしてゐるのに、姫君達がつれない御態度なのは貴方が取持が悪いのですと、匂宮が度々お怨みなさるので。

里のしるべ……宇治の里への手引をすべき立場の私ゆゑ餘り强く匂宮に斷りも申しかねますのに。古今、「蚤の住む里のしべるにあらなくに恨みんとのみ人のいふらむ」。

何かは……何故貴女は匂宮をそんなにお嫌ひなさるのでせう。

すい給へるやうに—匂宮を好色の浮氣者だといふやうな風に。

なほざり言など……冗談口など仰しやり懸けるやうな女で輕つぼく靡き易いのなどを。

心を立つる方……我(が)を張る事もなく穩かに鷹揚な人こそ。

とあるもかゝるも……どのやうにあらうとも大目に見て。

いかゞはせむ……どうしようぞ仕方がない、これもかうなる運命だなどと觀念するでせうから。

なか〳〵心長き……男の浮氣なのが却て長く添ひ遂げる例を示すこともあります。

崩れそめては……一旦伸が崩れかけすい給へるやうに、人は聞えなすべかめれど、心の底あやしう深うおはする宮なり。なほざり言など宣ふわたりの心輕うて、靡きやすなるなどを、珍しからぬものに思ひおとし給ふにや、となむ聞く事も侍り。何事にもあるに從ひて、心を立つる方もなく、おほどけたる人こそ、只世のもてなしに從ひて、とあるもかゝるも斜に見なし、少し心に違ふ節あるにも、いかゞはせむ、さるべきぞなども、思ひなすべかめれば、なか〳〵心長き例になるやうもあり。崩れそめては、龍田の川の濁る名をも汚し、いふかひなく名殘なきやうなる事なども、皆うちまじるめれ。心の深く沁み給ふべかめる御心樣にかなひ、ことに背く事多くなど物し給はざらむをば、更に輕々しく、始をはり違ふやうなる事など、見せ給ふまじき氣色になむ。人の見奉り知らぬ事を、いともてなしなどは、心の限盡して仕うまつりてむかし。御中道の程、亂り足こそ痛からめ」と、いとまめやかにていひ續け給へば、我が御自

らの事とは思しもかけず、人の親めきて答へむかしと思し廻らし給へど、猶いふべき事の葉もなき心地して、「いかにとかは、かけ〳〵しげに宣ひ續くるに、なか〳〵聞えむことも覺え侍らで」とうち笑ひ給へるも、おいらかなるものから、けはひをかしう聞ゆ。「必ず御みづから聞し召しおふべき事とも思ひ給へず。それは雪を踏み分けて參り來たる志ばかりを、御覽じ分かむ御心にても、過させ給ひてよかし。かの御心寄せは、又殊にぞ侍かめる。ほのかに宣ふ樣もはべめりしを、いさや、それも人のわき聞え難きことなり。御返りなどは、いづ方にかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、ようぞ戯れにも聞えざりける、何となけれど、かう宣ふにも、いかに恥かしう胸潰れましと思ふに、え答へやり給はず。

大君「雪ふかき山のかけはし君ならで
又ふみ通ふあとを見ぬかな」

と書きてさし出だし給へれば、「御物あらがひこそ、なか〳〵心おかれると次から次へと不名譽な事も起つて、終にはすつかり跡形もなく緣が切れてしまふやうな事も世間にはあるやうです。龍田の川は、拾遺雜、「神なみの三室の岸や崩るらむ立田の川の水の濁れる」によるか。

心の深く……匂宮の深く執する御心持に叶ひ、これといつて拗ねる事などの多くない女を、匂宮は決して輕々しく初と後と愛情が變るやうな風を顯すやうな御樣子ではありません。

人の見棄り知らぬ……匂宮の事に就いては私は他人の知らぬ事までよく承知して居りますが。

さもやと……匂宮を夫にしてもよいといふお心持になられたらその蝶などは。

御中道の程……雙方の間を奔走するには隨分わるい脚も疲れる事でせう。

我が御自らの……大君はその話を御自分の事だとはてんで思はず、親ぶつた考で中の君の事にして返答しようと。

いかにとかは……何とお答申上げませう、懸想めいた事ばかり仰しやり續けるので却て申上げやうもなくなりまして。

必ず御自ら……匂宮のお話を必しも貴女御自身の事としてお考へなさるにも及びますまい、貴女御自身の方は御姉樣心で以て、私の雪踏み分けて苦勞も厭はずに參上した深い心持をお酌み下されてお過しなされませ、匂宮の懸想して居られるのは實は中の君なのです。

ほのかに……匂宮がちらりとお文を上げた事もあつたやうですが、御姉妹のどちらを日當かそれも人の判斷しにくい事です、御返事はお二人のどなたがなされますか。

ようぞ……よくこそ冗談にも今まで匂宮へ自分が返事しなかつた、何と具體的のお話ではないけれど薫がかう仰しやるにつけても、これまで匂宮へ返事したことでもあつたらどんなに恥かしく胸潰く事だらうにと、大君が思召すと。

雪ふかき……雪深い山の棧は人が踏み通うた路も見えぬ如く、私も貴方より外には文を通はした事も御座いません。文に踏みをかけた。

御物あらがひこそ……御辯解なさるのが却て氣が置けさうです。

つら〳〵閉ぢ……表面の意は明白、裏は、意地を張つて容易にお靡きなさらぬ中の君を匂宮に手引しがてら、先づ大君との戀を成立たせた

侍りぬべけれ」とて、

薫「つら〳〵閉ぢ駒ふみしだく山川を
しるべしがてらまづや渡らむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも、淺うは侍らじ」と聞え給へば、(大君ハ)思はずに物しうなりて、殊にいらへ給はず。けざやかに、いと物遠くすみたる樣には見え給はねど、今樣の若人達のやうに、艶氣にももてなさで、いと目やすく長閑なる心ばへならむとぞ、推し量られ給ふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと、思ふに違はぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみ寄るも、(大君ハ)知らず顏なる樣にのみもてなし給へば、心恥かしうて、昔物語などをぞ、物まめやかに聞え給ふ。「暮れはてなば、雪いとゞ空も閉ぢぬべう侍り」と、御供の人々聲づくれば、歸り給ひなむとて、心苦しうながめ暮さるゝ御住居の樣なりや。只山里のやうにいと靜なる所の、人も行きまじらぬ所に侍るを、さも思しかけば、いかに嬉しく侍らむ」など宣ふも、いとめでたかるべき事かなと、

いものだとの意。
さらばしも……さうなつてこそ貴方に盡す親切も特に深いことでせうとの意。萬葉「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわが思はなくに」。宣長は「しるし」をしるべの誤としたが從ひ難い。
思はずに物しうなりて―意外で氣障りになつて。
けざやかに……大君は際立つて近寄り難く取澄ましたやうにはお見えにならぬが。以下薫の推量。
艷氣に―仇つぽく。
推し量られ給ふ……推量される大君の御樣子である。几帳越の想像。
思ふに違はぬ―望んでゐた通りの。
事に觸れて……薫が話のきつかけ毎に大君に戀心を仄めかすのをも。
只山里のやうに……私の邸は全く山里のやうに閑靜な場處の、餘り人も繁く來ない所ですが、そこへ引移る御心でもありましたら。
いとめでたかるべき……大君が薫の邸に行かれる事になつたら誠に結構な事だなあと、小耳にはさんで喜ぶ女達。
いかにさやうには……何でそんな事にはならうぞと。
かの御移り香……一五九一頁參照。
薫衣―薫を慰けたやうな濃い薫。

片耳に聞きてうち笑む女ばらのあるを、中の君はいと見苦しう、いかにさやうにはあるべきぞと、見聞き居給へり。御菓子よしある樣にて參り、御供の人々にも、肴など目やすき程にて、土盃さし出ださせ給ひけり。かの御移り香もて騷がれし宿直人ぞ、鬢頬とかいふ面付、心づきなくてある。はかなの御賴もし人やと見給ひて、思し出でたり。

「いかにぞ。おはしまさで後、心細からむな」と問ひ給ふ。うち顰みつつ、心よわげに泣く。「世の中に賴む寄るべも侍らぬ身にて、一所の御陰に隱れて、三十餘年を過し侍りにければ、今はまして、野山にまじりも侍らむも、いかなる木の本をかは賴むべく侍らむ」と申して、いとど人わろげなり。おはしましゝ方あけさせ給へれば、塵いたう積りて、佛のみぞ花の飾爲へず。行ひ給ひけりと見ゆる御床など取りやりて、かき拂ひたり。本意をも遂げばと、契り聞えしこと思し出でて、

「立ちよらむ蔭とたのみし椎が本
むなしき床になりにけるかな」

心づきなくてある―感服しない恰好をして居る。
はかなの……これが姫君達の力にして居られる男とは便りない御介錯ではあると、薫は御覽になつて。
おはしまさで後―八宮御逝去の後。
一所―八宮御一人。
野山にまじり……野山に身を隱してしまふにしても賴む木蔭がない、即ち何處へ引込むにしても便りがないの意。
いとど人わろげなり―元來醜い顏が一層ぶざまである。
おはしましゝ方―八宮のいらしつた佛間の方。
行ひ給ひけりと……八宮が生前坐つて勤行なされたものと思はれる床を取片附けて。
本意をも遂げばと―薫は若し出家の望を遂げたら八宮を師と賴まうと。
立ち寄らむ……師と賴まうと誓ては當にしてゐた八宮が既に空しくなられたのが痛ましくも悲しいことよとの意。椎が本は椎は僧衣の染料となる物故に、優婆塞の八宮を譬へていつた。
若き人々―侍女達。
御庄など……附近にある薫の莊園を世話する人々の處へ秣などを取りにやつたのは、お供の者共の處置とて柱により居給へるをも、若き人々は覗きてめで奉る。日暮れぬれば、近き所々に、御庄など仕うまつる人々に、御秣取りに遣りける、君も知り給はぬに、田舍びたる人々は、おどろ〳〵しく引き連れ參りたるを、怪しうはしたなき業かなと御覽ずれど、老人に紛はし給ひつ。大方かやうに仕うまつるべく、仰せ置きて出で給ひぬ。

年かはりぬれば、空の氣色うらゝかなるに、汀の氷解けわたるにつけても、（姫君達へ）かうまで永らへけるもあり難くもと詠め給ふ。聖の坊より、雪消に摘みて侍るなり」とて、澤の芹、峰の蕨など獻りたり。いもひの御臺に參れる、「處につけては、かゝる草木の氣色に從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々のいふを、何のをかしきならむと聞き給ふ。

大君「君がをる峯のわらびと見ましかば
知られやせまし春のしるしも」

中君「雪深きみぎはの小芹誰がために

で薫は御存じもないのに。
はしたなき業かな……時宜を辨へぬ
困つた事よと薫は思召したが、老
女辨に面會に來たやうにお取繕ひ
なされた。
大方かやうに……大體平常もこんな
風に姫君達をお世話申すやうお申
付になつて。
あり難くもと—稀有なことと。
聖の坊—山の阿闍梨の住居。
いもひの御齋……精進の御膳にそれ
を調理して姫君達に差上げたのを。
處につけては—場所柄につけては。
草木のけしきに……草木の榮枯につ
けて歲月の移り變る兆も見えるの
が面白い。
君がをる……假令出家なされてでも
父宮が籠つていらつしやる山だつ
たら、そしてこれがその山からお
送り下された蕨だつたら、春の景
物として興も覺えようものを。
雪深き……雪深い汀にも芹は萌えた
が、父宮が居られるなら摘んで上
げようものを、今は誰の爲に摘み
興じようぞ、私は親無しでして。
中納言殿よりも……薫からも匂宮か
らも、何彼の時々につけて姫君達
に音問をなさる。
宮かざしを……匂宮は、「同じかざし
を折りてけるかな」と詠んで送つ

摘みかはやさむ親なしにして」

など、はかなきことうち語らひつゝ、明し暮し給ふ。中納言殿よりも宮よりも、折過さず訪らひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かるやうなれば、例の書き漏らしたるなゝめり。花盛の頃、宮かざしを思し出でて、そのをり見聞き給ひし君達なども、「いと故ありし親王の御住居を、又も見ずなりにしことなど、大方のあはれを口々聞ゆるに、いとゆかしう思されたり。

「つてに見しやどの櫻をこの春は
霞へだてず折りてかざさむ」

と心をやりて宣へりけり。あるまじき事かなと見給ひながら、いと徒然なる程に、見所ある御文の上べばかりをもて消たじとて、

「いづくとか尋ねて折らむ墨染に
霞みこめたる宿のさくらを」

猶かくさし放ちて、つれなき御氣色の見ゆれば、誠に心うしと思しわ

た去年の初瀨詣の歸りをお思出しになつて。(一六〇五頁參照)。
君達—匂宮に隨行した貴公子達。
いと故ありし—誠に風情のあつた。
つてに見し……嘗ては間接に見たあの宇治の姫君を今年の春は直接手に入れたいものだとの意。姫君を櫻に譬へた。
心をやりて—得意になつて。
あるまじき……とんでもない事と中の君は御覽になりながらも。
上べばかりを……表面の挨拶だけは綺麗にして情趣を壞すまいと。
いづくとか……父宮の喪に鈍色を服して沈んでゐる私を、どこと尋ね寄つて色戀めいた事を仰しやるのでせう、私はとても應じかねますとの意。櫻は自ら喩へた。
さし放ちて—中の君がてんで相手にならず。
御心に……匂宮は中の君の事で思案に餘つては只もう取成し方が悪いやうに薫を樣々お責めになるので。いとうけばりたる……萬事姫君達の身を引受けて世話してゐもるやうな顏で匂宮に應答して。
あだめいたる……匂宮の浮氣つぽい心持など發見なさる折々は。
いかでかゝらむには—どうしてそんな浮氣な風では姫君をお世話出

たる。御心に餘り給ひては、たゞ中納言を、と樣かう樣に責め恨み聞え給へば、をかしと思ひながら、いとうけばりたる後見顏に、うち答へ聞えて、あだめいたる御心樣をも見顯はす時々は、「いかでか、かゝらむには」などと申し給へば、宮も御心づかひし給ふべし。「心に叶ふあたりを、まだ見つけぬ程ぞや」と宣ふ。大殿の六の君を思し入れぬこと、なま怨めしげに大臣も思したりけり。されど、「ゆかしげ無き中ひなるうちにも、大臣の事々しく煩はしくて、何事の紛をも見咎められむがむづかしき」と、下には宣ひてすまひ給ふ。その年三條の宮燒けて、入道の宮も六條院に移ろひ給ひ、何くれと物騷がしきに紛れて、宇治のわたりを久しう音づれ聞え給はず。まめやかなる人の御心は、又いと殊なりければ、いとのどかに、おのが物とはうち頼みながら、女の心ゆるび給はざらむ限は、あざればみ情なき樣に見えじと思ひつゝ、昔の御心忘れぬ方を、深く見知り給へと思す。
その年、常よりも暑さを人々わぶるに、河づら涼しからむはやと思ひ

來ませうぞ。
心に叶ふあたりを……この浮氣も畢竟氣に入つた女をまだ見附けないからその間だけですよ。
大殿の六の君を……壻に望まれてゐながら、匂宮が夕霧の六の姫君を一向相手にせぬのを。
大臣も—夕霧も。
ゆかしげ無き……夕霧の息女の壻になる事は元々親戚關係の間で平凡な緣だといふ中にも、殊に身分高い夕霧が仰山らしく面倒で、たまに蔭で忍び事でもした場合大目に見てくれさうもないのが厄介だ。
下には—内々では。
すまひ給ふ—うんと仰しやらぬ。
入道の宮—女三宮。
まめやかなる……實直な薫のお心持は又格別であつたから。
おのが物とは……大君を自分のものとは安心して居りながら、大君の方でお打解けなさらぬうちは、此方から戯れて同情のない無理業などはしたくないと。
昔の御心……自分が八宮との舊情を忘れぬ點を大君が痛感せよかしと薫は思召す。
俄にまうで給へり—薫は急に宇治へ御出かけになつた。
宮のおはせし—生前八宮のいらしつ

出でて、俄にまうで給へり。朝すゞみの程に出で給ひければ、あやにくにさしくる日影まばゆくて、宮のおはせし西の廂に、宿直人召し出でておはす。そなたの母屋の佛の御前に、君達物し給ひけるを、氣近からじとて、我が御方に渡り給ふ御けはひ、忍びたれど、自らうち身じろき給ふ程近く聞えければ、なほあらじに、こなたに通ふ障子のはしの方に、懸金したる所に、穴の少しあきたるを見置き給へりければ、外に立てたる屏風を引き遣りて見給ふ。こゝもとに几帳を添へて立てたる、あな口惜しと思ひて、ひき歸る折しも、風の簾をいたう吹きあぐべかゝめれば「あらはにもこそあれ。その御几帳押し出でてこそ」といふ人あゝなり。鳴滸がましきものゝ、嬉しうて見給へば、高きも短きも、几帳を二間の簾に押し寄せて、この障子に向ひて、あきたる障子より、あなたに通らむとなりけり。まづ一人たち出でて、几帳よりさし覗きて、この御供の人々の、とかう行きちがひ、涼みあへるを見給ふなりけり。濃き鈍色の單に、萱草の袴のもてはやしたる、なかな

た。
君達—姫君達。
氣近からじと……餘り薫の御座所に接近してはゐまいと、姫君達御自身のお部屋に移られる御樣子が。
なほあらじに—薫はそのまゝ落着いては居られぬ氣持で。
こなたに通ふ障子—姫君の方から薫のゐる方への通路の襖。
こゝもとに—その鍵穴に近づけて襖の向側に。
押し出でてこそ—押遣つたがよい。
鳴滸がましきものゝ—薫は今の侍女の言葉を、馬鹿だなあとは思つたものゝ。几帳を簾の方へ押出せば鍵穴から却てよく見えるゆゑ。
高きも短きも—高い几帳も低い几帳も。卽ち四尺の几帳と三尺の几帳。
二間—廂のうちにある。こゝが佛間。
あなたに—姫君達が自分のお部屋に。
一人—中の君が一人。
この御供の人々—薫の供人達。
濃き鈍色—最も近い骨肉關係ゆゑ喪服の色を濃くしたもの。
萱草の袴—喪服の場合に用ゐる黄ばんだ色の袴。
もてはやしたる—配合の工合で鈍色を引立たせて見せたのが。
そびやかに—すらりとして。
袿に少し足らぬ—袿より少し短い。

か樣かはりて花やかなりと見ゆるは、著なし給へる人柄なゝめり。帶はかなげにしなして、數珠ひき隱して持給へり。いとそびやかに、樣體をかしげなる人の、髮、袿に少し足らぬ程ならむと見えて、末まで塵のまよひなく、艶々とこちたう美しげなり。傍目など、あならうたげと見えて、匂ひやかに柔かにおほどきたるけはひ、女一の宮もかう樣にぞおはすべきと、ほの見奉りしも思ひ比べられて、うち歎かる。又ゐざり出でて「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせ給へる用意、うち解けたらぬ樣して、よしあらむと覺ゆ。頭付、かんざしの程、今少しあてになまめかしき樣なり。「あなたに屏風も添へて立てゝ侍りつ。急ぎてしも覗き給はじ」と、若き人々何心なくいふあり。「いみじうもあるべき業かな」とて、後めたげにゐざり入り給ふほど、氣高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。黑き袷一襲、同じやうなる色合を著給へれど、これは懷かしうなまめきて、あはれげに苦しう覺ゆ。髮さはらかなる程に落ちたるなるべし、末すこし細りて、「色なり」とかいふ